

遊戯王 ARC—if (アーカイブ)

小鳥 戯遊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

阿久津遊介は普通の遊戯王好きな高校一年生。

アニメの愛からキャラデッキを好んで使うファンデュエリストだ。

ひよんなことから誰も知らないシンクロモンスターを手に入れたことで世界は一変する。

そこはなんとあの「遊戯王デュエルモンスターズ」シリーズの世界だった。自分周りの人間関係にプラスしてアニメに出てきたキャラクターたちが目の前でバトルを繰り広げていく。

だが彼の知るレジェンドデュエリストとは少し違うようにも感じる……

そして彼はかつてない異次元のデュエルを強いられることになるのだ……

※多くのカードテキストはOCGに準拠していますが、細かいルールや裁定は滅びのバーストストーリームで粉碎☆玉砕☆大喝采しています。ご容赦ください。

## 目次

I F    1 : 出会い	1
I F    2 : 異次元の決闘者	6
I F    3 : 試される絆 どうする、遊介!?	12
I F    4 : V S 廉次郎! 脅威のミニチュアル	17
I F    5 : 新たな脅威! チーム5D's	22
i f    6 : セキュリティの不動遊星	26
i f    7 救出作戦開始	31
i f    7.5 : 廉次郎&遊矢! 奇跡のタッグデュエル!	37
i f    8 : 新たな力 神秘眼の聖装竜(シークレットアイズ・スコール・スラツシユドラゴン)	43
i f    9 : 課外講師 ブルーノ	48
i f    10 : 決めろ、アクセルシンクロ!	53
i f    11 : レーシングデュエルの罠	60
i f    11.5 : 舞い降りる不死鳥	66
i f    12 : 前へ	73
79	
i f    13 : 紅蓮の魔の手! 地縛神スカーレット・ノヴァ!	
i f    14 : 廉次郎散る	86
i f    15 : 笑顔	94
i f    16 : 揺れ始める心	99
i f    17 : 覇王の再臨	106
i f    18 : 心の闇	113
i f    19 : 開発! 新たな力!	120
i f    20 : 開発課の誇りと意地をかけた決闘!	126

if    21 : アーク・トライブ・マジシャン	133
if    22 : 儀式ペンデュラム！『天紋』の猛襲！	140
if    23 : 顕現せよ！ 深紫眼の聖装龍皇（ヴァイオレットアイズ・スコール・プライム・ドラゴン）！	146
if    24 : 戦いの後で	153
if    25 : いざ、海馬ランドへ	160
if    26 : 謎のタッグデュエル 遊馬&廉次郎VSアキ&シャーク	167
!	
if    27 : 因縁の二人	173
if    28 : 反撃！ 反撃！ 反撃！	179
if    29 : into the rink VR ains	184

## IF11：出会い

「じゃあ、俺は青ブルーアイズ眼の白ホワイトドラゴン 龍で直接攻撃！」

「うわああああああ！」

あつさりと友人の「ブルーアイズデッキ」に敗れ去ってしまった。どうして俺はカードに見放されちまつてるんだ。中盤まではなんとか持ちこたえていた。シンクロ召喚もした。何がダメだったんだ……。

「ていうか、遊介。おまえ、遊星みたいに適当なカード入れて勝とうとしてるだろ。そんなんで勝てるブルーアイズじゃないよ。キャラデッキだったとしても選定するカードつてもんがあるだろ」

遊戯王デュエルモンスターズ……俺たちをカードゲームという熱狂に陥れる恐ろしくも楽しいゲーム。今日もカードシヨップのデュエルコーナーで友人の友崎克広とともにキャラデッキで遊んでいた。

「新しいカード欲しいけど、金欠だし、遊星が使ってたカードもないし帰ろうぜ。カツツン」

「おい、見ろよ遊介！ 知らないシンクロモンスターが飾ってるぜ？」

カツツンこと、克広が指さした先には白いカードの上に黒い文字でブルーアイズ【紫 眼の聖装竜】とかかれたモンスターカードがレジカウンタに飾ってあった。

「ああ、これね。新作なのかな？ よくわからないけど、店の奥にあった掘り出しもんさ。君たち、買わない？」

値段は一枚2500円と書かれている。高い。高すぎる。正直パック？ いたほうがまだマシかもしれない。

「レベル7で効果持ち。効果は手札デッキから装備魔法1枚を発動か。簡単に打点があげられるけど、微妙な効果だな。パワーツールちよつと強くした感じだな」

「いや、でもよお遊介。こいつメインで、装備カード任意枚数破壊したらその枚数分相手のフィールドのカード手札にバウンスできるぜ？」

まあまあ強くね？ 元々の攻撃力も2500で申し分なし。お前

のよくわからんシンクロデツキにはもってこいだろ」

よくわからんとはなんだよと思いつつも汎用シンクロの一つとしては悪くないかな……………」

「いや、でもそれじゃキャラデツキ構築した意味ないじゃん！」

「お前のデツキ作るってのも面白いんじゃないかね？ それこそお前の信じるデツキとの絆ってやつw」

「鼻で笑うなよ」

実際、カツツンの言葉には思うところがあった。自分の考えた最高のデツキとエースを持つっていいなあ。この間、誕生日でもらったお金もあるし買ってみるか？

「自分への誕生日として買ってみてもいいかな」

「お、兄ちゃん気前いいねえ！ でも、俺正直カードの価値とかわかんないままつけた値段だからさ。やっぱ高い？」

「そうだったのかよ！ それだったら高いわ！ キラキラしたカードとかならわかるけど、ノーマルそうだし、カードテキストの強さも微妙で環境にも食い込まないぞ？ 美品でも2、300円くらいじゃね？」

「そっか、じゃあ500円」

「おいおいおいおいおいおい、この店員話聞いてたか？ 聞いたうえで値段釣ろうってのか？ ふざけんなよ……………」

「100円」

「490円」

「120円」

「450！」

「うーん、200」

「くっ、350……………」

「いいやダメだ。210」

「おいおい…………… わかったじゃあ」

「250円!!」

「うわっ、君もしかして初めからその値段を？ いやあ、もういいよそれ」

よし、1/10にまで値下げに成功したぞ！　ちゅーか、この店員  
値段決めガバガバすぎんだろ……………」

「よかったな遊介！　すげえ儲けじゃん」

「まあな。俺の値切り交渉あつてのことだよな」

紫の瞳からこれまで持つているカードと違うなにか力のようなものを感じる。こいつが、こいつとスターダストをうまく使って俺のオリジナルデッキを作るんだ。

「じゃあ、また明日学校で」

「おう、じゃあな！　今度は俺に勝てるデッキ組んで来いよ、遊介」

カツツンと別れを告げてカードショップから自転車をこいで自宅へと戻ろうとすると一人の女の子が俺の行く手を阻んでいた。

「あー、ごめん。どいてくんない？」

「あなたは光、それとも闇？」

「何？　中二病？」

「すべてを照らす紫の瞳をどう使うの？」

「えっ？　もしかしてこのカード持ち主？　でもごめんね、もう俺が買ったから。なんに使うなんて決闘者なんだからわかるだろ。勝つて、負けてエンジョイするだけだよ」

「そう、ならあなたにこれを……………」

そういうと彼女は一枚のカードを渡した。

「いや、悪いよ……………　ってあれ？　いない」

なんだつたんだあの子……………。変わった子だったな。ていうかなニコレ？「シン・クリボー」!?　ははは、また流行りに乗ったカードだな。

「光属性チューナーモンスターなら悪くないか。ま、もらっていくよ」  
どこにもいない彼女にお礼を言って家に戻った。相変わらず家族は元気だ。

「ただいまー！」

「ゆうちゃんおかえり」

「母さん、いい加減その呼び名やめろって」

「別にいいじゃない。友達と遊びに行ってたんでしょ、先に風呂入ったら？」

「おう」

母さんに言われて駆け足で風呂場へと向かう。

「ふう、生き返るう〜！」

一人、湯船につかって言葉を放つ。

あの子、クリボーをくれた女の子可愛かったなあ……。イタイ感じだったけど。それにしても、今日はカード2枚もゲットしちゃった。

【紫眼の聖装竜】、さてどうやって使おうか……。楽しみだな。

デッキを考えているうちに寝落ちしてしまったのだろうか、気づけば朝になっていた。

次の日、街の様子が少し変わっていた。なんというか、ちょっとずれている感じがした。

家のインターホンがなった。きつとかつつんだらう。ドアを開けると

「おう！ 遊介。ちゃんと起きてんじゃん」

「そら、学校いくからな。ていうか、なにその恰好」

彼はびっくりするくらい派手な赤色の服を着こんでワクワクしたような目つきで俺を急がせる。

「何って制服だよ！ 制服。オシリスレッドの」

「はあ？ オシリスレッドだあ？ デュエルアカデミアでも行くつもりか？ GXの世界じゃあるまいし」

「え？ 俺らアカデミアの生徒じゃん。ほら、さっさと行こう」

「こいつ頭おかしいのか？ ちょっと、簡単なテストをしてやろういや待ってくれ。お前、記憶おかしいぞ！ 俺の名前、言えるか？」

「もちろん。阿久津遊介、へっぽこスターダスト使いだろ」

へっぽこは余計だがスターダストデッキを使うのはあつてる。

「じゃあお前は？」



「友崎克広、社長さんにはまけるけど青眼使いだ。早くお前もレツドの制服着て来いよ。遅れるぞ。またクロノス校長先生に怒られんぞ」

「え？ あ、ああ」

こいつ、アニメの見すぎだろ。今時GXネタなんて流行んねえよ。まあとりあえず、今はこいつの口車に乗るしかないか。

「あ、ゆうちゃん。おはよう。制服、洗っておいたわよ」

丁度いい所に母さんが来た。さすがに俺の制服はいつものブレザーだろと思っていたが、俺の認識が甘かった。

「うそやろ。オシリスレツドの制服……」

「そろそろでしょ。あんた、実技で明日香先生にボコられたって泣いて帰ってきたじゃない」

ああ、もうツツコむ気失せた。俺、どうやら夢見てるみたいだわ……………。

## IFⅡ2：異次元の決闘者

困惑しながらも唐突に表れたアカデミアの制服の袖を通してカツツンとともにそのアカデミアとやらへと向かう。

「なあ、カツツン。急にアカデミアとか意味わからんんだけど」

「遊介、お前の方が意味わからんぞ。いままで俺たち凸凹オシリスでやってきた仲だろ」

「ええ？ 何それ、だっさ」

カツツンの走る方向についていくと町の中に大きな校舎が立っていた。

たしかGXのデュエルアカデミアって孤島にあったイメージだったけど……

夢の中だからちぐはぐなのかもな。

「あなたたち！ また遅刻？」

「げ、天上院先生」

カツツンが呼んだその先には青を基調としたスーツに赤系のネクタイを締めた女性が立っていた。天上院というと明日香ってことだよな……。アニメだと卒業してからの話とかないはずだからこんなのおかしいんだよなあ。

「遊介くん、ちゃんと授業受けないと次のデュエル試験で留年するかもしれないのよ？ その辺わかってる？」

「え？ ああ、はい……」

「ドロップアウトボーイズはやっぱり繰り返すノーネ」

ゆっくりと歩いてきた柔和そうな顔つきの外国人が俺たちの肩に手を置く。

「クロノス校長先生」

ああ、もう完全にGXのアフターストーリーじゃん。どうなってん

の？

「明日香くん、生徒のため鬼になるのも教師の役目ナノーネ。しかし、鬼の姿ばかりでは生徒はついてこないノーネ。だからこそ、天使族のようなやわかい微笑みで……。つてあれ、誰もいないノーネ!! マンマ・ミーヤ！　せつかくの私のいいセリフが!」

あのクロノスって人、たしかにクロノス先生っぽいけどやっぱ年くつてるよな。妙にリアルだし。ホントに俺の知ってる世界が遊戯王の世界みたいになっちまったのか？

教室に入るとめちやくちや騒がしいやつとさつそくデュエルをしている人間がいた。

「レディース・アード・ジェントルメン！　これから榊遊矢によるペンデュラムシヨールをお見せしましょう！　まずは手札より、時読みの魔術師と星読みの魔術師でペンデュラムスケールをセツテイニング！　これによりレベル2〜7のモンスターを同時に召喚可能！　出でよ、俺のモンスターたち！　まずは手札のEMウィップヴァイパー、EMカレイドスコルピオン。そしてEXデツキにいったオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!」

「二気に三体もモンスターが並んだって罨カードがあるから大丈夫だってんの。俺のグレンザウルスが返り討ちにしてやる!」

男の間にはグレンザウルス一体とトラップ一枚のみ……。いや、どう考えても詰みだろ。つていうか、黄色のラーイエローの制服着た榊遊矢っておかしいだろ!!　作品違うし。

「EMウィップヴァイパーの効果でグレンザウルスの攻撃力と守備力を入れ替える！　バトル！　オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンでグレンザウルスに攻撃！　螺旋のストライクバースト!」

「馬鹿め！ 罨カード魔法の筒ってあれ発動しない？」

「時読みの魔術師のペンデュラム効果は、ペンデュラムモンスターが攻撃するときダメージステップまで罨を発動できない！ そしてオッドアイズの攻撃はモンスターのバトルでは倍になる！ 1200の戦闘ダメージを食らえ！」

「うわああああ！」

相手していた方のライフはゼロになった。つまり、榊遊矢の勝利というわけだ。だけど、エンタメイトの使い方といい、ペンデュラムの使い方といい、完全に遊矢だ。

「榊君、もうデュエルは終わった？ そろそろ授業初めていい？」

「あ、はい！ 明日香……先生」

ん？ なんかいいにくそうに話したな。ARC-Vでは明日香も出てたらしいけど、それと関係が？

「じゃあ授業始めるわね。今日は、実戦を交えながら召喚方法について復習していくわね。じゃあ、赤馬くん。あなたなら、大体の召喚はできるわね？」

「儀式以外ならデツキ構築済みです……」

青い制服に見合わない赤いマフラーと、赤い眼鏡をかけた銀髪の男が階段を下りて教壇に立つ。間違いない、彼は……

「げえっ!? 赤馬零児!?!」

あかばれいじ

「なにか、私に用が？」

「あ、いえ……。すみません」

ひいひい……。怖えよ！ DD使いの赤馬零児ってまじかよ。この夢何でもありかよ。

「対戦相手、誰にする？ あなたに見合う相手、中々いないと思うけど……」

「…………。では、先ほど私を呼び捨てにした彼を選択します」

「え、俺え!」

眼鏡をカチャツとかけなおしながら俺を指さす。いきなり強敵に目を付けられたよ。俺まだこの世界に慣れてもないし、前に買ったカードも出せるように調整したばかりなのによお…………。まあ、いや。勝っても負けても次の糧になるならやらないわけがない!

「どうした、怖気づいたのか?」

「やってやる! このデュエル、受けて立つ!」

「じゃあ、デュエルディスクとDゲイザーをセットして」

ん??? 俺、どっちも持ってないし…………。ていうか、デュエルディスクとかの設定はゼアル式なんだ。

「どうした。もっていないのか?」

赤馬は眼鏡に指で触れた後、デュエルディスクをセットした。もしかして、あの眼鏡Dゲイザー対応してんの?

「遊介、机に忘れているぞ!」

カツツンが俺にディスクとDゲイザーを投げ渡してきた。これが俺のデュエルディスク?

なんかモチベ上がったきた!

「よし、俺のシンクロデッキ試させてもらおう!」

「ほう、シンクロ召喚か。私を幻滅させるなよ。先攻は私がもらう」

「デュエル!」

赤馬零児：LP4000 手札5枚

「私は永続魔法、地獄門の契約書を発動。この効果により私は【DD】モンスターを手札に加える。私はDDD死偉王ヘル・アーマゲドンを手札に加える。DD魔導賢者ガリレイ、ニュートンでペンデュラムスケールをセッティング! 我が魂を揺らす大いなる力よ!この身に宿りて闇を引き裂く光となれ! ペンデュラム召喚! 地獄の重鎮、DDD死偉王ヘル・アーマゲドン!」

「え？ 一体だけ？ あと2枚は？ もしかして事故ですかあ？」  
「そうやって軽口を叩いているのも今のうちだ。DDスワラル・スライムの効果により【DD】融合モンスターは融合魔法カードなしで手札の【DD】モンスターを素材として融合召喚できる。手札のスワラル・スライムとDDバフオメツトを使用し、融合！ 現れよ、DDD神託王ダルク。先攻は攻撃できない。ターンエンド」

うわあ……。いきなりダルクとヘル・アーマゲドンかよ。いやでもバックに罫も魔法もないということとはワンチャン狙えるか？ 出すとしたら攻撃力3000以上のモンスターか、あいつらを返り討ちにできる魔法、罫カード……。

阿久津遊介：LP4000

「俺のターン、ドロー!!」

手札：6枚

ジャンク・ブレード

ジャンク・フォアード

スターダスト・シンクロン

調律

ファイティング・スピリッツ

シン・クリボー

なるほど……。ここは普通、調律でクイック・シンクロン呼び込んでフォアードを使ってジャンク・デストロイヤーだけ……。

「自分フィールド上にモンスターが存在しないとき、ジャンクフォアードは特殊召喚できる！ 出でよ、ジャンク・フォアード！ そしてジャンク・ブレードを通常召喚。そしてジャンク・ブレードをリリースして手札よりスターダスト・シンクロンを召喚！ この時、召喚・特殊召喚されたスターダスト・シンクロンの効果発動！ デッキから【スターダスト】と記されたカードを手札に加える。俺は星墜つる地に立つ閃光を手札に加える。俺は、レベル3ジャンクフォアードにレベル4スターダスト・シンクロンをチューニング！

聖者の衣をまといし竜よ、その紫の瞳で悪を照らせ！ シンクロ召喚！  
現れよ、紫眼の聖装竜!!」

「初めてみるシンクロモンスターだな。やはり、君もこの次元の人間ではなさそうだな」

「え？ どういうこと？」

「なんでもない。続けてくれ」

意味わからん……。俺が違う次元から来た？ 確かに違和感あるけど、もしかしてこの違和感の原因を知ってる？ このデュエルでそれがわかるかもしれない！

「スコールドラゴンが召喚に成功した時、装備魔法1枚をデッキから発動し、スコールドラゴンに装備。パワーゲイン！ 俺は団結の力をスコールドラゴンに装備！ そしてさらに、手札のファイティング・スピリッツをスコールドラゴンに装備！ よし、これで俺はスコールドラゴンの効果を発動する。1ターンに1度、このカードに装備された装備カードを任意の枚数破壊して発動！ 俺は2枚破壊して相手フィールドの神託王ダルクとヘル・アーマゲドンを手札に戻す！ バトルだ！ 紫眼の聖装竜で直接攻撃！ セイント・ストリーム!!」

赤馬：LP1500

遊介：LP4000

「ターンエンド！」

「ヘル・アーマゲドンは次のターン、私のフィールドに戻るが、メインフェイズに1000ポイントのダメージが発生する。そう思っているのだろうか？ 残り500ポイントで勝ち目はないと」

あの言い方、何か策があるのか……。？ いや、もう1ターンさえあればあいつの契約書の効果で自滅するはずなんだ。DDデッキの弱点はそこだ。そこさえ堪え切れれば……。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

次のターン以降に何とかつなげれた……。さて、どう出る？ 赤馬零児。

IFⅡ3：試される絆 どうする、遊介!?

赤馬零児：LP1500 手札0枚

「私のターン、ドロロー。メインフェイズに私は地獄門の契約書の効果により1000ポイントのダメージ……………くっ……………」

赤馬零児：LP500 手札1枚

「私は手札を1枚セットする。そして地獄門の契約書の効果でDDナイト・ハウリングを手札に加える。手札に加えたDDナイト・ハウリングを攻撃表示で召喚。そしてナイト・ハウリングの効果により墓地のDDバフォメットを特殊召喚! そして、バフォメットの効果を発動。ナイト・ハウリングのレベルを6にする。私はレベル4DDバフォメットにレベル6となったDDナイト・ハウリングをチューニング。シンクロ召喚、レベル10 DDD疾風大王エグゼクティブ・アレクサンダー」

攻撃力3000のシンクロモンスター、DDD疾風大王エグゼクティブ・アレクサンダーがモンスターカード2枚で出てくるとかお得だよなあ……………マジ強すぎ……………」

「私は、DDD疾風大王エグゼクティブ・アレクサンダーで君の紫眼の聖装竜に攻撃」

もちろん、通すしかないね。スターダスト・リ・スパークは直接攻撃でしか使えないから破壊されるのを見るしかない……………」

「ああああ。俺の準エースが……………」

阿久津遊介：LP3500

「やはり、狙いはスターダストか。だが、私の前には攻撃力3000のエグゼクティブ・アレクサンダーがある。さあどう出る」

どうでも何も……………」

相手の伏せカードはおそらく契約書を破壊するカード。次のターン涼しい顔で攻撃してくるだろう。だったら、なにも出さなくてもいいような気がするがここは念には念をくず鉄のかかしが強制終了、あとはおろかな埋葬でシンクロ召喚を狙っていくかだな。



「俺のターン、ドロ―！」

阿久津遊介：手札3枚

調律

シン・クリボー

ジャンク・コンバーター

「なるほどねえ……。俺は手札からジャンク・コンバーターの効果発動！ 手札にあるこのカードとチューナーモンスター、シン・クリボーを手札から捨てて『シンクロン』モンスター一体を手札に加える。ジャンク・シンクロンを手札に加える。さらに俺は、手札より魔法カード、調律を発動。もう一体『シンクロン』モンスターを手札に加える。俺は、クイツクシンクロンを手札に加える。そして、デッキをシャッフルしてデッキの上から一枚墓地に送る」

墓地に落ちたのはなんとボルト・ヘッジホッグ。今日はなんだかデッキがうまく回ってるな……。まあいいや。じゃあ、

「ジャンク・シンクロンを召喚。そしてジャンク・シンクロンの効果でジャンク・コンバーターを墓地より特殊召喚。俺は、レベル2のジャンク・コンバーターにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、ジャンク・ウオリアー！ シンクロ素材となつたジャンク・コンバーターの効果発動！ 墓地よりチューナー一体を守備表示で特殊召喚できる。戻ってこい、ジャンク・シンクロン。そして、レベル5ジャンク・ウオリアーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ！ ジャンク・デストロイヤー！ そして、ジャンク・デストロイヤーのモンスター効果発動！ チューナー以外のシンクロ素材となつたモンスターの数だけカードを破壊する！ 俺はヘル・アーマゲドンを破壊！」

伏せカードは赤馬なら契約書を破壊する『契約洗浄』の可能性が高い。もし次のターンこの攻撃を凌ぐ畏だったとしても次のターン、自身の効果で敗北してしまう。きつと相手の手札が事故を起こす前提で動いているはずだ。多分大丈夫。

「バトル！ 俺は、ジャンク・デストロイヤーで直接攻撃!!」

トランプカードは伏せられたまま、赤馬のライフはゼロになった。え、俺勝ったの？ ライフ4000スタートっていうのもあるけど、なんか釈然としないなあ

「おめでとう、阿久津くん。君はデッキの絆とやらを信じて私を打ち破った」

「うーん、なんかモヤるな。伏せカード見せてくれませんか？」

そのカードはドレインシールドだった。発動させておけばもう1ターン凌げたんじゃ……。

「どうして……」

「それは後で話すでしょう」

というと、自分の机に戻っていった。呆然と立ち尽くしていると明日香が俺の手を握ってきた。おう、近くで見るとやっぱ綺麗な人だな……。

「遊介くん、まさか君が零見くんを打ち破るなんて思ってもみなかったわ。いつの間にか成長していたようね。ていうか、一番初めに出たあのシンクロモンスターはなに？ 私も知らないんだけど」

やっぱり誰も知らないカードなんだ。まあ俺も知らないんだけど……。

「普通にカードショップで売られてたものですよ？」

「そう？ まあ、開発科の子たちに聞けばだいたいのカードのことがわかるし後で案内するわ」

開発科あ？ そうか、遊戯王カードも誰かが作ったものだからそういう作り手側になりたいって人もいるのか。

「先生、少し彼を借りても？」

「え？ ええ。エクシーズと儀式を見せたかったけど白熱しすぎて授業終わっちゃったし大丈夫よ」

赤馬零児は先生に深々と礼をすると、俺についてこいと言わんばかりに目線を送る。

俺は渋々彼について行くことにした。

「阿久津遊介とかいったな。君は、もしかして我々と同じように別の

次元から来たのではないのか?」

「え? あなたも?」

「やはりか……。私と榊遊矢はデュエル中、ソリッドヴィジョンシステムがなんらかの障害を起こして光を放った後、ここにたどり着いた。ここでは私たちが出会った別の次元のデュエリストもそうでないものも混在しているようだ。なにか、心当たりはないか? 特に、君の持っていたその2枚のカード……。とか」

俺が持つ2枚のカード……。【紫眼の聖装竜】と【シン・クリボー】のことか?

「これのこと? さつき明日香さんに話したけど、ほんとに紫眼の聖装竜はカードショップに売ってたんだ。その後、クリボーの方は女の人からもらって……。」

「もらった? どんな顔つきだった?」

「いや、あんま覚えてないっていうか……。すみません、曖昧で」

「……。この件についてはもう少し私ももう少し調べてみよう。君も元の世界に戻りたいと言うなら協力してほしい」

「も、もちろん! 遊戯王の世界にいられなくなるのは寂しいけど、俺は元の世界に戻りたい! なにより、赤馬零児に頼られて一緒にになにかできるなんて光栄だよ」

「君は一つ勘違いをしている。私は君を頼っているわけではない。君が必要なカードかどうか見極めている段階だ。要は利用しているにすぎない。なにも用がないならこれで失礼する」

「あつ、ドレインシールド使わなかった理由は?」

「あのデュエル、私には不要なものだ。さらに手っ取り早く済ませてしまえば、君が伏せカードについて話を持ち掛けてくれると踏んできたからだ」

「ねえねえ、さつき授業でデュエルしてた二人だよね? 何話してるの?」

振り向くとそこには見知らぬ女性が立っていた。どのシリーズにもいない。けど、どこかで見たことのあるような顔だった。

「えつと、君は?」

「うち？　うちは、南禅寺るこ！　君と同じ、オシリスレッド。ねえ、君強いんだね！　だつてオベリスクブルーの赤馬くん倒しちやっただもん！」

「いや、あれは彼が……。つてもういなくなってる」

「ねえねえ強さの秘訣は？　あのシンクロモンスター見せて見せて、ねえいいでしょ？」

ずいぶんとグイグイくる子だなあ。顔もかわいいから好きになりそう……。いやいやいかんいかん！　童貞の悲しい性を抑えるんだ。

「るこ、ここぞでなにしてんだ！　また、男困らせて……。お前は距離感近すぎなんだよ」

「ねえ、レンジ！　この子さっきの『紫の瞳のドラゴン』の子だよー」

「レンジ、じゃなくて廉次郎な……。そうか、君か。開発科の許可なしにオリジナルをつくったのは」

「へ？　いやいや、これは買ったんだって」

「嘘をつくな！　お前のカード2枚ともカードアーカイブで検索してもヒットしなかったぞ！　開発科としてそんなこと許せるわけがない！　僕と勝負しろ、阿久津遊介!!」

えええ、なんか変なのに絡まれちゃったよ。これも遊戯王世界あるあるなのか？

## IFⅡ4：VS廉次郎！ 脅威のミニチュアル

どうしてこうも遊戯王のキャラって文句つけてはデュエルをしたがるんだろうな。まあ、面白いからいいんだけど、自分のことになったら全然楽しくない。

「どうした？ はやくデッキをディスクにセットしろよ」

「お前さあ、ちゃんと人の話聞こうよ」

「お前じゃない！ 僕の名前は円谷廉次郎。アカデミア開発科1年だ。カラーはラーイエロー。僕は僕の考えた最高戦力で挑む。君はその微妙な違法創作オリカで頑張るんだな」

「だから、違法でも創作でもねえって！ わかんねえ奴だな。もう、デュエルすればいいんでしょ？ デュエルすれば」

南禅寺が見守る中、円谷とのデュエルが始まった。

「デュエル!!」

円谷廉次郎：LP4000

「先攻、後攻はコイントスで決めよう。その方が平等だろ？」

意外と冷静で真面目な奴だな。てつきり勝手に決めるもんだと思ってた。

「わかった。じゃあ、俺は表で」

彼の主導の元、コイントスが行われた。結果は裏。

「僕は後攻をもらう。さ、どうぞ」

先攻・阿久津遊介：LP4000

・手札

スチーム・シンクロン

ロード・ランナー

くず鉄のかかし

スターライト・ロード

ボルト・ヘッジホッグ

うーん……。ボルト・ヘッジホッグ手札にある時点でちよい詰んでんなあ。とりあえず……………。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

とりあえず、相手が1900打点以上で殴ってきててもロードランナーが守ってくれるし、くず鉄あるしなんとかなるだろ。

後攻・円谷廉次郎：LP4000

手札5枚↓6枚

「フン、事故ったか。僕のターン、ドロー！僕は、ミニチュアル・タンクを召喚！」

いきなりオリカかよ。っていうか、レベル1で攻守100？クソよわじゃん。

「おいおい、そんなんで大丈夫か？」

「ミニチュアルは特撮がテーマ、小さなものも大きく映す。ミニチュアル・タンクはフィールドにミニチュアルモンスターが存在すれば自身の攻撃力は1000になる。もちろん、自身も対象になるため、タンクの攻撃力は1000だ」

Dゲイザーを通してミニチュアル・タンクの大きさが少し大きくなった気がする。アニメでこういうの見たことあるけど、めっちゃテンションあがるな。

「さらに、僕はミニチュアル・ジェットを特殊召喚！このカードはフィールドに【ミニチュアル】モンスターが存在するとき特殊召喚できる。さらに、召喚・特殊召喚したこのカードは【ミニチュアル】と名のついた魔法・罫カードをデッキからサーチできる！僕は永続魔法ミニチュアル・セットを発動。これにより、自分フィールド上のレベル1の【ミニチュアル】と名のついたモンスターはレベル10になる！」

ええ？いきなりレベル10が二体並んだんだが？？これはもしや『来るぞ、遊馬！』案件か？

「僕は、レベル10となったミニチュアル・ジェットとタンクでオーバーレイ！二体のミニチュアル・モンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！すべてを焼き尽くせ、ランク10！ミニチュアル・破滅獣ヴァイスベーター！」

ドラゴンというより怪獣？のようなそれは大きく、瓦礫のようなものを巻き込み地上より現れた。でも、攻守2000のモンスター

か……。なら、守り切れる！

「手札より、フィールド魔法『ミニチュアルハウス』発動！これにより、自分フィールド上の『ミニチュアル』モンスターの数×1000相手フィールドのモンスターの攻撃力を下げる！さらに、ヴァイスベールの効果発動！オーバードレイユニットをすべて取り除き、相手フィールド上すべてのカードを破壊する！破滅の光！」

「なんだって!?俺は、罨カードスターライト・ロード発動！カードを2枚以上破壊する効果を無効にして破壊する！そして、EXデッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「くそっ……。カードを1枚伏せてターンエンド」

なんて厄介なカードなんだ……。スターライト・ロード伏せてなかったら大打撃だったんじゃないか？

「俺の、ターン!!」

阿久津遊介：LP4000

・手札

ボルト・ヘッジホッグ

スチーム・シンクロン

調律

・フィールド

スターダスト・ドラゴン

紫眼の聖装竜

ロード・ランナー

くず鉄のかかし

よし、来た。調律でクイック・シンクロンを呼んでジャンク・バーサーカーだな。いや、ここは紫眼でバツクのカードを戻しておくか？

「どうした、呼ばないのか？『紫眼の聖装竜』をw」

「うるさいな。じゃあ希望に答えて呼んでやる！手札より、調律を

発動！俺は、スターダスト・シンクロンを手札に加える。ボルト・ヘッジホッグを召喚。そして、そのボルト・ヘッジホッグをリリースしてスターダスト・シンクロンを特殊召喚！この時、「スターダス

ト」と記された魔法・罨カードを手札に加える。俺は、『シユーティン  
グ・スター』を手札に加える。そして墓地に行つたボルト・ヘッジホッ  
グはフィールド上にチューナーが存在するとき、墓地から特殊召喚で  
きる！ 反転召喚、ロードランナー！ レベル1ロードランナー、レ  
ベル2ボルト・ヘッジホッグにスターダスト・シンクロンをチューニ  
ング！ 聖者の衣をまといし竜よ、その紫の瞳で悪を照らせ！ シン  
クロ召喚！ 現れよ、紫眼の聖装竜！」

「来たな、オリカドラゴン。来いよ、どうせそのちんけな効果を発動す  
るんだろ？」

「当たり前だ。俺は装備魔法、ファイティング・スピリッツをデッキか  
らこのカードに装備！ そして、装備されたカードを破壊し、その枚  
数分手札に戻す！ 俺が選択するのはその伏せカードだ！」

「かかったな、馬鹿め！ 永続罨『デモンズ・チェーン』！ 紫眼の聖  
装竜の効果を無効にし、攻撃もさせない！」

「こいつ誘っていたのか。まあ、そらそうか。あれだけ煽り散らして  
たら警戒するよな、普通。まあでも相手フィールドはがら空き。」

「バトル！ 俺はスターダスト・ドラゴンで直接攻撃！ シユーティ  
ング・ソニック！」

「うわあああ！ くっ」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。さ、お前のターンだぞ？」

円谷廉次郎：LP1500

手札2↓3枚

「僕のターン、ドロー！ よくも僕のモンスターを……。だが、僕は  
すでに勝利を確信している。僕は二体目のミニチュアル・タンクを召  
喚！ そして儀式魔法、『ミニリチュアル』発動！ ミニチュアル・  
セットの効果によってレベル10になったミニチュアル・タンクをリ  
リースして手札から、ミニリチュアル・グレートシャインを儀式召喚  
する！」

「儀式召喚だど?!」



「小さな大地を照らす、偉大な光！ ミニリチュアル・グレートシャイン!! このカードは『ミニチュアル』モンスターとしても扱う。そして1ターンに1度、『ミニチュアル』カードを1枚破壊して発動する。このカードは直接攻撃できる。バトル！ 僕は、ミニリチュアル・グレートシャインで直接攻撃！ ギガンティウム光線！」

「攻撃力3000で直接攻撃!? なら、罨カード『くず鉄のかかし』！ モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「無駄だ！ グレートシャインは自身の効果で直接攻撃するとき、効果の対象にならない！」  
「う、うわああああ！」

阿久津遊介：LP1000

「まじかよ!? インチキ効果も大概にしろよ……」  
「僕はこれでターンエンド！ どうだ、僕の『ミニチュアル』デッキは！」

なんて強さだ……。でも、効果の対象にならないのは相手のターン終了時までだ。次のターン、シューティング・スターの効果であいつを破壊できれば！

## IF115：新たな脅威！ チーム5D，s

次の俺のターン、シユータイング・スターで「ミニリチュアル・グレートシャイン」破壊してやる。

「僕はターンエンド。さあ、お前のターンだ」

「俺のターン、ドロロー!! まずは罠カード『シユータイング・スター』発動! フィールドにスターダストがいるとき発動できる。フィールドのカード1枚を破壊する! 俺は『ミニリチュアル・グレートシャインを選択!』」

「させるか! 墓地の儀式魔法『ミニチュアル』を除外して発動する! このターン、『ミニリチュアル』儀式モンスターは効果では破壊されない! これは明日香先生から習った儀式コンボを参考にさせてもらった」

何だって!? そんな効果どこにも書いていなかった気がするけど……。まさか、デユエル中に書き換えたのか?

「お前、儀式魔法に細工したろ! そんな効果どこにも書いてなかったぞ!」

「知らんな。僕はこのデッキの創造主だぞ? 発動と言ったらそれは有効なんだよ!」

なんて、アニオリ脳なんだよこいつ……! 彼の言う通りミニリチュアル・グレートシャインはシユータイング・スターの効果を免れてしまった。俺の罠カードはくず鉄のかかしのみ。次のターン、またあいつの効果で直接攻撃されたらやられてしまう!

「大変だ! レンジくん!」

唐突に榊遊矢が現れた。なんだか慌てているようだけど……。あれ、っていうか俺に近づいてきた女の子、さつきまで俺たちのデユエル見てたんじゃ……。

「どうしたんだ? 榊。というか、僕の名前はしっかりと廉次郎と呼んでもらいたいね」

「そんなことより、るこちゃんがバイクに乗った男たちに!」

「なに、るこが? くそ、チーム5D，sめ……。アカデミアの面汚

しDホイーラー、今度という今度は許さん！　おい、阿久津！　このデュエルお前に預ける。榊、僕を現場へ」

「え？　ああ」

榊遊矢は円谷とともにチーム5D'sの元へと向かって行ってしまった。はあ？　彼らがアカデミアの面汚し？　一体なにがどうなってんだ……。それより、あの子が心配だ。俺も一緒に

「待て、俺も彼女を」

「君こそ待つんだ、阿久津遊介」

俺の肩を掴んでとどめたのは赤馬零児だった。どうしてこうも周りは冷静なんだ。ココは一体本当にどうなってるんだ

「なんだよー」

「状況が読めない今、動いてどうする？　君の知らない次元で無駄に動いてそれで被害が大きくなったらどうするつもりだ？　今は彼らに任せるべきだ」

「たしかに榊遊矢がいればどうにかなるかもな。そうだったとしても、動かなくちゃ。デュエルで誰かを助けられるこの世界なら俺は輝けるかもしれないんだ」

そう、いままで弱くて何もできなかった俺でもデュエルの愛と知識ならこの中でも誰にも負けてない。だから、俺はここで活躍して……。

「私は、そうやって独りよがりになって破滅の道をたどった決闘者を知っている。君もそれを知っているはずだ」

「榊遊矢……か？　でも、どうして俺がそのことを知っているの？」

「多くの次元を渡り歩くデュエリストから聞いた。我々が『アニメのキャラクター』で、そのアニメでデュエルをしていた様子を見た。おかしな話だが、私はそういう世界もあり得るということに対して妙に納得してしまった。なぜなら、君の言動や行動がその裏付けと言えるところだからだ。私の推測は間違っているか？」

彼の憶測は間違いじゃない。それにしても、自分がアニメのキャラだって言われても動揺しないんだこの人は……。俺はここに来

てから動揺してばかりだ。

「間違つて……ないです。けど、こんな世界ありえない！ デュエルアカデミアに榊遊矢や赤馬零児がいたり、天上院明日香が先生してたり、なによりチーム5D，sが、俺の大好きな遊星さんが作り上げたチームをあんな悪く言われるなんて見過ごせない！」

「待てっ うかつに動くなと……」

そんなこと言つてられるか！ 俺はどんなカードにも希望を紡ぎだす彼のデュエルに惚れたんだ。救われたんだ！ そんな不動遊星の作り上げたチーム5D，sが面汚しだなんて、信じたくない。

俺は階段を飛ばし飛ばしに降りていき、榊遊矢と円谷廉次郎の後を追つていった。学校を出ると5台のバイクが女の子を囲んでいるのが見えた。あいつらが彼らの名前を借りパクしてるやつらか！

「ジャック、ジャック・アトラスなのか？」

「知り合いなのか？ 僕はそいつには興味がない。僕は神代凌牙、貴様に用がある！」

遊矢と円谷が5人のDホイーラーに向かつてすごい剣幕で言い放っている……。つて、うん？ ジャックは分かるけど、なんでシャークがここに？ いや、もうツツコまない方がいいのか？

「榊くん、円谷！ さっきの南禅寺るこつて子は？」

「そこにいるだろ！ 協力する気で来たならさつきとデュエルディスプレイをセットしろ！ やらないなら僕の邪魔はするな」

円谷の様子がさつきよりだいぶいら立ってるみたいだ。関係の感じからして幼馴染っぽいけど、あいつとシャークの因縁ってなんだ？

IVとの因縁なら聞いたことあるけど……。それにしてもライディングデュエルしそうなやつらにスタンディングで挑むのか？

「でも、Dホイーラーにスタンディングって……」

「満足しねえなあ！ それじゃあよお！」

その声つてまさか、この世界のチーム5D，sのリーダーつて……。

「鬼柳さん、どうしてこんな女なんか拉致つたんです？」



## ifll6：セキュリテイの不動遊星

ライディング・デュエルに命を懸け、赤き竜のアザを持つ人達、チーム5D's……。ダークシングナーやイリアステルから街を救った英雄だったはずのデュエリストが、メンバーも大きく変わり暴走族やヤンキーのような人間に成り下がっていることが信じられない。

「その子を放せ！ その子を囚にしても強いデュエリストなんて来ないとかわかってるはずだ。本当の目的はなんだ、鬼柳！」

円谷は唾を飛ばして相手にがなり立てる。

「こいつには力を感じる。俺たちに黒き竜の力を与えたあの人のような力がよお……。俺は力に飢えてんだ。なんだかわからねえがずっと渴いているんだ。満足しねえ。デュエルの腕も、今の地位も……。だから、だれでもいい！俺とデュエルしやがれ!!」

渴きの正体はわからないけど、なんだか寂しそうだ。往年の親友も復讐の相手もない空虚感が彼の目から伝わってくる。やっぱり、彼には不動遊星が必要なんだ。

「円谷くん、セキュリテイは？」

「呼んでないほど馬鹿じゃない。だけど、僕は独りでも彼らに挑む！」

まずは、神代凌牙、お前からだ！」

「いちいち、フルネームで呼ぶんじゃない！ イラっとくるぜ！ ていうか、お前誰だよ」

え？ どういうこと？

「なあ、円谷。お前シャークとなんの因縁があるんだ？」

俺が聞いただしてみると

「あいつ、るこが元々好きだった相手だったんだ。だけど、あいつ『女はウザくてイラつとする』って言ってあいつのラブレター捨てやがったんだ！ だから僕はあいつを倒さなければ気が済まない。彼女の名誉のために……」

はあ、またこいつ勝手に言いがかりつけてんのかよ。しかも、自分の片思いの相手とられたからってよお……。

「お前なあ」

そうこうしているうちに、サイレン音が近づいてきた。セキュリティが来たのか？

「チーム5D, s! 今日という今日はお縄を頂戴する!」

「不動遊星……………アキ!」

なに、不動遊星だつて？ ヘルメットをかぶったままバイクを降りたセキュリティの男は、そのまま鬼柳の方に向かうも、十六夜アキの謎の力「サイコパワー」によつて吹き飛ばされてしまった。その拍子でヘルメットも飛んでいく。起き上がるとあの特徴的な力二へアーがあらわになった。

「ふ、不動遊星だ……………。マーカーなかったから一瞬気づかなかったけど」

「おーい、遊介! 急に飛び出してどうしたんだ? 授業始まるつて…………。ゲゲエ、5D, sじゃん」

授業の知らせを届けに来たカツツンでさえも彼らが悪い連中だと言う認識ということなら、この世界としての常識かもしれない。でも、俺は……………!

「君たちは早く校舎に戻りなさい。人質は俺たちセキュリティーが引き受ける! 早く!」

騒動を聞きつけた先生たちに引きつられて、校舎へと戻らされる俺たち……………。ここは、デュエルで英雄にも悪役にもなる世界。主人公補正も、デュエルの腕もない俺に何ができるって言うんだ。でも、それでも……………。

「セキュリティってどんなデュエルするんだろ」

セキュリティとのデュエルはなんとなく見たことある。でも少なすぎてわからない。だからこそ、セキュリティの不動遊星がなにを仕掛けるのか知りたい。

「ワッパー・ドラゴンとか【ゴヨウ】みたいな相手モンスターを捕縛するモンスターだな」

カツツンがドヤ顔で説明していると、チョークがヒュンっという音で投げつけられる。

「あなた達、そんなにセキュリティのデュエルが信じられないの？」

まあ、課外授業にちようどいいわ。あなた達にライディングデュエルについて教えてあげる。ついてきて頂戴」

そういうと、彼女は生徒たちに観戦室へと連れて行った。名前と部屋にあるソリッドビジョン投影用カメラがある感じだと、視聴覚室みたいなものか？

「ここは、生徒たち学園でのデュエルの様子や、街のライディングデュエルの様子が見ることができの。ここであるセキュリティの人たちのデュエルが映るといいんだけど……」

そういうとカメラを操作していると、遊星と鬼柳がデュエルしている様子が写され始めた。

「先生、多分それ！」

『俺は、レベル2ジユツテ・ナイトにレベル4アサルトガン・ドッグをチューニング！ 集いしホシを打ち砕き、新たな未来を創出せよ！

シンクロ召喚！ 出合え！ レベル6、ゴヨウ・ガーディアン！』

不動遊星は、ゴヨウ・ガーディアンをシンクロ召喚していた。だが、相手フィールドにはワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが存在する。どうするんだ？

『おいおい、そんなやつ俺のモンスターの攻撃力じゃあ通用しねえぜ？』

『それはどうかな？ 魔法カード、攻撃封じ発動！ ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを守備表示に！』

うわ、懐かしいカードすぎんだろ！

『バトルだ！ ゴヨウ・ガーディアンでワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに攻撃！ ゴヨウ・ラリアット！』

『ハンドレス手札零コンボをなめるなよ、罠カード、インフェルニティブレイク！

墓地より【インフェルニティ】カードを除外して相手フィールド上のカード1枚を破壊する！ 俺はインフェルニティ・ミラージユを除外してゴヨウ・ガーディアンを破壊！』



そんな……。遊星の手札はもうない、伏せカードもなし……。  
もしかしくなくても、あの不動遊星が負ける？

『ターンエンド……』

「エンドじゃあねえだろ！ あのセキュリティ、任せろって言ったくせにダメじゃねえか！」

円谷が立ち上がり、怒りをあらわにすると

「相手にシンクロ召喚されてもなお、アサルト・ガンドツグとジュツテ・ナイトを守り切ったところから見ると、セキュリティのデュエルタクティクスは十分にあると思うわ。相手はその上を行っていた。それだけよ」

明日香先生の冷静で神妙な言葉に円谷は、座り込み自分の膝を拳で痛めつける。結局、遊星のデュエルは敗北に終わった。これじゃ何の意味もないじゃんか！

「こうなったら、俺たちだけで取り返すしかないよ」

「取り返すたって、相手はチーム5D'sだ！ 遊介、お前じゃ無理だぜ」

俺とカツツンは小声で言い合いをしていると円谷がこちらに向かってくる。

「お前ら、さっき取り返すとか言っていた気がするが？ お前に何ができるんだ」

「少なくとも、腕の立つデュエリストなら知っている！ 彼らに頼めば」

「お前はそれを見ているだけというわけか。さすがは卑怯にもオリジナルを使ったデュエリストだな」

ドンつと教壇を叩く音が教室中に響き渡る。

「あなた達が出ていけるほど甘くはないのよ！ そのところ分かっているの？」

「分かっています。でも、るこは僕の幼馴染でかけがえのない存在なんです！ だから」

円谷が必死な目で明日香を説得していると遊矢が立ち上がり、

「先生、彼らを行かせてあげることには俺は賛成です。彼らはデユエリ  
ストの端くれですし、止めても無駄だと思います。お願いします！」

明日香はため息まじりに

「わかったわ。ただし、絶対に勝ってくるのよ！ でないと単位あげ  
てやらないんだから」

「鬼かよ……」

ボソツと俺が話すと明日香は秒速でこちらを振り向く。いやいや  
いや、なんでもありませんよ……。

「レンジ、遊介！ 俺も一緒に行く！ 一緒にるこちゃんを助けよう  
！」

「遊矢……」

「フン、せいぜい僕の足は引つ張らないでくれよ」

カツツンじゃなくてなぜか俺も巻き込んで廉次郎と遊矢の3人で  
南禅寺るこ救出作戦へと乗り込むのだった。

## iffll7 救出作戦開始

俺、円谷、神遊矢の3人で捕らわれたままの南禅寺ることを救出するため、アカデミアを後にした。

「で、当てはあんの？」

俺が二人に問いただしてみると円谷は拳を自分の手の平に合わせ  
て

「Dホイラー全員潰して聞き出す」

「いや、脳筋か！ そんなことやってたら日が暮れちまうだろ！」

「なんだと？ 情報がない今、これしか方法ないだろ！ 他に方法あるのか！」

あるはずだ。何か一つの道筋が

「不動遊星！ セキュリティの彼ならなにか知っているはずだ」

「あ？ あんな負け犬に聞く必要ねえだろ」

「遊星さんを負け犬呼ばわりすんのか？」

言い合いをしていると遊矢が間に入る。

「まあまあ、二人とも落ち着いて！ 情報がない今、遊介の言う通りチーム5D'sと戦っていたセキュリティと話をすべきだと思う」

円谷は小さく舌打ちをしてから

「はあ、わかったよ。さっさと行こう、るこが心配だ」

とりあえず、円谷の怒りを抑えられたところで、俺たちはスケートボード型Dホイールで遊星のいるセキュリティ本部へと向かうことにした。セキュリティの使うDホイール駐輪スペースに着くと一人バイクのメンテナンスをしている人影がいた。そのひたむきにバイクに向き合う背中を俺は知っている。

「遊星さん！」

バイクのメンテナンスをしていた遊星がこちらを向くと、開口早々俺たちに謝罪した。

「みんな、すまない。期待に応えられなかった」

「知ってる、見てたしな。で、相手の居所くらいわかってんだろかな？」

円谷が喧嘩腰に聞くと

「それは心配ない。鬼柳のDホイールに発信機を付けておいた」

「お、おう。デュエルの腕はなくてにやるじゃん」

「俺にはこれしかない。デュエリストの腕がない以上こういう地味なことしかできない」

そんなこと、あなたの口から聞きたくないと思いつつ唇をかみしめた。今は、この情報を頼りに5D'sのもとに行かなくちゃ…………。

「あの、その地図もらえませんか？ 俺たち、彼女を助けたいんです！」

「君たちが出る必要はない…………。俺一人で十分だ」

どうして、そこまでして一人で行きたいんだ？ 負けたのに…………。

「ふざけんな。お前が一人で行ってもまたやられるだけだろ！ 仲間とか応援呼べばいいだろ」

円谷の言葉はちよつとイラつとするけどこの状況では正しいと思ってしまう。

「俺にそんな頼れる仲間はいない。それにこれは俺自身のミスだ。俺一人の問題だ」

「お前、状況わかってんのか!? てめえのせいであるが!」

遊星の胸倉を掴む円谷に、俺は円谷の腕に手を置いた。

「お前の怒りは分かる。でも、もっとやり方ってもんがあるだろ!

遊星さんも遊星さんだ。あなたはいつもそうやって重要なときは誰にも頼らず、一人で背負おうする。もっとみんなを、今は俺たちを信じてもらえませんか?」

少しの間、静寂がこの場を包んだ。その後、遊星は苦笑いを浮かべて

「………… わかった。だが、君たちだけでは危険だ。俺も同伴させてくれ、デュエリストでもセキュリティでもなく、この街を守る一人の人間として」

「もちろんです! みんな、行こう!」

憧れていた人物とは違う次元の遊星だけど、彼と同じ時間と場所に  
いられるだけでうれしい。

4人で発信機を追っていくと港にある倉庫にたどり着いた。

「ここなのか？」

「発信機が正しいなら、ここでもいいはずだ」

円谷が遊星の持つ発信機をたどるための機械を覗いていると、フ  
ードを被った男が目の前に現れた。

「誰だ？ チーム5D、sか？」

円谷が疑問を投げかけるもフードの男はなにも答えようとしな  
かった。

するとフードの男はデュエルディスクを取り出してこちらを阻も  
うとしていた。

「なるほど、ここを通るなら勝負しろってことね。じゃあ、俺がこいつ  
引き付けておくから3人は南禅寺さんの元に行ってきて」

俺はデュエルディスクを装着しながら言うと言遊矢が

「遊介、無茶するなよ！ レンジ、遊星さん！ 行こう、るこちゃんが  
待ってる」

「阿久津……！！」

遊矢に連れられそうになった円谷はふと、こちらに振り向いてサイ  
ドデッキからカードを投げ渡してきた。

「そのカード、お前に預ける。意味くらい、デュエリストならわかるだ  
ろう」

それを見るとヴァイロン・キューブだった。なるほど、紫眼で使  
えってことか……。

「使わせてもらうよ！ 健闘を祈ってるよ、ナイト様」

円谷はこちらを見向きもせず南禅寺のこのいる方へと向かった。

「先攻後攻はどうします？ フードの人。ていうか、名前は？」

そういうも彼は一向に無視してカード五枚を取り出してゲームを  
始めます。まじかよ、俺まだ用意してないぞ？ デッキをディスクに

セットして5枚を手札に…………。

「俺の先攻、俺はヒーローアライブを発動。ライフを半分にしてレベル4以下の『E・HERO』<sup>エレメンタルヒーロー</sup>を特殊召喚する。俺は、E・HEROシャドー・ミストを召喚。シャドーミストの効果により、『マスク・チェンジ』を手札に加える。さらに俺は魔法カード『E エマージエンシーコール』を発動！ デツキからE・HEROエアーマンを手札に加える。エアーマンを召喚！ このカードの効果で俺は『AーHERO』<sup>アサルトヒーロー</sup>アイアン・メーデー」を手札に加える」

謎の男：LP2000

いきなりHEROデツキぶん回してきてるな…………。ていうか突っ込み損ねたけど、しれつと知らない『HERO』カードあったぞ？ アサルト・ヒーローなんて聞いたことないぞ？

「自分フィールド上に『HERO』モンスターが2体以上いるとき、手札のAーHERO アイアン・メーデーは特殊召喚できる！ さらに、このカードがフィールドにあり、このカード以外の『HERO』モンスターが存在するとき、融合魔法カードなしでEXデツキから『HERO』と名の付く融合モンスターを特殊召喚できる！」

「なんだって!?!」

「俺は、シャドウ・ミストとアイアン・メーデーで融合！ いでよ、EーHEROエクスタリオ！ さらに、シャドー・ミストが墓地に送られたことにより効果発動！ デツキから『HERO』モンスターを手札に加える。俺はEーHEROマリシャス・エッジを手札に加える。俺はカードを3枚を伏せてターンエンド」

いきなり、モンスター2体でしかも伏せカードの1枚にはマスク・チェンジ…………。先攻1ターン目でダーク・ロウ出せただろうに、完全になめられてるな。俺の手札は…………。正直、良いとも悪いとも言えない。

遊介：LP4000

手札

ヴァイロン・キューブ

スター・ブライイト・ドラゴン

二重召喚

シン・クリボー

シンクロ・ヒーロー

速攻のかかし

「俺は、魔法カード『デュアルサモン二重召喚』を発動！ これによりこのターン、二度召喚を行える。俺は、ヴァイロン・キューブとスター・ブライイト・ドラゴンを召喚！ スター・ブライイト・ドラゴンにヴァイロン・キューブをチューニング！ 聖者の衣をまといし竜よ、その紫の瞳で悪を照らせ！ シンクロ召喚！ 現れよ、紫眼の聖装竜！ ヴァイロン・キューブの効果発動！このカードでシンクロ召喚に成功した時、デッキから装備魔法を手札に加える。俺はファイティング・スピリッツを手札に加える。さらに、スコールドラゴンの効果で団結の力をデッキから装備する！ さらに俺は手札から、ファイティング・スピリッツとシンクロ・ヒーローをスコールドラゴンに装備！ スコールドラゴンの効果発動！ このカードに装備された装備魔法を任意の枚数破壊し、その枚数分、相手の手札に戻す！ ウルトラヴァイオレットストーム！」

俺は3枚の装備魔法カードをリリースしてエクスタリオ、そして伏せカード2枚を手札に戻そうとした。だが、分かっていたことだけどころうまくはいかない。

「速攻魔法、マस्कチェンジ。対象にとられたエクスタリオを選択して『マस्कドヒーローM・HERO』と名の付くモンスターを融合召喚する！  
フュージョン・チェンジ！ M・HEROダーク・ロウ!!」

現れたな闇野郎……。こいつの除外効果厄介すぎるんだよなあ……。だけど、素の攻撃力ならこちらが上だ！ 先にダーク・ロウを叩く！

「バトルだ！ 紫眼の聖装竜でM―HEROダーク・ロウに攻撃！  
セイント・ストリーム!!」

謎の男：LP1900

「罨カード、出幻を発動……。『HERO』が破壊されたときに発動する。デツキから『V—HERO』（ワイジョンヒーロー）を特殊召喚する。俺はV—HEROヴァイオンを特殊召喚！ さらに、俺は出幻の効果で貴様のフィールドにある紫眼の聖装竜の攻撃力・守備力を半分にする！」

クソ、罨か……！ いや、ここはシン・クリボーの真価が発揮されるときだ！

「手札から『シン・クリボー』の効果発動！ 手札のこのカードを墓地に捨てて、シンクロモンスターを対象とするモンスター効果、魔法、罨の効果は無効にする！ よって、出幻の効果は無効だ！」

「やるな。だが、俺にはまだ秘策がある。とびきりの秘策がな……。」  
秘策ってなんなんだ？ こいつ、なにを考えているんだ？



if 117. 5 : 廉次郎 & 遊矢！ 奇跡のタツグデュエル！

遊介が謎のデュエリストとデュエルをしている頃、円谷・遊星・遊矢の三人は発信機をたどって南禅寺を探していた。

「るこー！ るこー！」

「落ち着けて、レンジ」

明らかに青ざめた顔で焦っている廉次郎に対して遊矢は必死でなだめるも、彼の顔は一層剣幕になる。

「るこがいるかもしれないのに落ち着いてられるかよ！」

遊星は二人を無視して倉庫を探る。すると遠くから遊星が何かをみつける。

「二人とも、こつちだ！」

「るこー！ 大丈夫か？」

そこには柱に縄で縛り付けられていた南禅寺のこがいた。廉次郎はポケットに持っていた十徳ナイフを取り出し、縄を切る。

「怖かったあ……ま、でもシャーク様に捕らえられてしまったのは悪い気はしなかったけど」

「お前なあ、人が心配してきて一言目がそれかよ」

二人が談笑していると倉庫の暗がりから二人ほど現れた。

「あなた達は、私を楽しませてくれるのかしら？」

一人は赤と黒の少し露出の高い服を着た女性、そしてもう一人は紺と黒のコートのような服を着た男だった。

「神代凌牙……そして、十六夜アキだったな」

廉次郎はチーム5D'sの二人をにらみつけてデュエルディスクを装着する。

「この女がバカで助かったぜ。円谷、デュエルしたいんだろ？俺と！」

「そこのポンコツもろとも相手になってやるぜ！」

シャークの言葉に廉次郎は、はつきりとした怒りを覚えた。そこに追い打ちをかけるように十六夜アキは

「凌牙、ここは二人であの子を潰してあげましょう?」

「……勝手にしろ。だが、俺の邪魔をするならてめえでも容赦はしねえ」

正直、廉次郎は2対1でも戦えると自分のタクティクスを信じ込んでいた。自分の作ったオリジナルテーマ「ミニチュアル」の絶対的な自信があった。だが、彼の自信を不安視する人間もいた。

「レンジ、ここはタッグデュエルだ。俺もやるよ」

遊矢は自由となつたことを遊星に預けて、彼自身のデュエルディスクを腕に装着した。

「お前が? まあ、セキュリティのあいつよりかはマシだとは思ってるが……」

「どうした? それとも負けて女を奪い返されるのが怖いのか?」

シャークの煽りに廉次郎はDゲイザーを装着してデッキをデュエルディスクに装着した。

「お前らこそ、後悔すんなよ?」

#### TAG DUEL!!

(先) 遊矢、廉次郎vsアキ、シャーク(後)

二人で一つのライフ6000を掛けたデュエルが始まる。先攻は遊矢からスタートされた。彼は手札の時読みの魔術師と星読みの魔術師でペンデュラムスケールをセッティングし、いきなりのペンデュラム召喚を決める。

「揺れる、魂のペンデュラム! 天空に描け、光のアーキ! 手札より出でよ、俺のモンスターたち! EMシルバー・クロウ! EMマンモスプラッシュ! ……カードを1枚伏せてターンエンド」

廉次郎も負けじと自分のミニチュアルモンスターを展開させていく。

「自分フィールド上にカードが存在しないとき、ミニチュアル・バトルシップは特殊召喚できる! 特殊召喚されたバトルシップの効果発

動！ このカードが特殊召喚されたときデッキから同じレベルで違う属性の【ミニチュアル】モンスターを特殊召喚する！ 来い！ ミニチュアル・トレイン！ レベル5、ミニチュアル・バトルシップとミニチュアルトレインでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク5 亡骸ぼうがい龍 ホロボス！ 僕は、カードを4枚伏せてターンエンド」

二人のターンを見終わった後、十六夜アキは一枚ドロローしてから自分のフェイズに入った。タッグデュエルはこのターンから攻撃することもできるが、彼女は険しい表情で自分のカードを見つめていた。

「夜薔薇の騎士を召喚。召喚成功時、手札よりレベル4以下の植物族モンスターを特殊召喚。『返り咲く薔薇の大輪』を特殊召喚。私は、リバイバル・ローズにナイトローズナイトをチューニング……。冷たい炎が世界の全てを包み込む！ 漆黒の花よ…開け！ シンクロ召喚！ 現れよ！ ブラック・ローズ・ドラゴン！ ブラック・ローズの効果であなた達のフィールドを更地にしてあげるわ！ ブラック・ローズ・ガイル！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの効果によってフィールド上のカードすべてを破壊されようとした時、廉次郎は亡骸龍 ホロボスの効果を発動し始めた。

「ホロボスの効果発動！ オーバーレイユニットを一つ取り除き、カードを破壊する効果を無効にしてその発動したカードをデッキに戻す！ ブラック・ローズ・ドラゴンをデッキに戻す！ どうやら、阿久津対策で作ったこのカードが役に立ったみたいだな」

この反逆になすすべもなく、十六夜アキはカードを二枚伏せてターンエンドした。シャークにターンが回ってきて彼は、カッター・シャークを召喚し、その効果でデッキからシャクトパスを特殊召喚した。そして手札のサイレント・アングラーを特殊召喚した。レベル4のモンスターを3体並べたのならやることは一つだろう。

「俺は、レベル4のカッター・シャーク、シャクトパス、サイレント・アングラーでオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイ

ネットワークを構築！ 現れる、No. 32 海咬龍 シャーク・ドレイク！ 俺は、シャーク・ドレイクで榊遊矢のEMシルバークロウに攻撃！ デプス・バイト!!」

シャーク・ドレイクの牙はシルバークロウの首元にさっくりと傷跡を残して破壊した。さらに、シャーク・ドレイクの効果によってシルバークロウは蘇生されて攻撃力800としてもう一度戦闘を強いらそうになったのであった。だが、廉次郎は舌打ちをしながら罨カードを展開する。

「罨カード、ハーフ・アンブレク！ シルバークロウは破壊されず、ダメージを半減させる！」

発動したとしても合計2000のダメージは免れなかった。

遊矢&廉次郎：LP4000

凌牙&アキ：LP6000

「ごさかしい罨使いやがって、イラっとくるぜ！ カードを1枚セツトしてターンエンド！」

「だけど、私たちはまだライフは6000。そうそう越えられることはないわ」

廉次郎と遊矢はそれぞれに笑顔をこぼし、同時に同じ言葉を放つ。

「それはどうかな？」

「被ってんじゃねえよ、榊！」

「いやいや、君が私に被せてきたのでしょうか？ ゴホン、それでは気を取り直して私のターンに移りましょう！ 私のターン、ドロー!! 来た！ レディースアンドジェントルメーデー！ 今回は私、榊遊矢と円谷廉次郎くんのエンタメタッグをお見せしましょう！ まず私はアクションフィールド、天空の光彩を発動！ 天空の光彩の効果により一度EMシルバークロウにはぐ退場願います。そしてデッキより私のエースカードであります『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』を手札に加えます。そして、私はペンデュラム召喚！ まずは雄々しくも美しく輝く二色の眼！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！ そしてEXデッキにいったEMシルバークロウを召喚！

そして、私はEMマンモスプラッシュの効果で融合！ 二色の眼

の竜よ！ 巨獣の飛沫をその身に浴びて、新たな力を産み出さん！  
出でよ、野獣の眼光りし獰猛なる龍！ レベル8！ ビーストアイ  
ズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

そして円谷は彼のビーストアイズの召喚成功時に呼応するように  
罘カードを発動した。

「罘カード！ 『ミニチュアル・パニック』発動！ フィールド上にミ  
ニチュアル以外のモンスターが特殊召喚されたとき発動する。  
フィールドに存在する魔法・罘をすべて手札に戻す！ これで心置き  
なく戦えるな？」

「心遣い感謝しますー！」

今の二人は双子か兄弟のように以心伝心をしているように見える。  
相手のフィールドには神代凌牙のシャーク・ドレイクのみ。

「バトル！ ビーストアイズで、海咬龍 シャーク・ドレイクに攻撃！  
ヘルダイブバースト!!」

「シャーク・ドレイクが負けるだど!?!」

凌牙&アキ：LP6000↓5800

「さらにビーストアイズの効果で融合素材となった獣族モンスターの  
攻撃力の半分効果ダメージを与える！」

「なんですつて!?!」

凌牙&アキ：LP5800↓4850

「私はもう一度カードをセットしてターン終了。ですが、次はもつと  
エンタメつてくれるでしょう！ 廉次郎くん、お願いしますー！」

「僕のターン、ドロー!!」

彼は即座にミニチュアル・ジェットを召喚した。

「ミニチュアル・ジェットが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから  
ミニチュアルと名のついた魔法・罘を手札に加える！ 僕は永続魔法  
ミニチュアル・スパークフラッシュを手札に加える。そして手札に加  
えたミニチュアル・スパークフラッシュを発動！ 起動時に『ミニリ  
チュアル』と記されたカードを手札に加える。僕はミニリチュアル・  
グレートシャインを手札に加える。さらに伏せていたミニチュアル・

セットを発動。ミニチュアルジェットレベルを10にする！そしてミニチュアル・スパークフラッシュのもう一つの効果！1ターンの1度このカードと儀式の素材となるモンスターを墓地に送って、『ミニリチュアル』と名の付く儀式モンスターを儀式召喚扱いとして召喚する！ 小さな大地を照らす偉大な光！ レベル10 ミニリチュアル・グレートシャイン!!」

彼のエースモンスターであり、攻撃力3000の儀式モンスター「ミニチュアル・グレートシャイン」が彼の撮影所という名のフィールドにゆつくりと現れた。彼はそのまま、バトルフェイズへと移行した。

「ミニリチュアル・グレートシャイン、神代凌牙に直接攻撃！ ギガンテウム光線！ さらに、亡骸龍 ホロロボスでとどめだ!! リ・ボーン・クラッシュャー!」

たった数ターンの出来事。だが、遊矢と廉次郎の絆の力が勝利へとつながったのである。

「これで済むと思わないで!」

「ふん、やるじゃねえか。今日はこれで勘弁しておいてやる。じゃあな、廉次郎」

凌牙とアキは何らかの力で闇へとうっすらと消えていった。彼らがどこから来たのか、遊介の知っているアニメの世界とは別の人物なのか、それはまだだれにもわからない。

「二人ともいいデュエルだった。じゃあ、遊介の元に戻ろう」

遊星の言葉に二人はただ頷き、倉庫を後にした。

ifll8：新たな力 神秘眼の聖装竜（シークレット  
アイズ・スコール・スラツシユドラゴン）

あの二人、うまく南禅寺さんを救えただろうか……。今は彼らを  
信じてこの場を凌ぐしかない！

遊介：LP4000

「ターン、エンド……」

この場面、どう切り返す？ どう覆す？ 相手フィールドにはエ  
アーマンとヴァイオン。さて、相手はどう出る……。

「俺のターン、ドロー！」

謎の男：LP1900

その瞬間、彼の顔は見えなかったが笑ったように感じた。

「俺は、ヴァイオンの効果で墓地のダーク・ロウを除外し『融合』を手  
札に加える。エアーマンとヴァイオンをリリースして、A―HERO  
レイジバットをアドバンス召喚！ レイジバットが召喚に成功した  
時発動する。デッキから【A―HERO】と記された魔法・罫を手札  
に加える。そして、手札に加えた罫カード『アサルト・ショット』を  
発動！」

手札から罫カードが発動されることにいちいち驚いてたら正直持  
たないよね。この世界では。ていうかOCGでもたまにみるけどね。

「アサルト・ショットはデッキから【A・HERO】と名の付くモン  
スター一体を墓地に送る。そして、相手ライフにそのモンスター  
のレベル×100のダメージを与える！ 俺はA・HEROネクロムスカル  
を墓地に送る。ネクロムスカルレベルは5！ よって、500ポイ  
ントのダメージを相手に与える！」

遊介：LP3500

「そして、俺は融合を発動！ 俺は手札のマリシヤスエッジとレイジ  
バットで融合！ 闇夜に舞い降りし正義の鉄槌！ A・HERO パ  
ニツシユメンター！ パニツシユメンターのモンスター効果発

動……。墓地の【A・HERO】と名の付くモンスターをこのカードの装備魔法扱いとして装備する。このとき、このカードの攻撃力は装備したモンスターの攻撃力の半分アップする！ 俺は先ほど墓地に送ったネクロムスカルを選択。ネクロムスカルは攻撃力2000。よって攻撃力1000アップだ！」

元々の攻撃力2400に加えて1000上がって攻撃力は3400……。でもレイジバットを装備すればもっと攻撃力が上がるんじゃない？

「墓地に送られたレイジバットのさらなる効果発動！ このカードを除外して自分フィールド上の【A・HERO】を選択する。俺は当然、パニッシュメンターを選択。そのカードは二回攻撃ができる！」

「まじかよ……。確実に殺りにきてるな。でも本当にいいのか？俺が直接攻撃をまともに食らうと思うのか？」

俺の揺さぶりも全く意味もなさず彼は淡々とバトルフェイズに移行する。

「バトルだ。これで貴様もZ様の餌食にしてやる！ パニッシュメンターで紫眼の聖装竜に攻撃！ 制裁のガトリングクラッシュ！」

いともたやすくスコールドラゴンは墓地に送られてしまった。まづい、この直接攻撃をくらってしまっただけでは負けてしまふ。早く、帰ってこいやあいつら！」

遊介：LP2600

「もう一度攻撃しろ！ パニッシュメンター！」

「手札より、速攻のかかしを発動！ 相手モンスターの直接攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する！」

「無駄だ！ パニッシュメンターのモンスター効果発動！ このカードの攻撃宣言時、相手がモンスター、魔法、罫を発動した時、このカードに装備されたカードをリリースして発動する。その効果を無効にする！ 断罪される者に介錯なし！ くらえ、制裁のガトリングクラッシュ!!」

「ぐわあああああ!!」

遊介：LP200



これで俺は手札もなければライフもわずか。次になにか逆転のカードを引かなければ負けてしまう。くそっ……。どうすれば！

「手も足もでない。勝利のために、戦うためには悪に染まるしかないのだ！ かつての俺がそうであったように」

「あんだ、一体何者なんだ！」

「俺の名は、ジユウダイ。さあ、お前が泣いても喚いてもヒーローはやってこないぞ！ 己のドローに命運を賭けてみる！ 俺はこれでターンエンド！」

十代……!? 本当にこの男は遊城十代だというのか？ ありえない。V―HERO、E・HERO、E―HEROを使いこなしすぎている。どちらかという大会よりなデッキ構築だ。

「おまえが本当に遊城十代だっけ言うなら、このデュエルまったく楽しくもなんともないね！ 十代はこんなにつまんねえデュエルはない。逆転のカードを引いて笑顔を取り戻して俺たちにゲームの楽しさを教えてくれたんだ！ だから、俺もこのドローを信じる！」

ド、ロオー……!!!」

ドロウした瞬間、ドロウしたカードそしてEXデッキが光だした。え、なにこのエフェクト……。びっくりして周りを見渡すとすでに遊星たちが倉庫前まで戻ってきていた。

「遊介！ そのカードで決着をつけろ！」

遊矢が笑顔になってそのカードを指さしている。このカードは俺がデッキに入れたこともないし、OCGにもないカード。『シンカを促すクリボー』墓地のシン・クリボーを素材にして墓地からシンクロ召喚ができるらしい。

「俺は、魔法カード、『シンカを促すクリボー』を発動！ このカードは自分のモンスターゾーンにモンスターが存在せず、墓地に『シン・クリボー』が存在するときのみ発動できる！ 『シン・クリボー』1体とチューナー以外のモンスター2体までを墓地から選んで除外し、除外したモンスターのレベルの合計と同じレベルを持つ光属性シンクロモンスターをシンクロ召喚扱いで特殊召喚する！ 神秘の眼輝かせし龍よ！ 悪を捌く刃とともに降誕せよ！ シンクロ召喚！ レ

ベル8 ―神秘眼の聖装刃竜《シークレットアイズ・スコール・スラツシュドラゴン》!」

ドラゴンでありながら後頭部から背後にかけて大きな天使の輪のようなものを引つ提げて光と共に竜が降誕した。見知らぬモンスターだが、そこにある。カードもイラストもそこにあるんだ。俺はなんでこんなカードを出せるんだ?

「あいつ、また僕の知らないカードを作りやがって……!」

「いいじゃん、レンジ! ファイトオ! 遊介くん!」

円谷は俺に嫉妬のような眼差しで睨みつける。そして南禅寺さんは好機の眼差しで応援してくれている。期待に答えなくちゃ……。

「シークレットアイズのモンスター効果発動! このカードがシンクロモンスターをシンクロ素材として召喚に成功した時、相手フィールド上の裏側表示のカードを無効にして表側表示にする。そしてこのカードの攻撃力はその表側にしたカード数×300アップする! スコールシャワー!」

相手のフィールドの伏せカードは1枚……。ヒーロー逆襲だ。たしかにこのカードは強力なカードだがエレメンタルヒーローでないという意味がない。

「攻撃力3300だ?!」だが、お前のモンスターがいくら攻撃力が高くても、このターンで俺を倒すことはできない!」

「それはどうかな? バトルだ! 神秘眼の聖装竜でA・HEROパニッシュメンターを攻撃! この瞬間、シークレットアイズのもう一つの効果発動! 攻撃宣言時に墓地から装備魔法1枚をこのカードに装備する! そしてこのとき、相手の攻撃力はこのカードが装備した装備カード×300下がる! 俺は墓地から団結の力を発動する! これでお前の負けだ。静寂のバーニングスラッシュ!」

攻撃力4100となったシークレットアイズが攻撃力2100となったA・HEROパニッシュメンターを攻撃し、見事フィニッシュャーとなって勝利を収めた。はあ、よかった……。何とか勝て

た。

「やったな、遊介。るこちゃんも戻ったことだし、帰ろっか」

遊矢が俺の肩に手を回し、引っ張っていく。南禅寺もそれに乗って3人一緒にアカデミアに戻っていく。結局、あいつは本当に十代だったのか？ それに、『Z様』って言った気がするが一体何者なんだ……。

俺たちは見事、南禅寺をこの世界のチーム5D'sから取り戻すことができた。

アカデミアに戻ると俺たちを待っていたかのように明日香先生が校門前に立っていた。

「やっと帰ってきたわね。その様子だとこっちちゃんを取り戻せたよね。ま、あなた達ならできると信じていたけど……。さて、みんな休んでる暇なんてないわよ！ 今からライディングの授業なんだから」

ライディングデュエル……。Dホイールを利用したレーシングとデュエルを組み合わせた新たなデュエルスタイルだ。バイクに乗ってカードゲームするなんて、始まった当初は意味が分からなかったけど、最後の方になるとバイクに乗ることがかっこいいんだって思えた。その中でも不動遊星というキャラは俺の一番のお気に入りだ。

どんなカードでも使えない場所なんてない。どんなにクズカードと言われてもカードの力を信じて戦う姿はレベルの低いモンスターをも救うことになってゲームに汎用性が生まれた気がする。

「ライディングなんて、僕たち免許もつてないんじゃないか？」

「そこはデュエルアカデミアを創始した海馬コーポレーションの技術力よ。免許不要のDホイールくらい用意できているわ。みんなついてきて。クラスのみんなも待ってるわ」

そういうと明日香は俺たちをデュエル闘技場（スタジアム）のひとつへと連れてきた。そこは、どのスタジアムよりも広く、バイクのよなものガレージに並んでいた。Dホイールが走りやすいようにトラックが舗装されていて競輪のスタジアムみたいだった。

「すげえ！ 俺の知ってるアカデミアとやっぱ全然違うなあ……」

キラキラした眼差しで紳遊矢が闘技場を駆け巡る。確かにそうだよな。彼らにとってはアカデミアは敵でしかなかったんだ。純粋な学び舎としてこんなに優秀なところはない。

「俺もセキュリティに入る前にこんな場所で勉強しておきたかった

よ」

「え!? 不動遊星?」

そこにいたのはセキュリティの服を脱ぎすてて、いつもの青いライダースジャケットを着こんだ遊星がいた。セキュリティの彼が一体なぜここに……………」

「なんでここにいます?」

「ああ、セキュリティのライディングデュエルのタクティクス底上げのため授業を受けることになったんだ。それに俺のことは遊星で構わない。遊介」

「は、はい。遊星……………」

隣にいる遊星を焼き付けていると、奥の方からバイクの音が聞こえてきた。そしてトラックから俺たちの前にまでDホイールを走らせてブレーキを止めた。この人が今日の先生か?

「私はライディングのことは教えてあげられないから、代わりとして外部講師に来てもらったわ。紹介するわね……………」

「ブルーノ……………」 私の名前はブルーノだ。君たち、よろしく! 君たちにライディングデュエルの新たな可能性と希望を教えに来た!」

ブルーノ……………」 5D, sの中で絶望の未来から来たものの、遊星にアクセルシンクロを教え希望を見出した人。この人からライディングデュエルを教えるなんて嬉しい限りだ。

拍手と共に明日香が進行を始める。

「ここでは皆さんにまずDホイールを選んでもらいます。いろいろあるけど、初めは勘に頼ってくれて構わないわ。その後にエンジンだったりデュエルディスクの細かい設定を覚えて決めたらいいから」

俺たちは何の情報もなくDホイールを選ぶことになった。もちろん、遊星も。俺はもちろんリスペクトを込めて赤いDホイールを選ぼうとしたが、それはもう赤馬零児によって選ばれていた。

相変わらずの仏頂面だな……………」 次々と選ばれて行き、最後に白いバイクと黒いバイクが並んだ。そしてバイク争奪戦に負けたのも二人、俺と友崎だった。

「遊介、どっちがいいんだ?」

「こうなったらどっちでもいいな」

「じゃあ、俺黒もらうけど恨みっこなしだよな」

「ああ」

意外だな。友崎が黒を選ぶだなんて……。ジャック・アトラスが好きって言ってたからってつきり白を選ぶと思っていただけ。まあ、人の趣味って変わるし……。俺は白いバイクにまたがった。

「それではまず、体感としてこのフィールドを走ってもらおう。そうだな、遊星ともう一人……。そうだな、君。最後に白いバイクを選んだ君だ！」

え、俺？ 俺が遊星とライディング？

「お、俺ですか？」

「ああ、彼とライディングデュエルしてみてくれ。みんなにライディングデュエルがどんなものか見てもらうためのものだから気負わなくていい」

そう言われても、遊星とデュエルって時点で大いぶ気負ってしまっんだが……。そう思っていると遊星が手を差し伸べてきた。

「セキュリティとして君には恩がある。だが、今は模擬戦とはいえ勝負事だ。全力でぶつかってきてくれ。俺もそれに答えられるようにする」

「わ、わかりました。俺も俺なりの全力でやります！」

ライディングデュエルでは、まずはじめにフィールド魔法「スピードワールド2」を発動させることが基礎だ。そのあとはレースでコーナを先に取ったほうが先攻という流れになっている。

「さあ、二人とも準備はいい？」

ピ

ピ

ピ

「ライディングデュエル！ アクセラレーション！」

ピーーーーー！！！！

Dホイールは走り出していくも俺は遊星の後をついて行くだけに

した。デツキパワーが低いなら無理に先攻を取るより後攻で確実に1ドローした方が動きやすい。それはどんなデュエルでも同じだと思う。

「ライディングデュエルはスピードワールドの特性上、先攻もドロロができる。攻撃できないのも変わりない！ それでもなお、遊介！君は後攻を取ると言うのか」

「俺には俺の戦略があるんですよ！」

「ならば、先攻はいただく！」

さつきまでのDホイール同士の接戦はどこへ行つたのやら。遊星は性能をフルに活用して俺を追い抜いて行つた。さすが、チーム5D、sの要で、バイクのことを知りつくしている人物だ。

「俺のターン！ ドロー！」

遊星：LP4000 spc1

「俺は魔法カード調律を発動！俺はジャンク・シンクロンを手札に加える！俺はジャンク・シンクロンを召喚！そして俺はジャンク・シンクロンの効果によりシールド・ウイングを特殊召喚！俺はレベル2シールドウイングにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす！光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウオリアー！」

遊星を最後まで支えたモンスター、ジャンク・ウオリアーが彼のフィールドに現れた。セキュリティのカードと違う。彼自身のデツキな気がする。

「遊星、セキュリティのカードはどうしたんすか？」

「あのカードはセキュリティからもらい受けたカード。これは俺が昔使っていたカードだ。俺はこれで、昔信じていたデツキの絆を、集いし星が大きな力になることを証明したい！カードを2枚伏せてターンエンド！」

やっぱりどこまで切り取つても遊星さんは遊星さんだった。この世界で何が起きて自分のカードを信じられなかったのかは知らない。だけど、彼はこの街を信じて、守ろうとしてセキュリティになったのだと思う。

「なら、俺もその気持ちに応えます！ ドロー！」

遊介：LP4000 spc:2

「俺は、モノ・シンクロンを捨ててクイツク・シンクロンを特殊召喚！  
ジャンク・コンバーターを通常召喚！ 俺はレベル2ジャンクコン  
バーターにレベル5クイツクシンクロンをチューニング！ 集いし  
叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！  
出でよ、ジャンク・アーチャー！」

「なに、ジャンク・アーチャーだと？」

「あなただけが、『ジャンク』を使えるだなんて思わないでくださいよ。  
俺はジャンク・アーチャーの効果発動！ デイメンション・シユート  
！ ジャンク・ウオリアーを除外する！」

まずは、ここで攻める！

「ジャンクウオリアーで攻撃！ スクラップアロー！」

「罠カード、くず鉄のかかし！」

やはり伏せていたのはくず鉄のかかしだったか……でもあの  
カードがあることが分かっただけでも対処はいくらでもできる。

「カードを3枚セットしてターンエンド」

これで俺の手札はゼロとなってしまった。ただどここれでいい。さ  
あ、俺の憧れた不動遊星はどう切り抜けてくれるんだ？



if 110 : 決めろ、アクセルシンクロ!

いきなりのダイレクトアタックに対して遊星はくず鉄のかかして回避したものの、彼の手札は知りえないからどういう風にこの盤面を返すつもりなのかわからない。だからこそ、デュエルは楽しい。

「俺は昔、このデッキである人物に挑んだ。だが、結果はギリギリのところまで負けてしまった。それから何度もその人を打ち負かそうと頑張ったが駄目だった。だが、その諦めの悪さを買われてセキユリテイに入ることができた。デッキの絆より性格に効率的な構築。そして相手への妨害と拘束。それがセキユリテイのデッキ構築だった」

「それが、その時のあなたにとって都合のいい逃げ道だったのかもしれない。それでも、諦めずにデッキとの絆を信じるのがあなたのいいところだ。あなたの全力が見たいんだ! 遊星!」

「俺は……俺のターン! ドロー!」

遊星 : LP 4000 spc : 3

「俺は魔法カード『シンクロ・キャンセル』を発動! ジャンク・ウオリアーをEXデッキに戻してジャンク・シンクロンとシールド・ウィングをフィールドに戻す! そして、手札からボルト・ヘッジホッグを召喚! レベル2のシールド・ウィングとボルトヘッジホッグにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング! 集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す! 光射す道となれ! シンクロ召喚! 吼えろ、ジャンク・バーサーカー!」

シンクロキャンセルを活かして、新たなシンクロモンスターに繋がっていくの俺でもできた試しがないぞ? やっぱり遊星はすごい! 彼と本気のデュエルをしているという

だけで俺の心がたぎる!

「来てみる! 遊星! 俺はそんなモンスターじゃあやられないぞ!」

「ジャンク・バーサーカーの効果発動! ジャンク・シンクロンを除外してその攻撃力分、相手のモンスターの攻撃力を下げる! バーサー

カーソウルクラッシュユ！」

攻撃力2300のジャンク・アーチャーが一気に1000まで攻撃力が下がってしまった。

え、原作にはない効果名じゃね？ これめっちゃレアじゃん。確かにだいたいの「ジャンク」系列のモンスターには効果名や攻撃名があてがわれてるわりにはないやつもあるんだよなあ。初めて(?)知った。

「ジャンク・バーサーカーでジャンク・アーチャーに攻撃！ スクラップ・アックス！」

「ぐわっ……！ それでも俺は繋げてみせる！ 畏カード、奇跡の残照を発動！ 戻ってこい、ジャンク・アーチャー！」

ライフは削られたものの、盤面についてはそこまで変わっていない。

ここで、俺がレベル1のチューナーを素引きすればスターダストを出せるんだが……。

遊介：LP2300 spc：4

「俺のターン、ドロー!!」

俺が引いたカードは『sp エンジェルバトン』だった。このカードライディングデュエルで何度も見たことある。なんども遊星が使ってたから印象に残っている。だが、2枚ドローしても確実に1枚は落ちるからここは俺のデイスティニードローを信じるしかない！

「俺は、sp エンジェルバトンを発動！ デツキから2枚ドローし、そしてその後、一枚を墓地に送る」

俺が引いたカードはシン・クリボーとスピードウオリアー……。いける！ アクセルシンクロ！

「俺は、エンジェルバトンの効果により、スピード・ウオリアーを墓地に送る。そして、手札に加えたシン・クリボーを召喚！ レベル1チューナーのシン・クリボーにレベル7ジャンク・アーチャーを

チューニング！ 集いし願いが、新たに輝く星となる！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、俺のスターダスト・ドラゴン！」  
そうすると遊星は俺のフィールドに出たスターダストに驚いたようにうで

「スターダストが遊介のフィールドに!? 君は一体何者なんだ！」

「俺は、あなたにあこがれて、あなたと同じデッキ構築を組んだ異次元からきたデュエリスト！ ここであなたに新たなシンクロの進化系を見せてあげます！ 俺は二枚の伏せカードを使う！ 永続罫 エンジェルリフト、そしてリビングゲッドの呼び声！ これらの効果により、モノ・シンクロンとスピードウォリアーを特殊召喚する！ モノ・シンクロンは戦士族・機械族とシンクロ召喚する際、そのモンスターをレベル1として扱う！ レベル1、モノ・シンクロンとレベル1扱いとなったスピードウォリアーでチューニング！ 出でよ、シンクロチューナー！ レベル2 フォーミュラ・シンクロン！」

俺はそのシンクロに呼応するように自分のバイクを遊星のバイクに近づけた。そしてフォーミュラ・シンクロンの効果によりデッキから1枚ドロローして見せた。

「フォーミュラ・シンクロンの効果で1ドロロー！ 俺はそのカードを伏せる」

「一体なにをするつもりだ！ シンクロチューナーとはなんだ？」

「やっぱりこの次元の遊星は知らないのか……。なら、見せるしかない！」

「実際に体感するといいさ！ これが新たなシンクロ召喚、アクセルシンクロ召喚を！ 俺は、スターダスト・ドラゴンにフォーミュラ・シンクロンをチューニング！ 集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く！ 光射す道となれ！ アアクセルシンクロローローロー！ 生来せよ！ シューテイング・スター・ドラゴン!!」

白く輝くドラゴンが俺のフィールドに現れ出る。シンクロをことごとく吸収する「機皇」モンスターに対して絶望しかけた彼に現れた一筋の希望。それがこのカードだ。

「シユールディング・スター・ドラゴン……。うっ……。」

彼の手に赤いあざが見え始める。あれって、もしかして赤き竜のあざ？ この次元の彼もシグナーとして覚醒しようとしてる？ それとも、別のなにかなのか？ だが、俺はこの攻撃をやめるわけにはいかない！

「俺はシユールディング・スターの効果を使う！ デッキから5枚めくってめくったカードの中にあるチューナーの数だけ攻撃できる！」

1枚目：ジャンク・シンクロン

2枚目：団結の力

3枚目：エフェクト・ヴェーラー

4枚目：くず鉄のかかし

5枚目：スターダスト・シンクロン

合計3回攻撃！ 今まで友達とやってた中で一番攻撃回数が多いぞ！ よし、これなら遊星のくず鉄のかかしを打たれたとしても残り2回で攻撃できる！

「バトルだ！ シユールディング・スタードラゴン、ジャンク・バーサーカーに攻撃！ スターダスト・ミラージュ！」

「ここは耐える！ くっ……。」

遊星：LP3400

「追加攻撃！ スターダスト・ミラージュ！」

「ここはくず鉄のかかしを使う！」

「無効にしても無駄だ！ もう一回攻撃が残っている！ 3連打アツ！」

遊星：LP100

「ぐわあっ……！ なんとというパワーだ。これがアクセルシンク

口召喚で召喚されたシンクロモンスターというのか。だが、俺はまだ希望を信じる！ 罨カード運命の発掘！ 自分が戦闘ダメージを受けたとき発動する。自分はデッキから1枚ドローする！」

「ここでもなお、ドローしてくるとはなかなかすごい人だ。それにしても運命の発掘だなんて彼のデッキに入ってたっけ？」

「俺はこれでターンエンド。いいカードは引けました？ 遊星」

「ああ、これは遊戯さんにお礼をいっておかないとな……」

「遊戯さん!?!」

その時、彼の背中には赤き竜の痣が集約して一つの竜となった模様が浮かび上がった。その時の彼はまさしく不動遊星だったというしかない。彼は微笑んでデッキからドローした。

「俺のターン！」

覚醒した不動遊星：LP100 spc5

「俺は、デブリ・ドラゴンを召喚！ このモンスターは召喚成功時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる！ 俺はシールド・ウィングを選択！ さらにフィールドにチューナーがいるとき墓地にあるボルト・ヘッジホッグを特殊召喚できる！ 戻ってこいボルト・ヘッジホッグ！ 俺はレベル4デブリ・ドラゴンにレベル2シールドウィング、ボルト・ヘッジホッグをチューニング！ 集いし願いが、新たに輝く星となる！ 光差す道となれ！ 飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン！」

「こんな状況にスタダだとしても意味ないじゃないですか！ 死ぬ気ですか！」

「俺は死ぬためにスターダストを出したんじゃない！ 俺は速攻魔法シューティングソニックを発動！ このターンのバトル開始時、攻撃した相手モンスターをデッキに戻す！ これなら、シューティングスターの効果も発動されない！ バトルだ！ 俺は、スターダスト・ド

ラゴンでシューティング・スターに攻撃！ シューティング・ソニツク ブースト!!」

ま、まじか俺のシューティング・スターがデツキに……。しかも相手はノーダメかよ……。今度は俺がピンチになったってわけか。

「俺はカードを伏せてターンエンド！ さあ、来い！ 遊介」

俺の伏せカードは万が一のための罠カード星墜つる地に立つ閃光だ。今の状況だと使える状況ではない。ということはこのドロローにすべてがかかっているということか……。

「俺のターン、ドロロー！」

俺の引いたカードは……。シンカを促すクリボー！ これはいける！

「俺は、魔法カード『シンカを促すクリボー』を発動！ フィールドにモンスターが存在せず、墓地に『シン・クリボー』が存在する場合このカードを発動できる！ 墓地のシン・クリボーとシン・クリボー以外のチューナー以外のモンスターを除外し、その除外したモンスターのレベルの合計と同じ光属性のシンクロモンスターを召喚できる！ 神秘の瞳、輝かせし龍よ！ 悪を捌く刃とともに降誕せよ！ シンクロ召喚！ レベル8 一神秘眼の聖装刃竜《シークレットアイズ・スコール・スラツシユドラゴン》！」

このカードなら相手の伏せカードに関係なく殴り勝てる！

「さあ、どうするつもりだ。俺の伏せカードにはくず鉄のかかしがあるのはわかっているはずだ！」

「そうですね。だけど、それはどうかな？ 俺はシークレットアイズのモンスター効果発動！ このカードがシンクロモンスターを素材

として召喚に成功したとき、相手魔法・罠ゾーンにある伏せカードを無効にして表側表示にする！　そしてこの時、シークレットアイズの攻撃力は表側表示になったカードの数×300ポイント上がる！　スコールシャワー！　バトル！　これで終わりだ。静寂のバーニングスラッシュ」

遊星：LPO

これ、夢じゃないよな……………ほっぺをつねると痛みが走る。俺は、彼に勝つたんだ。  
とんでもねえな。

## iflll1：レーシングデュエルの罭

デュエルが終了し、バイクを制止するとブルーノが拍手を送った。すると、他のデュエルアカデミアの生徒も続いて拍手を送ってきた。

これはこれで悪くない。

「なかなかいいデュエルだった。遊介くん、君はシンクロ召喚だけでなくアクセルシンクロを見せてくれた。驚いたよ、まあそうでないと困るというのも本音だがね」

「え、それはどういう」

そういつても彼は答えてくれず、遊星の方に向き直った。

「ブルーノなのか……!? 一体どうなっているんだ」

ブルーノは他の生徒にバレないように俺たちだけに小声で話し始めた。

「遊星、君は今別の次元にいる。正確には君の赤き竜の記憶を呼び起こしたんだ。遊介くんとデュエルで覚醒するかどうかはほとんど賭けだったが、君の熱いデュエルがよみがえってきてくれてうれしいよ。とにかく、今は僕の歩調に合わせてくれ」

遊星は今、別次元の遊星さんの体を借りているような状態なのか？ 赤き竜の、シグナーの記憶というものが俺たちの知っている不動遊星としての記憶が別次元の遊星に宿ったってことか？

意味が分からない。とにかく、今ここにいるのは俺たちが知ってる不動遊星だっことは言える。

親指を立てるブルーノに少し困惑しながらも遊星は相槌を打つ。

「まあ、構わないが……」

「それでは不動遊星！ 君のライディングについて講評する！ 序盤から中盤にかけて無難といえる。終盤、スターダストを使用し、相手のモンスターをデッキに戻したのはなかなか光るものがあった。ア



クセルシンク口を習得していないとはいえ、よく戦った。みんな、二人にもう一度拍手だ」

そういうと、生徒たちは俺たちに拍手を送った。

ブルーノの講評が終わったところで、明日香が新たな課題を俺たちに突きつける。

「それじゃあ、彼らのデュエルでライディングを実感したところで、実践的にやっついていこうと思います。でも、普通に一人一人やるライディングなんて面白くもなるともない。だからレースをしようと思うの」

レースう？ ライディングでってこと？ 一体どうやって……。

「ルールは簡単、みんなで一斉にスタートするの。それでライフが削られたらその分スピードは落ちて、0になったらその時点で失格。回復していけばどんどん加速するし、こうゆうバトルロワイヤル形式なら戦いやすいかもね」

「なるほど、ただ速さを競うだけじゃなくデュエルタクティクスも問うレース。いわば、レーシングデュエルといったところか」

いや、納得してるんだよブルーノ。俺たちは説明聞いても全く頭に入らなかつたけど？ あれか？ ゼアルのジェットコースターデュエルみたいなもんか？ いやあれより人数が多いから普通に2対1とかありえるぞ。デュエルの途中で乱入とかありそうだし。いろいろデツキもそれ用に組みなおした方がいいかな……。いや、今はこのデツキで行こう。というかそもそも、サイドデツキみたいな替えを持ってない。このデツキを信じて戦うしかない。

「それじゃ、お楽しみといきますか！」

「ちよつと、俺のセリフみたいなこと言わないでよ遊介！」

遊矢が俺の言葉に反応してツツコミを入れるとみんなちよつと噴

き出していった。こういうおちやらけキャラっていう感じも遊矢らしいといえれば遊矢らしいな。彼ははずつとこうやって笑顔でいてほしい。

「それじゃあ、みんなバイクに乗ってスタートについてくれる?」

明日香先生の指示で生徒全員がスタート位置につく。ブルーノと遊星はどうやらこのレースには参加しないようだ。二人で話し込んでいる。積もる話もあるのだろう。

「位置につけたかしら?」

生徒全員が息を合わせて「はい!」と声を上げる。もちろん、俺も大きな声を出した。レーシングデュエル、どういう風になるかわからないし、先攻後攻なんて概念ないしどうやって戦うかわからないけど楽しみだ。

「みんな、頑張ってるね」

3

2

1

『ライディングデュエル、アクセラレーション!』

何もわかっていないまま謎のレーシングデュエルが始まった。一斉にバイクが先頭向けて走り出す。

ここは下の方でデュエルでどんどん相手のライフを削って先に進めていく方がいいだろう。

ゆっくりとバイクを走らせながら手札を確認する。これはどうやって戦えばいいんだ?

そう思っていると、遊矢がこちらに近づいてきた。

「肩慣らしに俺とデュエルしないか? 遊介」

「遊矢か……。まあ、いいけど。このデュエルの方式あまり理解できてないから遊矢の先攻でいいよ」

「いいのか？　じゃあ、いくぞ！　俺のターンドロロー！　俺は、EMギタートルとEMラクダウンでペンデュラムスケールをセッティング！　ギタートルのペンデュラム効果で俺は一枚ドロローする！　さあ、これでレベル3から5のモンスターを同時に召喚可能！　揺れる、魂のペンデュラム！　天空に描け、光のアーキ！　ペンデュラム召喚！　来い、俺のモンスターたち！　EMヘイタイガー！　EMウィップバイパー！　俺はレベル4のEMヘイタイガーとウィップバイパーでオーバレイ！　二体のモンスターでオーバレイネットワークを構築！　エクシーズ召喚！　漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う反逆の牙！　今、降臨せよ！　ランク4、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン！」

まさかのここでダークリベリオン!?

「まじかよ!？」

「驚いている暇があるのかな？　俺はカードを一枚伏せてターンエンド。さあ、遊介の番だよ」

「俺の、ターン！　ドロロー！　なんてこった。こちとらシンクロ一筋なのにエクシーズとかバンバン使って……。まあいい、俺はシン・クリボーを守備表示で特殊召喚！　このカードは自分フィールドにモンスターがないとき守備表示で特殊召喚できる。そして、俺はスターブライト・ドラゴンを通常召喚！　このとき、シン・クリボーは自分以外の光属性が存在するとレベルは3として扱う！　行くぞ、遊矢！　俺はレベル4スターブライトドラゴンにレベル3となったシン・クリボーでチューニング！　聖者の衣纏いし竜よ！　その紫の瞳で悪を照らせ！　シンクロ召喚！　出でよ、紫眼の聖装竜！」

「出たな、パープルアイズ……。あの効果を使われたらひとたまりもないな」

「だろうな。だから、惜しみなく使っていく！俺はパープルアイズのモンスター効果発動！シンクロ召喚に成功したとき、デッキから装備魔法一枚をこのカードに装備する！俺は団結の力をデッキから発動する！さらに、俺はパープルアイズのもう一つの効果発動！このカードに装備された装備カード1枚を破壊して発動する。相手フィールド上のカードを破壊した装備魔法の枚数分手札に戻す！俺は団結の力をリリースして、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを手札に戻す！だが、EXモンスターは手札に戻すことはないためデッキに戻る！」

「速攻魔法発動！『アクション・マジック！』自分フィールドのモンスター一体を対象として5つの効果から選択して効果を発動する！俺は『このターン自分フィールド上のモンスターは相手のモンスター・魔法・罠の対象にならない』を選択する！」

まじかよ、アクションデュエルでもないのにアクションカードと似たような効果を使える速攻魔法かよ!? しかも地味に強化されてる!? リリースする効果はすでに発動してしまったから攻撃力はダーク・リベリオンと同じ、2500。ここはターンエンドするしかない。「カードを2枚伏せて、ターンエンド……。やりおるのお」

「君ほどでもないさ。違う次元に来ててもデュエルを楽しんでる。ほんと、すごいよ……。」

二つの竜が並び立ちにらみ合っているところに、間を縫うように一つのバイクが颯爽と駆け抜ける。

「なんだ？ ロボット？」

それはバイクと合体したチームニューワールドのような出で立ちでロボットの上半身がバイクと合体している。それは俺たちを標的にして向かっている。

『デュエルモード。最下位ノデュエリストハ強制デュエルヲ執行！  
コノデュエルデライフヲゼロニシタ者ハ評価ナシ！ 評価ナシ！』

なんだって？ じゃあ、俺たちいつの間にか最下位になってたのか？

驚きもさながらあのロボットはすでにフィールドにモンスターを展開している。ということは何人かはもうやられているのか？

『ワタシノターン！ フィールドニ存在スルSRベイゴマックスにSR赤目のダイスヲチューニング！ 機械の僕たちヨ我がフィールドニ集エ！ シンクロ召喚！ レベル7 ダーク・ダイブ・ボンバー！ ワタシはダークダイブボンバーの効果発動！ フィールド上のバンブーホースをリリースシ、ソノレベル分×100、つまり400ポイントノダメージヲ与エル！』

「ぐわっ！」

「うああああ！」

遊介LP3600

遊矢LP3600

「遊介！ ここはお互いに協力しよう！ このままじゃ、単位がとれないぞ！」

俺の伏せカードは強制終了とガードブロック……。このターン、強制終了を使えば攻撃は免れる。だが、その効果を使うとガードブロックを破壊することになる。どうする？ たった100のダメージに使うか？ それとも温存するか？

iflll1. 5: 舞い降りる不死鳥

遊介が遊矢とともにデュエルボットと戦っているところ、中間の集団には山谷廉次郎が「ミニチュアル」デッキを用いて多くの生徒を引き離していた。

「ミニチュアル破滅獣 ヴァイス・ベーゼの効果発動！ オーバーレイユニットを一つ取り除き、相手フィールドのモンスターの攻撃力を自分フィールドの『ミニチュアル』モンスターの数×1000下げる！ 僕のフィールドにはヴァイス・ベーゼとミニチュアル・タンクの二体！ よって2000攻撃力を下げる！ 破滅のギガントフォース！ バトル！ 破滅獣 ヴァイス・ベーゼで剣闘獣ドミティアノスに攻撃！ すべてを焼き尽くし滅ぼせ！ 破滅の牙！」

「うわあああああ！」

相手のモンスターを寄せ付けず、レベルを上げつつエクシーズや儀式を行うミニチュアルデッキは以外にもどんなデッキにも頼りがいのあるモンスターがあるため廉次郎の日ごろの研究の成果がうかがえる。

「まったく、遊介の野郎！ どこで油を売ってやがる。こちとら中間位置で待ち構えてやってるのに！」

「ならば、私と暇つぶしをするか？」

中間集団の中でも先頭を譲っていなかった赤馬零児が廉次郎のところまで下がってきて勝負を挑んできた。廉次郎のライフは5000に対して赤馬は8000となっていた。自分には不利だと思っただけでも相手は学園一のデュエリストとなると勝負を受けないわけにはいかない。

「ほお、オベリスクブルーの力見せてもらおうじゃないか！ 来いよ、

ペンデュラム召喚！」

彼の場のペンデュラムゾーンにはDDオルトロスとDD魔導賢者ニュートンがセッティングされており、永続魔法魔神王の契約、地獄門の契約書、戦乙女の契約書が場に並べられている。そしてモンスターゾーンにはDDD神託王ダルクとDDD疾風大王アレキサンの二体がすでに並んでいる。

彼の手札は一枚、EXデッキには表側表示のヘル・アーマゲドンが廉次郎を虎視眈々と狙いをつけていた。

「ならば、見せて差し上げよう！　これが大いなるペンデュラム召喚だ！　現れよ、私のモンスターたちよ！　DDD極智王カオス・アポカリプス！　そして、EXデッキより現れよDDD死偉王　ヘル・アーマゲドン！」

「だが、俺にはフィールド魔法『ミニチュアルハウス』がある！　このカードが存在する限り、相手のモンスターの攻撃力は自分の『ミニチュアル』モンスターの数×1000下がる。どんなに強いモンスターでも抗うことはできない！」

アレキサンの自身の効果によって攻撃力を3000アップさせたものの、ミニチュアルハウスの効果により、4000止まりとになっていた。だが依然として彼は余裕の表情だった。廉次郎は眉をひそめて赤馬のモンスターを見つめる。

「果たしてそれはどうかな？　私は、地獄門の契約書を発動！　私はDDバフォメットを手札に加える。私はDDバフォメットを通常召喚！　そしてDDバフォメットの効果により　カオス・アポカリプスのレベルを8にする！」

「レベル8のモンスターを二体並べただと？　まさか……」

「私は、レベル8死偉王　ヘル・アーマゲドンとレベル8となったカオス・アポカリプスでオーバーレイ！　二体のモンスターでオーバーレ

インターネットワークを構築、エクシーズ召喚！ 2つの太陽が昇るとき、新たな世界の地平が開かれる！ ランク8、DDD双暁王カリ・ユガ!! さらに私は墓地のDDRリスとフィールドのDDバフオメツトで融合！ 闇夜に誘う妖婦よ！ 異形の神を包み込み、今ひとつとなりて新たな王を生み出さん！ 融合召喚！ 生誕せよ、DDD烈火王テムジン！」

「エクシーズ、ペンデュラム、融合……。さすがはオベリスクの首席候補だけはあるな」

「DDD双暁王カリ・ユガは、エクシーズ召喚に成功したターンはこのカード以外のカードの効果を受けない。つまり、君の創られた世界も元の通りちっぽけな存在となったのだ。さあバトルだ！ DDD双暁王カリ・ユガでミニチュアル・タンクに攻撃！ ツインブレイクショット！」

大きなダメージほど、スピードを落として順位を落とす原因になりかねないこのレーシングデュエルは少しのライフさえも命取りといえる。だが、相手のカードの効果を受けないカリ・ユガの前には機械族が存在する場合、相手フィールド上のモンスターを守備表示にするパルスボムも無意味になってしまう。

廉次郎LP：2500

「ぐわああああ!!!」だが、戦闘ダメージを受けたことにより、手札からミニチュアル・ハイパーエージェントの効果が発動する！ 自分フィールド上に『ミニチュアル』モンスターが存在するとき、このカードを捨てて発動できる！ 自分フィールドに『ミニチュアルトークン』2体を守備表示で特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

ミニチュアルトークンは地属性、レベル1、機械族の攻守0モンスターとして廉次郎のフィールドに残った。ただ、彼の永続魔法、「ミニチュアルセット」のおかげでレベルは10となっている。だが、ここ



でなにか打開できるカードを引かなければ次のターン、相手のDDモンスターの餌食となってしまう。

「ターンエンド……………君の番だ。さあ、この盤面をどう切り返す！」

廉次郎が悩んでいたその時、一台のバイクが空を一瞬駆け抜けて、廉次郎と赤馬の前を通り過ぎる。しかもなぜか無駄にテンションの高い男のような声だった。

「イヤッツホオオオオオウ!!!」

「な？　なんだ？」

「君は……………」

「ナンセンスだ。とてもじゃないがアカデミアの生徒とは思えないザルデュエルだ。プロのタクティクスをボクが見せてやる！」

銀色のスーツとバイクを乗りこなし二人の間を行ったり来たりしている。彼は何を隠そう、プロデュエリスト、エド・フェニックス。著書「それはどうかなと言えるデュエル哲学」を発行するほどの腕前でありながら十代のいるデュエルアカデミアへと入学してきた人物だ。赤馬は彼と一応の面識はあるが並行世界の住人であるため本人かどうかはわからない。

「あいつ、だれだ？」

廉次郎が眉をひそめて首をかしげるが赤馬が少し冷静に話した。

「彼の名は、エド・フェニックス。元、アカデミア生徒でプロデュエリストだ。D―HEROというデッキを使っている。ことくらいしか知らんな」

「メガネの君はよくボクを分析できているようだが、目つきの悪い君はどうやら勉強不足のようだな。仕方あるまい、君のデュエルはあま

りにも粗暴で独りよがりだからな。ボクが真のデュエルを教えてやるろう！ ボクのターン！ ボクは魔法カード『二重融合』を発動させる！ ボクはライフを500払うかわりにこのターン、ボクは2回融合できる！ まずはじめにボクは手札のE・HEROフェザーマンとバーストレディで融合！ カモン！ E・HERO フェニックスガイ！」

「赤馬！ 言ってたことと違いじゃねえか！」

「そんなはずは……」

「ボクのデッキはD―HEROだけってわけじゃないさ。そしてさらに！ ボクは、フィールドのE・HEROフェニックスガイと手札のD―HERO ダイヤモンドガイで融合！ 漆黒の闇を復讐の炎で照らし、悪を粉砕する新たな『D』！ カモン！ D―HERO デストロイフェニックスガイ！ デストロイフェニックスガイはセメタリーに存在するヒーローの怨念を引き継いで相手のモンスターの数×200ポイント攻撃力を下げる！ ヒーローデステニーカーズ！」

紅蓮の炎がメラメラと燃えた先に羽の生えた男がエド・フェニックスのフィールドに現れる。廉次郎にはミニチュアルトーンと伏せカード二枚。そして赤馬零児のフィールドにはDDD双暁王カリ・ユガと神託王ダルクがある。魔法カードについては先ほどと変わっていない。手札はすでに使われてゼロ。戦乙女の契約書の効果は使えない。

「ボクは、D―HERO デストロイフェニックスガイのモンスターエフェクト発動！ ボクはフュージョングレートと、メガネの方のきみ、確か赤馬零児だったね。君のDDD双暁王カリ・ユガを破壊させてもらう！ デストロイフレイム！」

「くっ…… カリ・ユガの効果発動！ オーバーレイユニットを一  
つ使い、フィールドの魔法・罠を破壊する！ さすがは融合の使い手、  
1ターンに2回も融合するとはな」

「おい！ 僕まで巻き込むな！」

「君のフィールド魔法が面倒なのでな。私はここで倒れる訳にはい  
かない」

「それは僕も同じだ！」

「喧嘩はすんだか？ バトルだ！ ボクはまずライフが少ない目つき  
の悪いきみに攻撃する！ デストロイフェニックスガイでミニチュ  
アル破滅獣 ヴァイス・ベーズに攻撃！ フェニックス・デス・シュ  
ト！」

廉次郎：LP1200

「ぐわっ、ああああ！ プロのあんたが、プロでもねえ僕たちをいた  
ぶって何がしたいんだ！」

「十代をあぶりだすためだ！ あいつはなぜかチーム5D'sなんて  
いういけ好かない暴走族に加担しドミノシティを荒らしてるからだ  
！ 君たちもバイクに乗っているのだからその一端なのだろう！  
アカデミアの風上にも置けないものたちよ、さあ吐け！ 十代はどこ  
にいる！ ボクがお灸を据えてやる！」

もちろん、廉次郎も赤馬も彼の居所など知る由もない。

「知ってるわけないだろう！ 誤解だ！ 僕たちは授業でライディン  
グデュエルしているだけだ！」

廉次郎のバイクがどんどん後方へと落ちていく。それに合わせて

赤馬零児とエドはじりじりと下がっていく。それが彼にとってはとても屈辱的だった。

「こっちくん！ 赤馬零児、それにエド・フェニックスだったな？ 後ろで挽回してやる待ってる……。それと、お前の言う十代つてやつ後ろにいる『阿久津遊介』なら知っているかもな」

「なに？ 早くつれてこい！」

「条件がある。おまえもこの授業に参加しろ！ レーシングデュエルの上位で待ってる。すぐにそいつをつれてきてやる」

「アカデミアのOBとして、楽勝としかいいようがないな。こっちはプロだぞ？ なめるなよ、小僧が」

「交渉成立だな。じゃあな」

そういうと廉次郎は集団に抜かれていき、後方へと落ちていった。彼が待ち受けるのは遊介たちと戦っているデュエルボット……。

iff112:前へ

遊介：LP3600

モンスターゾーン

紫眼の聖装竜（シンクロ／効果／Lv7）

魔法・罨ゾーン

伏せカード2枚（未発動）

強制終了

ガードブロック

手札1枚

遊矢：LP3600

モンスターゾーン

ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン

魔法・罨ゾーンなし

手札2枚

最下位になると強制的にロボットとデュエルをさせられる。ライフを守ろうとしてデュエルをせずに走り回っているやつらをあぶりだす策略か？

よくわからないロボットが乱入したせいであいつのターンになっちまったしどうすればいいんだ。

『ワタシハ、ダーク・ダイブ・ボンバーデ【紫眼の聖装竜】ニ攻撃！マックス・ダイブ・ボム！』

ここは仕方ない。伏せカードは取っておこう。悪い、パープルアイズ……………」

「ぐっ……………」

遊介：LP3500

「よかったのか？ 遊介」

「大丈夫、あてはある。なんとかしてみせるさ」

『カードを1枚伏せて、ターンエンド！』

とはいえ、俺の伏せカードは強制終了とガードブロック……。数ターンはしのげるかもしれないが、どうする!?

「とにかく、ここは俺がなんとかしてみせる！ 俺ターン、ドロー！

俺は手札より、フィールド魔法天空の虹彩を発動！ フィールドのEMギタートルを破壊して俺は、EMオッドアイズ・ユニコーンを手札に加える。そして空いたペンデュラムゾーンにオッドアイズ・ユニコーンをセツテイニング！ これで、レベル3から7までのモンスターが同時に召喚可能！ 再び揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け、光のアーク！ ペンデュラム召喚！ 手札より現れよ！ EMゴールド・フアング！ そして、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

「よし、2体のドラゴンがそろった！ 行け！ 遊矢！」

「ああー！ 俺はダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴンのモンスター効果発動！ オーバーレイユニット二つ取り除き、ダーク・ダイブ・ボンバーの攻撃力を半分にしてその数値分ダークリベリオンの攻撃力をアップする！ トリーズン・ディスチャージ！ これでダークリベリオンの攻撃力は3800！ バトルだ！ オッドアイズでダイブ・ダイブ・ボンバーに攻撃！ 螺旋のストライクバースト！ この時、オッドアイズの戦闘ダメージは倍になる！ リアクションフオース！」

デュエルボット：LP300

「これで終わりだ！　ダークリベリオンで」

「手札ヨリ、デスペラード・リボルバー・ドラゴンのモンスター効果発動！　フィールドの機械族・闇属性が戦闘、効果で破壊された場合にこのカードを手札カラ特殊召喚スル！」

「なに？　だけど、攻撃力は俺のダークリベリオンの方が上だ！　ダークリベリオンでデスペラード・リボルバー・ドラゴンに攻撃！　反逆のライトニング・デイスオベイ！」

「デスペラード・リボルバー・ドラゴンの効果発動！　ロシアンリボルバー！　コイントス3回を行い、表が出た数だけ表側表示モンスターを破壊スル！」

コイン

表・表・裏

「ワタシハ、榊遊矢のEMゴールド・フアングとダークリベリオン・エクスィーズ・ドラゴンを破壊スル！」

遊矢の盤面にはオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンのみ。相手ターンさえしのげば次の遊矢のターンにオッドアイズが戻ってくる。それまで俺が繋ぎ止めないと！

「くっ………。ターンエンド！　遊介、任せた！」

「わかった！　俺のターン、ドロー!!　よし来た！　俺は手札のジャンク・コンバーターの効果を発動！　手札のチューナー1体とこのカードを捨てて、デッキから「シンクロン」チューナーを手札に加える！　俺はジャンク・シンクロンを手札に加える！　ジャンク・シン

クロンを召喚！ ジャンク・シンクロンの効果！ ジャンク・コンバーターを特殊召喚！ ジャンク・コンバーターにジャンク・シンクロンをチューニング！ 出でよ、ジャンク・ウォリアー！ さらに、ジャンク・コンバーターの効果でジャンク・シンクロンを墓地から特殊召喚！ さらに俺は、ジャンク・ウォリアーにジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます！ 光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！ ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ素材としたチューーナ以外のモンスターの数だけ敵を粉碎する！ タイダル・エナジー！ デスペラード・リボルバー・ドラゴンを破壊する！」

『デスペラード・リボルバー・ドラゴンが破壊されたとき、コイントスを行うモンスターを手札に加える効果を持つが、ワタシニハもうそのような効果を持つモンスターは存在シナイ……』

「ならば、臆せず攻める！ ジャンク・デストロイヤーで直接攻撃！ デストロイ・ナツクル！」

ロボットは何もすることなく、直接攻撃を受けてしまった。あつけなくデュエルが終了してしまったと思ったその時だった。

『ワタシハ、罠カード【不運の爆弾】を発動サセテオイタ！ 相手のモンスターの攻撃力半分のダメージをコチラモ受けるガ、相手にも同じダメージを受けてモラウ！ 阿久津遊介に1300のダメージ！』

「痛つてえ！ 最後の最後に置き土産すんな！ 後、発動するときはこちらとタイミング見て言え！」

ロボットが後ろの方に下がっていく。いや、俺たちのDホイールの速度が若干上がっている？

「遊介！ 俺たちのライフポイントが増えているぞ！ 自分が攻撃し



た戦闘ダメージもしくは効果ダメージ分なのかな？ 遊介が1300ポイント回復してるみたいだし」

遊介：LP4800

遊矢：LP7300

「ほんとだ。ええ、でもなんか損した気分……」

とはいえ、ライフポイントが増えたおかげで俺たちは前に進むことができた。これでより前に進むことができる！

「お、よかった。阿久津、それに榊！」

「お、円谷！ なんか久しぶりだな。あれ、もしかして迎えにきてくれたの？」

「ふざけるな！ だが、たしかにそうだ。エド・フェニックスとかいうデュエリストに言われて貴様を迎えに来た。阿久津」

「俺？」

エド・フェニックスが俺に用？ どういう風の吹き回しだ？ とうかどっから来たんだよエドは……。ここってアカデミア生徒専用レーンじゃなかったっけ？ とにかく、前に行つてこの課題をクリアするのも目的の一つだし。いくか！

「どうした。早くしろ」

「分かった。行くよ！ じゃあ、遊矢また後で」

「うん！ きつと君もすぐ追いつくからまたさっきの続きをしよう！」

俺はうなずいたあと、円谷廉次郎の後ろについてアカデミア生徒たちを潜り抜けていく。

雑魚は任せろといわんばかりに彼のミニリチュアル・シャイニング・グレートが多くの子供のライフを削っていく。俺もライフを回復するために負けじと戦闘に参加する。

「どおおおけええええええええええ！ ギガンティウムこうせー………ん!!」

「デストロイ・ナツクル!!」

100、200とライフを稼いでいく。俺たちのライフは最終的に俺がLP5000、円谷がLP5500となっていた。

彼が後ろを向いて若干ニヤついていたのは癩に障ったけど、今では頼りになる仲間と呼んでもいいかもしれない。

「なあ、お前のこと『廉次郎』って呼んでもいいか？ それなら別にいいだろ？」

「は？ 何をいまさら言ってるんだ？ 呼び方なんてなんでもいいだろう！ …… まあ、勝手にしろ」

「改めてよろしく！ 廉次郎！」

「俺はお前と馴れ合う気はない。さっさとエド・フェニックスの元へ急ぐぞ！ …… 遊介」

うつすらとなにか最後に言ったような気がするがよく聞こえなかった。まあなんか変なこと言ってたんだろうな。今はとにかく前に進むことだ。

if113：紅蓮の魔の手！ 地縛神スカーレット・  
ノヴァア！

俺のフィールドにはジャンク・デストロイヤーと伏せカード2枚。  
なんだかんだでこの布陣を守り切れている。

円谷もミニリチュアル・グレートシャインの強力な効果で盤面はほとんど変わっていない。

ただ少しだけ疲れているようにも見える。

「大丈夫か？ 連戦続きで疲れてんじゃないのか？」

「うるさい。僕の心配をするより自分の心配をしろ！ お前もそんなに手札があるならシンクロ召喚するなりなんなりしたらどうだ」

「俺には俺なりの段取りがあるの！」

今の手札なら確かにスタダはだせないことはない。でも、そこからがつかまらない。アクセルシンクロにつなげられるのか？

「レーシングデュエルはデュエルしていなかったとしても召喚はできる。スピードカウンターは消費するがな」

そうなのか。だからあいつ人と人のいない間にモンスター出してたのか。

「じゃあ、俺はスピードカウンターを一つ取り除いてスターダストシャオロンを召喚！ スターダスト・シャオロンをリリースしてスターダスト・シンクロンを特殊召喚！ スターダスト・シンクロンの効果発動！ 「スターダスト・ドラゴン」と記された魔法・罫を手札に加える。俺は『光来する奇跡』を手札に加える。そのままそれを発動！ 効果処理として俺は救世竜セイヴァー・ドラゴンをデッキトップに置く」

これで一応、セイヴァースタードラゴンを出す布陣にはできた。後は、相手と戦うことを想定するだけ。

デュエリストが見えたら即シンクロにつなげるしかない。

「そんな布陣で大丈夫か？」

「大丈夫だって。問題な……」

すると前の方から赤いバイクが煙をあげてこちらに向かってくる。あれって、赤馬零児の選んだDホイールじゃないのか？

「赤馬零児!？」

「君たちか……。すまない、私としたことが奇襲をうけるとは」

「何があつたんだよ」

円谷が不躰に聞くと、彼はうつむきながら

「黒いDホイール。おそらく、君たちの戦っていたチーム5D'sのジャック・アトラスだ」

「おそらく？ あなたって確か、ジャックを知ってますよね？」

「ああ。だが、私の持っているデータと違うモンスターを召喚していったため、未確定となった」

なるほど、赤馬零児のデータにないカード……。オリジナルのレッドデーモンズ・ドラゴンとかか？ いや、少し名前が違うだけで未確定になるか？

「一体なんのカードだったんです？」

「確か、地縛神…… という名のカードだった」

「地縛神？ まさか、スカーレット・ノヴァじゃ」

ジャック・アトラスは遊星のクリアマインドと並ぶ「バーニングソウル」を取得した。その礎となったといえるモンスター。彼がダークシグナーとなった今、地縛神をだすならそれしか考えられない。でも、この世界にも地縛神の魔の手が？ いや、もっと違うものなのか？

「キミの方が私より情報源は豊富にありそうだ。このデュエル、キミに預ける。阿久津遊介」

「わかった。急ごう！ 廉次郎」

「指図するな、わかっている！」

赤馬零児を背に俺たちはさらに前へ進んでいく。

するとそこには灰に近い銀のDホイールが、大きな円を描いたタイヤを履いたDホイールと戦っているのが見えた。

「ジャック・アトラスとエド・フェニックスがライディングデュエルを!?」

「エド・フェニックス、遊介をつれてきた。と言っても、今はそれどころじゃないな」

そこにはエド・フェニックスとジャック・アトラスが互いのライフをかけて命がけの死闘を繰り広げていた。でもエドのライフだけは風前の灯火……………。

「君たち、やっとボクの前に現れたか。キミから十代のことを聞くのは後だ。まずはこいつをどうにかする！ 身を挺して教えてやろう。これが、彼の。ジャック・アトラスの地縛神の力というものだ！」  
そういうと、エドはデッキからカードをドロークした。

「ボクのターン！ 僕は、魔法カード融合を使う！ 手札のD—HERO ドグマガイとD—HERO Bio—Dで融合！ 父さんが遺してくれた最後のD！ やはりこのカードがボクにとってのマイフェイバリットだ！ カモン！ DragoonD—END！」

エドのフィールドにはすでにデストロイフェニックスガイがいる。二体のエースが彼の目の前に並び立ち、地縛神を見つめる。やはりあの紅蓮の炎、スカーレット・ノヴァに似てる。

「無駄なあがきを！ スカーレット・ノヴァが攻撃表示でいる限り、相手フィールドに特殊召喚されたモンスターを守備表示にし、効果も発動できない！ 地縛神の前にひざまずくがいい！」

「デストロイフェニックスガイのモンスターエフェクト発動！ 自分フィールドのカード1枚と相手カード1枚を破壊する！ ボクはDragoonD—ENDと地縛神スカーレット・ノヴァを破壊する！ バトルだ。デストロイフェニックスガイでジャック・アトラスに直接攻撃！」

その瞬間、ジャックは不気味な笑みを浮かべた。なにか手だてがあるというのか？

「墓地の地縛神スカーレット・ノヴァの効果発動！ このカードの効果以外で破壊され墓地に行ったターンのバトルフェイズに発動する！ このカードを墓地から特殊召喚する！ 墓地より蘇れ、魂の叫びが！ 我が震える魂の鼓動が贄となり、紅蓮の炎となり、今悪魔に宿

らん！ 復活せよ、地縛神 スカーレットノヴァー！」

悪魔の笑いがレーン上に響き渡る。そして炎がジャック・アトラスを包み込む。その炎は彼の胸の中にもしまわれる。

「そして、忘れるな。スカーレットノヴァーは自身の効果で蘇生したとき、相手に1000ポイントの効果ダメージを与える！ 紅蓮の魔人の業火に焼かれて灰になるがいい！ アブソリュート・バーニング！」

エドのライフは完全にスカーレット・ノヴァーの効果ダメージ圏内！

これじゃ、負けるじゃないか！

「うわあああああああああ！」

「エド!!」

「確か、ユースケとか言ったな？ ボクが負け戦をすると思ってたのか？ ボクは効果ダメージを受けた瞬間！ 地獄の扉越し銃を発動させてもらった！ お前にも効果ダメージを与える！」

「フィールド魔法『地縛神殿』の効果発動！ 自分フィールドに『地縛神』が存在する限り、相手が与える効果ダメージはすべて回復する効果とする！ 神の前に小細工は通用しない！ 力こそが絶対であり正義なのだ！ 敗者は散れ！」

「相手にはライフポイントのダメージを小細工といいながら、自分だって使って勝ってるじゃないか」

「神の怒りに触れた貴様らが悪い。さあ、次はだれが犠牲の舞台に立つ！」

「くそっ、何もできなかつたのか……………。阿久津遊介！ こうなったらおまえしかいない！ お前がこいつを倒すんだ！ ボクの敵を取るんだ！」

なんで俺ばっかり目を付けられるんだ？ 今はただのアカデミア生徒だろ？ 何が彼らの心を動かしているんだ？ だがそれは廉次郎も同じように思っているらしい。

「どいつもこいつも僕を無視するな！ 僕だつてデュエリストだ！ 地縛神といえど、モンスターカード。 なにか、弱点はあるはずだ！ それを僕が証明してみせる！ ジャック・アトラス、あんたにはターンは渡さない！ 僕が先にドロウする」

乱入ペナルティがないだけいいものの、普通こういうのつて向こうのターンじゃない？ でも結局ドロウしちゃってるし……………」

「僕は、手札から永続魔法『ミニチュアル・サンセット』を発動！ このカードの発動処理として『ミニチュアル』魔法・罠カード1枚をデッキから選択し裏側表示でセットする。僕がセットするのはミニチュアルパニツク！ バトルだ！ ミニチュアル・サンセットを破壊し、グレートシャインの効果発動！ このターンこのカードはプレイヤーにダイレクトアタックできる！ さらに、『ミニチュアル・サンセット』の効果発動！ このカードがカードの効果で破壊されたとき、自分フィールドのモンスターはそのレベル×100攻撃力アップする！ 攻撃力4000で直接攻撃ツ！ ギガンティウム光線！」

よし、ミニリチュアル・グレートシャインは自身の効果で直接攻撃するときには相手の効果の対象にならない。いかなる効果だったとしても相手にダメージを与えられる！

「無駄なあがきを！ 地縛神殿の効果により地縛神がある限り直接攻撃による戦闘ダメージは発生されない！ 神を愚弄するような攻撃は神殿の加護により守られる！ 貴様が攻撃できるモンスターはその1体のみのようなだな」

「くっ、ターンエンド……………」

まじかよ……………。このターンで地縛神殿と地縛神をどうにかしな



いといけないのかよ。いやでも、待てよ。効果破壊したらアウトなら普通に戦闘で殴ればいいのか。神殿の効果は基本ダメージ回避だからモンスターは破壊できる。なら、俺のターンであのカードをやれるかもしれない！

if 114 : 廉次郎散る

次は俺のターンなのか、ジャックのターンなのか。変則デュエルはまじでわからん。

「臆しているならオレからのターンになるぞ！」

「うっせえな！ 俺はこういう意味不明な変則デュエルやったことねえんだよ！ 俺のターンでいいんだな？」

そういうと、ジャックは黙り始めた。そのあと、不敵な笑みを浮かべてこちらを向いた。

「ならば、次のターンあのトンネルを先に抜けたものが先に制するというのがどうだ？ 地縛神は無敵のカード。こちらのターンだろうが貴様のターンだろうが、どうでもいい。レースでも圧倒的力の差というものを見せつけてやろう！」

そういうと、なんの同意を得ずにジャックはDホイールと共に走り出した。

「まじかよ！ 逃がすか！」

「遊介！ スリップストリームで僕も追いかけていく！ さっさと行け！」

俺が先頭かよ。俺はハンドルを握り、スピードを上げるためにハンドルを内側に回した。

スピードがどんどん上がっていく。トンネルに先に入ったのはジャックだった。そこはどうでもいい。問題は、どう追い抜くか。後方が見えた。すると、ジャックはバイクを少し外にやった後、俺のDホイールの前輪にアタックしてきた。

俺は少しよろけながらも食らいつく。

「まだまだああああ！」

「レースにおいてもこのオレを置いて他に並ぶものなし！ 見ろ！」

もうすぐ出口だ！ もつと食らいついてみる！ 少年！

「うおおおおお！」

じりじりと自分のバイクを前へと進める。ギリギリまで粘り続けるも最終的に鼻の先の差でジャックがこのターンを取った。

「くそっ！ 取られた！」

「まあ、いい。切り替えて相手の挙動を見切れればいいだろ」

廉次郎はそこまで落ち込んでおらず、いつになく冷静に相手を見極めようとしていた。俺も今は俺が変に動くよりも、相手の動きを見たい。

「まあ、そうだな」

「ならば、オレのターン！ ドロー！ オレはチューナーモンスター『レッド・リゾネーター』を召喚！ このモンスターの召喚に成功したとき、手札のレベル4モンスターを特殊召喚する。俺はレッド・スプリンターを特殊召喚する！ オレは、レッド・スプリンターにレッド・リゾネーターをチューニング！ 紅き竜よ！ 炎魔を呼び起こす道を照らし出せ！ シンクロ召喚！ 地獄の業火と共に舞い降りろ！ レッド・ライジング・ドラゴン！ レッド・ライジング・ドラゴンのモンスター効果発動！ 墓地より、「リゾネーター」チューナーモンスターを特殊召喚する！ ライジング・ロード！」

このパターンはこのままレッドデーモンズドラゴンにシンクロ召喚で繋げていくのか？

「そして、レッド・ライジング・ドラゴンにレッド・リゾネーターを

チューニング！ 漆黒の闇を裂き天地を焼き尽くす孤高の絶対なる王者よ！！万物を睥睨へいげいしその猛威を振るえ！！シンクロ召喚！！現れる、琰魔竜 レッドデーモン！」

「この瞬間！ 僕は、罨カード『ミニチュアル・パニック』を発動！自分フィールドに『ミニチュアル』モンスターが存在し、相手がモンスターを特殊召喚したときに発動できる！ すべての魔法・罨を手札に戻す！」

おいおい、それって俺の魔法・罨もかよ！

「俺の魔法・罨もバウンスしてどうすんだよ！」

「知るか！ とにかく今は相手を妨害して勝てばいいんだよ！」

「仲違いか、醜い争いだ。地縛神にとつてそれは不毛！ 速攻魔法『地縛特攻』を発動！ フィールドの『地縛神』モンスターを破壊して発動する。その効果を無効にして破壊する！ さらにオレは、レッドデーモンの効果発動！ 相手フィールド上の表側攻撃表示のモンスターをすべて破壊する！ 貴様らのモンスターを破壊する！ パワー・クエイク！」

俺のフィールドには攻撃表示のジャンク・デストロイヤー。そして表側守備表示の「スターダスト・シンクロン」。廉次郎のフィールドは攻撃表示のミニチュアル・グレートシャインのみ。廉次郎のフィールドはがら空きになってしまった。

「いくぞ！ バトルだ！ レッド・デーモンよ、地縛神を愚弄する者たちに業火の裁きを受けさせろ！ 円谷廉次郎！ まずは貴様に直接攻撃！！ 地獄の剛力！ クリムゾン・ヘル・フォース！」

「永続罨『強制終了』を発動！ 自分フィールドのカード1枚を破壊し、バトルを終了する！」

「無駄なあがきよ！ 我が地縛神の布陣に不足はなし！ カウンター

罨『タイム・ラプス』！ 相手が永続罨の効果を発動したときに発動する。その効果を発動する前に戻す！ 時間よ戻れ！ そしてこの時、タイムリングを逃した『強制終了』は魔法・罨カードに裏側表示になって戻るのではなくデッキに戻る！ さらに時間は逆戻りだ！ 貴様らには何もさせせん！ バトル続行！ 円谷廉次郎に直接攻撃!!」

「ぐああああああああああ!!」

「スカーレット・ノヴァの効果により、貴様らに1000のダメージを与え復活！」

円谷：LP1500

「そして、地縛神スカーレット・ノヴァで阿久津遊介！ 貴様に直接攻撃!! バーニング・フィスト!!」

「くっ!! 俺の強制終了が……」

遊介：1000

ここでなにか逆転のカードを引かない限り、俺たちに勝利はない。

「墓地のミニチュアル・パニックの効果発動！ 墓地からこのカードを除外して発動する！ 相手フィールド上の特殊召喚されたモンスターを破壊する！ お前のモンスターの効果は破壊されたターンのバトルフェイズとかだったな。すでにエンドフェイズに入ったお前は地縛神 スカーレット・ノヴァの効果が発動できない。つまり、神はもう蘇らねえ」

「うまいぞ！ 廉次郎！」

「読んでいた。永続罨、『地縛神の呪縛』を発動。墓地の『地縛神』を効果を無効にして特殊召喚する！ 復活せよ、スカーレット・ノヴァ

！」

また、地縛神復活かよ……。どんだけしぶといんだ！ だけど、効果は免れている。次のオレのターンか、廉次郎のターンであいつをどうにかしないと攻撃力3000のモンスター2体が俺たちを襲いに来る！

「オレはカードを2枚伏せてターンエンド！ さあ、貴様のターンだ！ 阿久津遊介！」

強制終了の発動をタイムラプスの効果でデッキまで戻されてしまつて今はデッキがシャッフルされてしまつた状態。手札にはモンスターはいない。レベル4のモンスターならシンクロ召喚してスターダストをだせる。が、頼みの綱であるセイヴァースターは出てこない。ここは2回のドローにかかっている！

「俺のターン!!」

まず1枚目！ 来た、レベル4 マックス・ウォリアー！

「マックス・ウォリアーを召喚！ そして俺は、マックス・ウォリアーにスターダスト・シンクロンをチューニング！ 集いし願いが、新たに輝く星となる！ 光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!!」

「スターダスト・ドラゴン。なぜか懐かしい響きだ」

「そうだ！ 知らないかもしれないけど、あなたとこのカードには因縁があるはずだ！」

「わけのわからないことを……。そんな雑魚モンスターで我が布陣に勝てるわけがない！」

「勝ってみせるさ！ どれだけ小さな希望でも掴んでみせる！ それ  
が不動遊星のデュエルだ！ スターダスト・シャオロンを特殊召喚！  
このカードはスターダスト・ドラゴンが特殊召喚されたときに墓地  
から特殊召喚できる！ さらに、俺は光来する奇跡の効果で1枚カ  
ードをドロローする！」

これが運命のドロロー……。二枚目!!

「ドロロー……!!! 来た！ 魔法カード、二重召喚！ このターン  
もう一度召喚ができる！ 俺は手札から救世竜セイヴァー・ドラゴン  
を召喚！ 俺はスターダスト・ドラゴン、スターダスト・シャオロン、  
セイヴァー・ドラゴンでチューニング！ 集いし星の輝きが、新たな  
奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンクロ召喚！光来せよ、セイ  
ヴァー・スター・ドラゴン!!」

「なに!? セイヴァー・スターだと?」

「地縛神の効果は効果破壊での蘇生のみ。効果で破壊しても戻って  
くるのなら戦闘で破壊してやる！ セイヴァースター！ 地縛神 ス  
カーレット・ノヴァに攻撃！」

「永続罫 デモンズ・チェーン！ このカードで貴様のセイヴァース  
ターの効果は無効になり攻撃もできない！」

ここで全破壊したとしてもオレのフィールドはがら空きになって  
しまう！ まだ待つんだ！

それにしても…… ジャックはどれだけ相手に何もさせたくない  
んだよ！ おれはこれでターンエンドするしかないのか……。

「ターンエンド！」

「僕のターン、ドロロー！ 僕は、魔法カード、死者蘇生を発動！ 甦れ

！ ミニリチュアル・グレートシャイン!!」

「この期に及んでまた直接攻撃目当てか。フィールド魔法『地縛神殿』がある限り、貴様は直接攻撃できない！」

「学習してねえのはあんただぞ、キング。僕は、儀式魔法『ミニリチュアル』を発動！ ミニリチュアル・グレートシャインを生贄にして、僕はミニリチュアル・グレートシユバルツを儀式召喚！ 小さな大地を穢す、漆黒の巨人……。ミニリチュアル・グレートシユバルツ！ グレートシユバルツのモンスター効果！ 1000ポイントライフを払い、相手表側表示のカードをすべて破壊する！ シユバルツ・デストラクション!!」

「カードがほとんど破壊された!?？ これならいける！」

「このとき、グレートシユバルツは破壊したカードにつき、800ポイント攻撃力をアップする！ シユバルツが破壊したのは4枚！ よって3200ポイントアップ！」

「攻撃力6000か……。一気に仕留めるというわけだな」  
ジャックのライフは5000。これで終われる！

「ミニリチュアル・グレートシユバルツで直接攻撃!! ダーク・ギガンテイウム光線!!」

「ふん、大したデュエリストだ。だが、貴様にオレのライフを減らすことはできない！ トラップカード『魔法の筒』！ 貴様自身のモンスターの効果で敗北するがいい!!」

なに？ マジック・シリンダーだって!? めっちゃ初期の方のカードじゃん！ ていうか、廉次郎はまさか6000のダメージ!?



「ぐああああああああああああああああああ！ くっ……… 罨カード、『バトンタッチ』このカードはタツグデュエルでのみ使用できる。自分が敗北してパートナーがデュエル続行しているときに発動できる！ …… 自分のモンスターを そのパートナーのフィールドに召喚する……… ！ 行け、グレートシユバルツ！ 遊介をまも………」

ガシャン！ という音とともに廉次郎が後ろへ吹き飛んでいく………。

「廉次郎おおおおおー!!!」

i f || 15 : 笑顔

円谷の残してくれたモンスター「ミニリチュアル・グレートシユバルツ」と、俺の「セイヴァースター・ドラゴン」と共にジャックアトラスに挑む俺だったが、彼はそうやすやすと倒れるような人間ではない。

そして、ターンはそのジャック・アトラスへと移っていく。

「惜しみなくいくぞー！ オレのターンー！」

ジャック・アトラス：LP5000

「あんたのフィールドにはモンスターも守るための罠カードもない。一体どうするつもりなんだ？」

カードとライフがある限り、デュエルは続く。相手はジャックアトラスだ。心してかからないとな。

「確かに貴様の言う通り、先ほどの奴のおかげでオレのフィールドはガラ空き。だが、オレは新たな力を手に入れた！ オレはチューナーモンスター、ネクロリゾネーターを召喚ー！」

「なに？ チューナー1体のみの召喚？ なにを企んでいるんだ!？」

「ネクロリゾネーターはフィールドにこのカードがないときに召喚に成功したとき、真価を發揮する。このカードは、墓地に眠る闇属性、ドラゴン族シンクロモンスター1体を特殊召喚する！ 甦れ！ 琰魔竜 レッドデーモンー！」

そういうと、墓地にあつたはずのレッドデーモンがよみがえってきた。ということは新たにシンクロ召喚するというのか？

「まさか、新たなシンクロモンスター？」

「そうだ！ オレは、レベル2ネクロリゾネーターにレベル8琰魔竜

レッドデーモンをチューニング！ 死者の胎動、冥府の門を叩きし紅き竜よ！ その身を焦がして敵を粉碎せよ！ シンクロ召喚！

レッドデーモンズ・ドラゴンーフレア・デスー！」

「なんだ、このモンスターは!?!」

レッド・デーモンズのようにレッド・デーモンズでない……………どこか骸骨のような見た目をしたモンスターだった。攻撃力は……………0? これは、なにかあるな……………。

「フレア・デスの効果発動！ 相手のモンスターすべてを破壊する、そしてこのときのこのカードの攻撃力は破壊したモンスターの合計分となる！ パワー・オブ・デスフォース!!」

「俺は！ セイヴァー・スター・ドラゴンの効果発動！ 相手の魔法、罫、モンスターの効果を発動したときにこのカードをリリースして発動を無効にし、相手フィールドすべてを破壊する！ スターダスト・フォース！」

これで攻撃力6600で直接攻撃されることは防げた。あとはなんとかしてあのカードを引ければ……………。

「俺は、レッド・デーモンズ・ドラゴンーフレア・デスーのもう一つの効果を発動。相手の効果で破壊されたとき、相手モンスターに『フレア・デス・カウンター』を一つ置く。カウンターの置かれたモンスターは、攻撃できずシンクロ召喚の素材にもできない。そして、お前のエンドフェイズにもう一つ置かれる。次のオレのターンにその二つのカウンターを取り除くと貴様は敗北となる！ 後2ターンが、貴様の抗える時間だ。オレはこれでターンエンド！ さあ貴様のターンだ！」

攻撃力アップに加えて、特殊勝利条件系かよ。ただ、俺のモンスターは廉次郎のミニリチュアル・グレートシユバルツの1体のみ。シンクロなしでこいつを除去する方法は……………。

「俺のターン！」

阿久津遊介：LP1000

「来た！ このカードが!! 俺は魔法カード『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！ 俺はフィールドのミニリチュアル・グレートシュバルツと墓地に眠るセイヴァー・スター・ドラゴンを除外して融合!! 竜の力を纏う波動の戦士！ 波動竜騎士ドラゴエクイテス！」

「融合、だと!? シンクロに頼っていたお前が？」

「そうだけ、残念だったな。そして俺は、ドラゴエクイテスのモンスター効果発動！ 墓地のシンクロモンスター1体を除外してその名前と効果を得る！ 俺は『紫眼の聖装竜』を選択！ そして、パールアイズとなったドラゴエクイテスの効果！ デッキから装備魔法『巨大化』をこのモンスターに装備する！」

「なに？ 巨大化だど!?」

俺もこんなカードがここで役に立つとは思っていなかった。ジャックのフィールドはガラ空き。ライフ差は相手の方が上だ。そして巨大化の効果でドラコエクイテスの攻撃力は倍となる。ドラコエクイテスのヴィジョンが大きくなっていく。俺は臆することなく、ジャックに攻撃する。

『紫眼の波動聖装竜騎士ドラコエクイテス!? ああもう、効果のせいで名前がめちゃくちゃだよ！ いや、モンスターで直接攻撃!! これで、終わりだ!」

ジャックは特に何もすることはなく、ただフツと笑みを浮かべてダメージを受けた。

ジャック・アトラス：LP0

「見事だった。敵として不足なし。このジャック・アトラスを打ち倒したこと、誇りにするがいい！」

「ありがとう。あんたは地縛神にとらわれたとしても強かった

よ………」

ジャックのDホイールが後ろに下がっていく。それと同時に別のバイクが後ろから這い上がっていく。

あれは、二色のバイク？ 遊矢か？

「遊介、ジャックに勝ったのか？」

「おう、やってやったぜ。　ダークシグナーのくせにいい笑顔しやがるぜ」

「そっか、キミもジャックを笑顔にしたんだ。　じゃあ、今度こそ俺と最高のデュエルをしよう！」

そういうと、遊矢は両手をバツと広げた。彼の笑顔もまた最高に輝いていた。

ジャックが後ろに下がるのを見計らったかのようなタイミングの良さも驚きだが、やっぱリアニメのイメージとなんか違う気がする。何が引つかかっているんだ？ 俺は……。

「わかった」

「でも、まずは俺からのプレゼント！ 俺は速攻魔法『スマイル・ユニバース』を発動！ EXデッキにいったペンデュラムモンスターを特殊召喚！ 俺は、EXデッキから雄々しくも美しく輝く二色の眼！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを特殊召喚！ この効果で召喚された、オッドアイズの効果は無効化されるけど、相手はその数値分回復します！」

遊介：LP3500

「さんきゅー。　でも、いいのか？ 相手のライフを回復させちゃって」

「だって、デュエルは楽しむもんだろ？ それに、相手と分かり合うためにまずは話し合う時間を作らないと！」

「そういうところ、やっぱり変わってるわ」

「だけど、これだけデュエルが連続しているとデッキがみるみる減っていく。墓地や除外されたモンスターは負けてリセットするまで戻ってこない。これがレーシングデュエルの神髄だと思う。いかにして手札・デッキ消費を抑えて戦うか……。それが今回の課題なのだろうか。」

「遊矢はそんなこと構いなしにデュエルをやってきたのか、俺よりも残りデッキ枚数が少ない。彼は一体どうするつもりなんだ？」

if116：揺れ始める心

ジャックに続き、今度は遊矢が相手か……。俺のデッキはあと6枚くらいか。

相手は、3枚……。どれだけ展開したとしても、相手は5ターン以内に敗北する。

それまで耐久出来るか？

「先攻後攻は、俺の方がライフ少し少ないからいいよね」

遊矢がこちらを見る。

「それはいいけど……。大丈夫か？」

彼のフィールドのモンスターはスマイルユニバースで召喚されたオッドアイズ・ペンデュラムドラゴンのみ。ペンデュラムカードは残っているものの逆転はできるのか？

「大丈夫！俺の華麗なショーでこんな状況ひっくり返してやるさ！

俺のターン、ドロー!!」

遊矢：LP3000

「俺は、まず手札からEMドロバット・ジョーカーを召喚！このカードが召喚したとき、デッキから『EM』『魔術師』『オッドアイズ』モンスターを手札に加える！」

「デッキに数が限られているというのにさらに手札補充だって？ 正気なのか？」

「俺だって怖いよ。デッキがもう少ない中手札を加えることなんて。それと同じくらいに、今知らない場所で自分のデュエルをできているか不安なんだ。それでも、俺はこのカードに賭ける！ 畏カード『現世と冥界の逆転』！」

なんだって？ あれは、デッキと墓地のカードを入れ替える罠カード！

「まさか、俺たちのデッキと墓地を？」

遊矢：LP2000

「ああ！ 1000ポイントライフを失うことになるけど、これで俺たちはデッキ切れで負けたり、勝ったりなんていう興ざめなことはない。この世界で、俺はデュエルでみんなを笑顔にしたい！ 俺は、セッティング済みの刻剣の魔術師とEM希代の決闘者でペンデュラム召喚！ EXデッキより舞い戻れ！ EMオッドアイズ・ライトフェニックス！ 手札より、EMシルバークロウ！ そして、次元の狭間に潜みし二色の眼を持つ竜！ オッドアイズ・ペンデュラムグラフドラゴン！」

「中々、面白いことをしてくれるな。さすが、エンタメデュエリストって感じだ。柚子ちゃんもきつと元の次元で見守ってくれているはずだ。だから、不安にならなくていい！ 俺と熱いデュエルしようぜ！」

輝く笑顔で返してくれると思っていたがその言葉は予想外のものだった。

「ん？ ユズ？ ああ、零児が言ってた子かな？ ごめん、ここにきてから記憶がぐちゃぐちゃで……でも、待っている仲間がいるって心強くなって思うよ」

「え？ 記憶がない？ でも、ジャックは知ってたろ。彼を笑顔にしたデュエルも忘れてんのか？」



「ジャックの存在はここで知ったんだ。彼はこの世界の元デュエルキングだったらしいんだけど、なぜか行方不明になって、それでも一度現れた時にはダークシグナーになっててデュエルを利用してみんなを困らせていた。俺は、それでも分かり合える。彼とのエンタメデュエルで誤解を解きたかっただけだよ。それを君がやってのけた。それだけだよ」

「それだけって……」

思っていた以上に彼の記憶は抜け落ちているようだ。彼の記憶は戻らないのか？戻すとしても、どうやって？

「おしゃべりはここまで！俺はこれでターンエンド。さあ、遊介！君のエンタメを見せてくれ！」

デッキ切れはなくなったけど、ここからはまたドローと今の手札に掛かっている。

遊星の記憶がこれまで通りになったことを考えると、遊矢にもそれができる可能性がある。やってみるしかない！

「俺のターン！ドロー！俺は永続魔法シンクロ・チェイスを発動！そして、ジャンク・シンクロンを召喚！召喚に成功したので、俺は墓地にいったジャンク・コンバーターを特殊召喚！ジャンク・シンクロンとジャンク・コンバーターでシンクロ召喚！来い！ジャンク・ウォリアー！」

「オッドアイズ・ペンデュラムグラフ・ドラゴンの効果でEXデッキから特殊召喚する度に300のダメージを与えるの分かってるのか？」

遊介：LP3200

「そんなダメージ、大したことじゃない。俺はさらに！ シンクロチェイスとジャンクコンバーターの効果で、ジャンク・シンクロン、そしてジャンク・コンバーターを特殊召喚！ さらに俺はジャンク・シンクロン、ジャンク・ウォリアーでシンクロ召喚！ 飛翔せよ、スターダストドラゴン！」

遊介：LP2900

「すごい、まるで動じない……。なんて気迫だ」

気の抜けたような言葉に少し俺はいら立ちを覚えた。

「それよりなんぞだ。 さっきのターン、遊矢のフィールドにはレベル4のモンスターが2体並んでいた。それでダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴンを出せばよかったじゃないか」

「それは、遊介にもこのデュエルを楽しんでほしくて」

「楽しませることと、手を抜くことは違うだろ！ 俺は全力で遊矢、お前に勝つ！ 手抜きはなしだ！ だからお前も全力でこい！ そうじゃないと何も楽しくないだろ！ 俺は、さらにシンクロ・チェイスの効果を使用する！ もう一度墓地から甦れ！ ジャンク・シンクロン！ 俺は、ジャンク・シンクロンにジャンク・コンバーターをチューニング！ 集いし紅き絆が、希望の未来へと導く！ 光差す道を進め！ シンクロチューナー！ アクセル・シンクロン！ アクセル・シンクロンの効果発動！ デッキからチューナーを墓地に送り、そのレベル分のモンスターのレベルを上げるもしくは下げる！ シンクロ・ギアチェンジ！ 俺はデッキからジャンク・シンクロンを選択し、そのレベル分下げる！ アクセル・シンクロンのレベルは2！ クリアマインド！ レベル8スターダスト・ドラゴンにレベル2となったアクセル・シンクロンをチューニング！ アアアアクセルシンクロオオoooooooooooo！ 生来せよ！ シューティング・スター・ドラ

「ゴン！」

攻撃力3300のシューティングスターが盤面に並ぶ。意外にも、ドラゴエキイテスとこのカードが並ぶ景色は珍しい気がする。たしか、クリアマインドの境地にたどり着けず迷っていた彼が編み出した苦肉の策がドラゴエキイテスだった気がするし……。

遊介：LP2300

「一気に攻撃力3000以上のモンスターを2体も並べるなんてすごいよ、遊介！ もっとだ、もっと俺にお前のデュエルを見せてくれ！」

少し彼の目の色が変わったような気がするが、気のせいだろうか。このまま攻撃していいものだろうか？

いや、ここで本気でいかなければさっきの説教が俺に返ってくる！

「俺はここで墓地にいった魔法カード『Sp|Clear Mind』を除外して発動する！ スピードカウンターすべてを使用して発動する！ 自分のデッキから5枚までチューナーを選択し、選んだカードを任意の順番で上に置く！ 俺は5枚のチューナーをデッキトップに固定する。そして、シューティング・スター・ドラゴンの効果！ デッキを5枚めぐり、デッキに戻す。当然俺がめぐったカードはすべてチューナーよってシューティング・スタードラゴンは5回攻撃できる!!」

「な、なんだって!? だめだ、遊介！ そんな力任せはデュエルじゃない！」

「力で相手をねじ伏せる。それも遊戯王の黄金パターンだ。それに、お前が本気でこいっていったんだろ。俺は！ シューティング・スターで遊矢、お前のフィールドに並ぶすべてのモンスターに攻撃する

！ スターダスト・ミラーージュ！ 5連打アツ！」

「俺は、EM希代の決闘者のペンデュラム効果！ このカードを手札に戻して魔法カードを除外して発動する！ このバトルフェイズではモンスターは破壊されず、ダメージは半分になる！ アクション・イリキュジョン！」

遊矢：LP1250

まずは、EMシルバークロウに攻撃して750ポイント相手ライフにダメージを与えた。そしてEMドクロバット・ジョーカーに攻撃しようとしたときだった。

「EMオッドアイズ・ライトフェニックスのモンスター効果！ このカードをリリースして自分フィールド上の『EM』モンスターの攻撃力を1000あげる！ EMドクロバット・ジョーカーの攻撃力は2800！」

「だが、こちらの方が攻撃力は上え！」

「ぐっ!!」

遊矢：LP1000

「まだまだ！ 俺のライフは残っている！」

だが、相手のライフは風前の灯火だ。このまま押し切るしかない。

「さらに、俺はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに攻撃！」

「俺は、罨カード『リアクション・フォース』を発動！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが攻撃対象になったとき発動する！ このバトルフェイズ中、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力を元々の数値の倍になる！」

な、なに!? そんな罫まで仕掛けていたのか!?

「だが、オッドアイズ・ペンデュラムグラフ・ドラゴンがガラ空きだぜ?」

「リアクション・フォース発動中は、相手がバトルするとき、俺のフィールドのオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンしか戦闘の対象に選べない。それでも戦いたいなら相手になってやる!」

「…… ターンエンド」

「遊介! どうしてこんなデュエルをしたんだ!? いつものお前らしくないぞ」

「いつものって、旧知の中じゃないだろ? 俺たち」

「それでも、分かる。お前がこんなデュエル望んでやっているわけない。楽しそうにデュエルをしていたお前が!」

「デュエルは勝ち負けを決めるゲームだ。勝った人間も負けた人間も笑顔になれるもの正しいし、勝ち負けを優先して相手にゲームをさせないのも正しい戦法だ。デュエルに間違いなんてない」

「間違ってる! 相手になにもさせないなんて、そんなのデュエルだとは認めない! 俺はこのデュエルで……。うっ、頭が……。」

そういうと、彼は頭を抑えてハンドルに突っ伏した。

一体彼の身に何が起きているんだ?

## if 117 : 覇王の再臨

遊矢から反応がない……。これは本当に気味の悪いことだ。ア  
ニメだと、ここからまずい展開が繰り広げられてしまう。

「貴様は、オレを怒りへと導いた。ならばその怒りで、お前をねじ伏せ  
る！ オレの、ターーーーン！」

ユーヤ? : LP1000

「なにをするつもりだ！ 遊矢！」

「オレのフィールドには同じレベルのモンスターが2体並んでいる。  
オレは！ EMドロバットジョーカーとEMシルバークロウで  
オーバーレイ！ 2体の闇属性Pモンスターでオーバーレイネット  
ワークを構築！ エクシーズ召喚！ 漆黒の闇に住まう反逆の牙よ、  
我に屈し、我に従え！ 出でよランク4！ 覇王眷竜 ダーク・リベ  
リオン！ 見たかったんだろ？ オレのエクシーズモンスターを！  
本気の、怒りを！」

あのカードは、ズアークの従えていた四天の龍の一体!?

まさか、本当に彼の中でズアークがよみがえったとも言うのか？

「怒り……。どうしてそこまでして力任せのデュエルを憎むんだ  
？」

「怒りは自分を強くする。大きな力を得ること、それがデュエルなん  
だろう？ 怒りを力に変えることは間違っていないはずだ！ さあ、  
バトルだ！」

「それこそ、間違っているってことがどうしてわからないんだ！ 怒  
りにとらわれるな！ 遊矢！」

「オレの名は、ユート！ 怒りの化身、ユートだ！ オレは霸王眷竜  
ダーク・リベリオンでシユートイング・スタードラゴンを攻撃！ こ  
の瞬間！ ダークリベリオンのオーバーレイユニット一つを取り除  
き、相手モンスターの攻撃力を0にして、その元々の数値分をこのモ  
ンスターに加える！ モンスターたちの怒りがお前を潰す！ 反撃  
のアブソリュート・オブデイエンス！」

「シユートイング・スターの効果！ 自信を除外して 霸王眷竜  
ダークリベリオンの攻撃を無効にする！」

「まだだ！ まだオレのバトルフェイズは終了していないぞ！ ドラ  
ゴエキテスの装備しているカード、巨大化はプレイヤーのライフポ  
イントによって攻撃力が変化する。今、お前の方がライフは上。つま  
り、ドラゴエキテスの攻撃力は元々の半分となる！ そして、オツ  
ドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンでドラゴエキテスに攻撃！ 螺  
旋のストライクバースト！」

「俺はトラップカード、『ガードブロック』を発動する！ この時、自  
分のダメージは0になる！そして、1枚ドロ！」

遊介：LP2300

次の直接攻撃で俺は負けてしまう！ だが、手札にあるこのカード  
さえ使えば！

「だが、ドラゴエキテスは破壊される！ ドラゴエキテス、爆殺！  
お前のフィールドはガラ空き、これでとどめだ！ オツドアイズ・  
ペンデュラムグラフ・ドラゴンで直接攻撃！ 螺旋のデイメンション  
バースト！」

「手札より、速攻のかかしを墓地に送り発動！ 攻撃を無効にし、バト  
ルフェイズを終了する！ ふう、ガードブロックを伏せていて正解

だった……。どうした、ターンエンドの宣言をしろよ」

「くっ……。ターンエンド。命拾いしたな！　だが、次はない！」

「エンドフェイズに、シューティングスターはフィールドに戻る！　再び生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン!!　いや、次はないのはお前の方だぜ？　なぜなら」

先に見えるはゴールであるデュエルアカデミア正門。長い戦いもこれで終わり、このターンさえ潜り抜ければ俺の勝ちだ！

「そんな逃げるようなデュエルが許されると思ってるのか！」

「授業だからいいに決まってるだろ！　いい加減目を覚ませ！　俺がゴールする前に、お前に引導を渡してやる！　俺のターン!!」

俺が引いたカードはスピードスペル。このデュエルがDホイールによるライディングデュエル由来なことをすっかり忘れるくらいにはこのカードの役立つところがなかったな……。

『スピードメンション・スピリット』を発動する。自分フィールド上にシンクロモンスターのみがいる時このカードはスピードカウンターを消費せずに発動することができる。だが、エンドフェイズ時に対象となったモンスターはゲームから除外される。除外されている自分のモンスター1体の攻撃力を選択したモンスターの攻撃力に加える！　俺は除外されている紫眼の聖装竜の攻撃力2500をシューティングスターの攻撃力に加える！　さらに、俺は『スピード・スピリッツ』を発動する！　スピードスペルが発動したとき、このカードは墓地からも発動できる。このカードを墓地から除外して発動する。自分フィールド上のモンスターはバトルフェイズ時、攻撃力は2倍になる！」



よって、俺のモンスターはバトルフェイズ時に……えーっと、いくつになるんだ？ ええいままよ！

「バトルだ！ 俺は、シューティング・スター・ドラゴンでオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに攻撃!! これが俺の！ 思いだ！ 目を覚ませえ！ 遊矢！」

「攻撃力、11600!? フツ……」

呆れ笑いと共に彼は、攻撃を受け入れた。そして、彼のライフは0となった……。

『ライフが0になりました。ホイールを強制停止します』

「えっ!? どうなってるんだ？ 俺が負けてる？」

「俺が、勝たせてもらったぜ……。後で、いろいろ話そう」

「よくわからないけど、なんだか清々しい気分だ……。俺の負けだよ、遊介」

彼は空を見上げてDホイールのハンドルから手を離れた。

「よっしゃあ！ ゴールだ！」

そこには、友崎が先にDホイールから降りて待っていた。

「カツン！ お前、ゴール速すぎだろ!?!」

「余裕だね……。お前は逆にボロボロじゃねえか」

「まあ、いろいろあってさ」

話していると、次々とデュエリストが帰ってきた。すると廉次郎がやってきた。

「廉次郎！ お前、ライフ0になっただろ!？」

「ライフは半分になるが、再戦することができた。それでなんとか持ちこたえたが、この結果だ……。まだまだ僕の開発したデッキは改善の余地がありそうだ」

そして、赤馬零児、そして遊矢とゴールを踏みしめていった。

ゴールする生徒たちに明日香をはじめとして遊星、そしてブルーノが労いの声をかけにやってくる。

「遊介！ いいデュエルだったな」

「遊星！ ありがとう……。あなたに褒められるなんて嬉しいよ」

「廉次郎くん、キミのデュエル見せてもらったよ。とても豪快な効果を持つテーマだね。でもまだまだ可能性はありそうだ。次なる境地を期待してるよ」

「当たり前だ。そのために僕は開発課で研究を重ねているんだ。そういえば、なんでジャック・アトラスなんかがこの授業に乱入してきたんだ？ それにエド・フェニックスも……」

「エドが授業に乱入してきたの?」

明日香が廉次郎の言葉に疑問を投げかける。まあ、あたりまえだよなあ。

「そうだ。ボクは僕自身の目で確かめたかった。遊城十代の愚かな姿

を！　だが、ここにはいなかったみたいだけどね。やあ、明日香くん、久しぶり」

久しぶり……か。原作からどれだけ時間がたっているのかは知らないけど、その言い草と明日香が先生になっっている年齢っていうのを考えると相当は立っているだろうな。十代、彼は今何をしているんだろう

「俺がどうかしたんだ？」

「だから、十代を名乗るデュエリストがこのシティで暴れていると聞いてボクは正義の鉄槌を彼に与えるために新たなDとともに！　つて、十代！　いつの間に？」

「よ、エド！　それに明日香！　ちよつと、ふけ……イテエツ！　いや、なんでもありません」

そこにいたのはお茶らけた雰囲気と大人な雰囲気を混ぜ合わせた不思議なオーラを纏う赤い服を着た青年が立っていた。旅人の恰好よろしく、片手でぶら下げられる荷物しかもっていないのも彼らしい。

「十代！　あなた、一体どこほつつき歩いてたの！　卒業以来、音信不通になって！　私たちがどれだけ心配したと……」

明日香の目から一筋の涙が頬を撫でていく。そっか……。そうだよな。

「悪い……。でも、今はゆっくり話してる暇はないんだ。この世界に危機がせまってる。協力してくれるよな？　ユースケ！」

そういうと、俺の方を向いた。その目はオッドアイ、黄色と青の覇王の目つきだった。彼の前ではなんでもお見通しというこらしい。にしても、世界の危機って俺がこの世界に来たことと関係があるのか

?

世界に危機が迫っている。その言葉は少し心に重く響いた。この世界がいびつに混じりあっている原因が、世界の危機につながっているのだとしたら世界をもとに戻していかないとな。

「とにかく、この話は放課後にしませんか？ まだ授業ありますし」

「おう、いいぜ。じゃあ、放課後までのんびりしてるぜ」

「私も、その話聞かせてもらってもいいかしら？ 十代」

「明日香も？ まあ、いいけど」

俺は、その後赤馬と遊矢にその話をした。赤馬は前に自分が別の次元から来た人間だということを知っているし、この世界の危機ことを話せば力になってくれるかもしれない。遊矢はさっきのことも含めて話をしないといけない……。

こうして、放課後、明日香先生も仲間に入って赤馬零児、遊矢、遊星、エド、俺、そして十代さんが教室の一角で会議を始めた。

「で、世界に危機が迫ってるってどういうことですか？ 十代さん」

俺が首をかしげると、彼は机の上に座り始めた。

「俺が世界を旅していたとき、一瞬宇宙の波動が歪んだのを感じたんだ。それでいろんな次元の世界を見に行ったがなにもなかった」

「なにもないなら大丈夫ってことでしょ」

「いや、そうじゃなくて！ この宇宙にはたくさん世界があるだろう？ ほら、マルチ……. なんだっけ？」

すると、赤馬がメガネを直して答えた。

「マルチバース。この世には今の次元や常識とは異なる世界が存在するということいわゆる多次元宇宙論というものことでしょうか」

「そうそう！ それそれ！ それが音もなく消えちまったんだ。そして、この世界が残った。だから俺がここに來たってわけ」

世界が、一つに？　まるで超融合みたいだな。たしかにこの世界には、交わることもない遊戯王シリーズのキャラクターたちがいる。そして、俺や友崎も……………。

「ちよつと待て！　いきなりやってきてそんな話が信じられるわけがないだろ！　それに十代、キミにはシテイを暴れたという容疑がかかっている。それはどう説明するんだ」

それに関しては俺がデュエルしてるからなんとなくわかる。彼は十代と名乗る偽物だ。

「それは多分、別人だと思います。マルチバースの観点からするともしかしたらこの世界での十代かもしれないませんが、俺は偽物だと思います」

「なぜそう言い切れる」

「だって、十代さんにはA・HEROなんてカード持ってませんよね？」

「なにそれ？　新たなヒーローモンスターってこと!?　すげえ！　久しぶりにワクワクするじゃねえか！」

十代さんは目を輝かせて俺にそれがどんなモンスターかしつつこく聞いてきたが、この感じ昔の十代さんに戻ってる感じがしてうれしいな。

「ここはやはり、新たな槍を作る必要があるな。己の世界を取り戻すための槍の勇士。ここにいるメンバーは確定するとして、後は……………」

「ちよつと待て、零児！ やるかどうかはみんなの意見で決めること  
だろ？」

遊矢が零児を引き留めると、いままで話に入らなかつた遊星がボ  
ソツと言いだした。

「別に俺は構わない。世界の危機ならより一層、俺たちの絆でその危  
機を乗り越えるべきだと思う」

「だよな！ 遊星！ 俺もそのつもりでユースケも誘ったんだしな  
！」

そういうと十代さんは遊星の肩に腕を回し、俺の方を見た。

「俺も、一番初めに赤馬に協力しますって言っちゃったし。十代さん  
に言われたらやるしかないかなあつて」

「生徒が巻き込まれるっていうなら、教師となった私も参加させても  
らうわ！ それでいいわよね。十代、それに零児くん」

「強力なデュエリストであれば歓迎します、天上院明日香先生。遊矢、  
お前は どうする」

「俺は……。やるよ。遊介がやるって言ってるのに俺だけが逃げる  
だなんて嫌だ！」

「あたりまえだ。この話を聞いて逃げる奴は決闘者じゃない。ボクも  
参加させてもらう！ だが、世界の危機にあの偽十代ターゲットが関わっていた  
としたらそれはボクの標的だ！ 邪魔だけはするなよ」

後はもう少し、ランサーズの人員を増やしたいな。もしかしたら

ズアークが復活するかもしれないし……。遊矢、絶対お前を二度と悪魔にはさせないからな。そうなったとしてもきつと俺たちが助けて見せる。彼を見つめていると、赤馬がメガネをまたカチャッと直して俺たちをまとめた。

「敵が何者なのか、どれほどの規模なのかは不明だ。だからこそ、私たちは慎重に決闘者選びをしなければならぬ。だが、この世界には我が社はなく、海馬コーポレーションという会社がこの街とアカデミアを管轄しているらしい。私はそこに話をつけてみる。では、失礼」

「零児くんの話が終わるまでは私たちは待機って感じかしら？」

明日香は腕を組む。いや、それだけじゃだめだ。

「俺たちは俺たちでできることをしましょう。俺たちだけじゃなくて、もう少し人員を……」

「そんなにいるかしら。強力なデュエリスト……。まあ当たってみるわ」

「ボクも少しプロデュエリストに当たってみるよ」

他の人たちはちらほらと教室を出ていった。そういえば、遊矢に話をしなきゃ……。

「ところでさお前、何者？ さつきからどす黒いものがダダ洩れなんだけど」

十代はまた、オッドアイ状態になって遊矢の腕をつかみ出ていこうとしているのを止めた。やっぱり彼にはわかるんだ……。

『気を付けるんだ、十代。彼はキミと同じ波動を感じる……』

突如として、女性の声が聞こえてきた。これはきつと、ユベルだろう。ユベルは精霊だから俺には見えないけど、声はなぜか聞こえてく



る。俺だけ？

「え、なんなんですか？ 急に」

「えーと遊矢、彼は遊城十代。説明が難しいんだけど、簡単に言うと、彼にはデュエルモンスター精霊が宿っててその力で色々わかつちやう感じなんだ」

「デュエルモンスターの精霊？ そんなものある……。う、うわあ！？ モンスター？ でも、ソリッドヴィジョンなんてどこにもないし……。」

「お前、ユベルが見えてんのかよ！ 驚かせるつもりはなかったんだが、すまねえな。ユベルも別に悪気があるわけじゃねえんだけど、ちよつとこいつ過保護でさ」

過保護とかいう次元じゃないでしょ……。

「は、はあ」

「それで、この遊矢ってのは何者なの？ ほんとに味方にして大丈夫なの？」

これは記憶のない遊矢より、俺が話した方がいいかもしれない。

「それは、俺から話します。遊矢も、心して聞いてほしい。君は、かつて世界を滅ぼしてしまった決闘者の生まれ変わりなんだ。デュエルモンスターの怒りの声に飲まれ、神の力と同等の力を手に入れてしまった悲しき人。それがズアーク、キミなんだ」

あれ、こんな話だっけ？ なんか違うような気もするけど……。

「俺が、世界を……！？ そんな、嘘だ。何かの冗談だろ？ だって

俺はみんなを笑顔にするためにデュエルを」

「彼もまた、同じだった。でも、人の刺激欲求とモンスターの怒りによって彼は狂ってしまった。だから遊矢、怒りや悲しみに捕らわれないうで君自身の心の闇に打ち勝ってほしいんだ」

でも、またなんで彼の中にズークがいるんだ？ いや、でもユートが彼の中にいるから最終回のタイミングとは別のタイミングで来たのか？

「俺自身の、心の闇？」

「誰にだって間違いくらいあるさ。俺も間違いばかり起こして友達を、仲間を傷つけてしまった。そして愛した人さえも……。でも、それを乗り越えて受け入れて前に進まなくちゃいけない……。俺はデュエルを通して、アカデミアを通してそれを学んだんだ」

たしかに十代の壮絶な人生の歩みから考えると説得力が違う。

「もしかして、レーシングデュエルのとき記憶を失ったときって俺が怒りに飲み込まれていたから？」

「まあ、多分。君のもう一人の人格として現れているのかわからないけど、ユートが君に代わって俺とデュエルしていたんだ」

「ユート……。なんだか、聞きなじみのある名前だ」

そらそうだろうよ。彼がどれだけ、キミの中にいたのか……。とにかく、遊矢とは話ができた。きつと、気を付けてはくれるだろう。

「ま、お前の力がどれだけなのか知らねえけどさ、困ったときは力になるぜ。遊矢」

「……。ありがとうございます」

そういつたと同時に十代は、遊矢を解放した。遊矢は少し肩を落としながら廊下を歩いて行った。

「あいつ、大丈夫かあ？」

「……」

正直、わからない。でも、俺たちがいる限り悪夢は繰り返させたくはない。

十代さんは俺の肩を叩き、教室を出た。考えすぎても仕方ない。俺も廊下にでるとそこには廉次郎が窓にもたれかかっていた。

if119：開発！ 新たな力！

ランサーズ結成会議を終えた後、教室を出るとそこには廉次郎が立っていた。

「ちよつと面貸せ」

いつもの上から目線の言葉は少し、申し訳なきように聞こえた。

彼の言うことを聞かないと何言われるかわからないし、俺は何も言わずついていくことにした。

「どこ行くんだよ」

「開発研究室。開発課がデュエルモンスターズのカードを開発する授業に使う場所だ」

開発研究室……。そういえば、この世界のデュエルアカデミアにはデュエリストを輩出する普通科と、デッキやカードを開発、研究する開発課があるんだったな。一体そこに行つてなにをするんだ？まさか、またこいつとデュエルを？

少し足取りを重くしていると、すぐに開発研究室についた。

「ここにあるカードアーカイブ、一般的に販売されているカードデータが見れるコンピュータを探してもお前の紫眼は見つからなかった」

「だから、俺をこの施設で無断でカードを作った不届きものだつて思つたんだよな」

「ああ、だがそれは勘違いだった。さらに俺はお前のカードの謎を調べるために開発課用のアーカイブリストを見た。そこには、ここで作ったカードのリストが乗っている。もちろん、僕のもある」

そういつて、中に入りコンピュータにアクセスしてみせると彼の創った「ミニチュアル」の他に見知らぬカード群が並んでいた。これが、開発課独自のアーカイブ……………」

「ここで、お前のカードを調べたところここでも検索には引つかからなかった。これが示されることは一つ。お前は開発課に一度も来ていなかったということだ」

「ほら！ 俺の言ったとおりじゃん！ でも、ますますわかんなくなつたな。俺のこのカードのルーツ……………」

「そうだな……………。だから、その……………悪かった。執拗にお前を追いかけて犯人呼ばわりして」

「いいよ、もう。でも、話はそれだけ？ 多分違うよな？」

彼が詫びを入れるために俺をわざわざここに呼び出したとは思えない。なにか、ある。

「お前らの話を廊下で聞いていた。お前たちがこの世界のために戦うつてことも……………。僕もそこに加入したいなんていうおこがましいことは言わない。だが、一言だけ言う。お前は今のままでは足手まといになる」

は？ 割とガツガツした性格してそうだから「僕も混ぜろ！」とか言つてきそうなのに謙虚だな。でも、一番聞き捨てならないのは俺が他のランサーズのメンバーのお荷物になることつてことだ。

「ふざけんなよ。これまでだって俺はいろんな奴に勝つてきただろ！」

「お前のそのデツキ。はつきり言つて急ごしらえだ。今まであつたものにオリジナルを入れただけのごちゃませデツキだ。いずれ、何もで

きずに敗北することも考えられる。もつと紫眼の聖装竜とかのカードを召喚出せるデツキに変えるべきだ」

「これは俺の魂のデツキなんだよ！ それをややすやすと手放せなんて正気か？ お前も弱いから変えろって言われたらいやだろ！」

「当たり前だ！ だが、僕の創作意欲がお前に新たな力を与えてやれっとうるさいんだよ！ お前は、あいつらが完璧な盤面で輝くところを見たくはないのか!?!」

俺は自分のデツキを見た。カードの一番上には紫眼の聖装竜が燦然と輝いて見えた。まるで、もつと俺を使ってくれと言わんばかりに…………。

たしかに、今のカードプールでは出せるタイミングは限られてくる。紫眼の聖装竜は光属性のチューナーが必要だ。それに聖装刃竜はシンクロモンスターを素材にしないと真価を発揮してくれない。今のままでは正直彼らを最善の能力を活かしきれていない。その指摘はごもつともだ。

やっぱり俺は強くなりたい。憧れの遊星を超えたい。だとしたら遊星の真似事じゃなくて、俺自身のデツキで…………。

「ああ、分かった…………。こいつらには悪いけど、真似事はもうこれで終わりにするよ。ここからは俺自身の魂でデュエルするよ」

「そうか。じゃあ、準備しておく。明日、開発の授業があるからそこで考えよう。僕はアイデアを出しておく。お前も家で考えておけ！

いいな」

「当たり前前よ！ じゃあ、また明日」

そういつて俺たちは研究室を後にした。そして、長い一日は終わり

家路についた。

母の作る夕飯を元気に平らげ、その日は眠りについた。というより、目をつむりながら自分のデツキについて考える。テーマかカテゴリで考えるなら『聖装』とか『シン』がつくようなカード群にしたい。考えをまとめつつ意識が遠のく。

次に起きた時はもう朝だった。友崎からのインターホンが今日も鳴り響く。俺は朝食を軽くすませて学校に行く。

「じゃあ母さん、学校行ってくるー！」

「はい、行つてらっしゃい」

母親に挨拶をすませて友崎とアカデミアに向かう。

「今日は開発課の授業行くんだけど、遊介も行くか？」

「え？ ああ、俺もそのつもりだったから……。にしても偶然ってあるんだな」

「俺たち親友だからな！ 被って当然よ」

そうして俺たちはアカデミアに着いて開発課の授業の教室である開発研究室に向かった。昨日見た場所、でも夕方見た景色とは少し違うものだった。

「よう遊介。案は持ってきたか？」

廉次郎が手を挙げて俺を呼び留めた。案ていうほどじゃないけど、大体のことはまとめたノートを取り出して

「うーん、なんとなく？ やっぱカテゴリ構築がいいかなと思って『聖装』をカテゴリテーマとしていきたいんだけど」

「お前たち最近仲いいな。俺も混ぜてよ。俺もデツキ作りたいし」

そういうと、少し廉次郎が眉をひそめてカツツンを見てめんどくさそうに

「まあ、勝手にすればいいさ。君も興味があるなら僕が教えるよ」

そう言っただけはあつた。彼は機械の前に立った。これが、カードを生成する装置みたいなもんか？

「デュエルはただ、制圧することだけがすべてじゃない。バランスが大事なんだ。特殊勝利、ダメージ、デッキ破壊……。勝利条件は多岐にわたる。ここではすべてが叶う。だが同時にゲームをするための制約もある。お前たちは何を創る？」

「すべてが叶う……。よし、やるか！ 俺は、『聖装の魔導士』を創作！ このカードは召喚・特殊召喚に成功したとき、デッキから『聖装』と名の付くレベル3以下のチューナーモンスターを特殊召喚できる！ このカードのレベルは4！ 攻撃力1600！ 防御力1200！」

「シンクロの召喚コストパフォーマンスをよくしたテキストだな。まあまあだな」

「じゃあ俺は新たなカードを想像しちゃおうかな？ 俺はフィールド魔法『アルカトラズの理想郷』を創作……。発動の効果処理としてデッキから、『アルカデア』もしくは『アルカトラズ』と名の付く通常モンスターを手札に加える。さらに1の効果としてフィールド上のアルカトラズモンスターの守備力は300ポイントアップする」

「アルカデアとアルカトラズ？ その名前、知っているぞ。この研究室で勝手に作られたカード群だろ」



「なんだって？ そうなのか、廉次郎」

廉次郎とカツツンの両方の顔を交互に見るもカツツンは涼しい顔をしているし、廉次郎は眉をひそめている。

「どうだ？ 廉次郎くん。彼のデツキおもしろそうだろ？」

後ろから男が話しかけてきた。一体誰だ？

「宇陀……」

「先輩にはさん付けしろって学ばなかったのかな？ 君は。まあ、いい。彼のカードはこの開発課2年の宇陀<sup>うたごすも</sup>宙が許可した。彼の気持ちを聞いた時、私は心を動かされたよ」

この人、なんかうざいな。廉次郎にあからさまな対抗心を見せている。その顔を廉次郎はあざ笑う。

「相変わらず、人を使うのがうまいことだ。そうかよ、あんたがうちのルールを破ったんなら僕はあんたを潰さなくちやならない」

「そう怒るなよ。ちょうどいい友崎、キミがああ雑魚と相手してやれ」

「分かりました。だけど、彼に勝ったら次は遊介と戦わせてください」

「好きにしな」

突如として始まった友崎と廉次郎のデュエル。彼らは自分のデュエルディスクとDゲイザーをセットした。

iffll20：開発課の誇りと意地をかけた決闘！

「デュエル！」

廉次郎と友崎のデュエルが始まった。

廉次郎：LP4000

友崎：LP4000

「お前、開発課だと落ちこぼれらしいな。宇田先輩から聞いたぞ」

友崎が嫌な言葉を廉次郎に投げかけてくる。いつもはあんな感じじゃないのに……。

確かに言葉が荒いことはあるけど、ここまでひどいことなんてあったか？

「だったらどうした。その落ちこぼれに負けるような事故手札なのか？ なら、僕が先攻だ！ 僕のターン！僕は、ミニチュアルハイパーエージェントを召喚！そして、自分フィールドに『ミニチュアル』モンスターが存在するとき、ミニチュアルジェットを特殊召喚！」

「この瞬間！俺は手札の増殖するGを墓地に送り効果発動！お前が特殊召喚するたび俺はデッキからカードをドロ―する。そして！手札から墓地に送って発動する効果を発動したとき、手札から『アルカデアの魔導師』を特殊召喚する！」

いきなりレベル7のモンスターを相手ターンに特殊召喚？しかも、守備力2500!? 一体、彼のデッキはどういうテーマなんだ？

「僕のターンを邪魔しやがって……。僕はミニチュアルジェットの効果でデッキから『ミニチュアル』魔法・罫を加える！」

「そんなことさせると思ってたんの？ 俺は、手札から灰流うららを捨ててその効果を無効にする！ お前、手札誘発も持ってないのかよ。遊戯王、なめてる？」

「くっ……。考えはしていたがやっぱいらつくな、その戦法」

今のいままで考えてなかったけど、この世界ってカードテキストO C Gのテキストだし出現カードもほとんどO C G化されてるものだ。灰流うららや増Gはあってもおかしくはない。でも、こんなことってあるのか？

「友崎！ いくらなんでもリアリストすぎだろ！」

「これがデュエルだろ、遊介え！ お前は黙ってる！ さらに俺は、手札からアンデット族が墓地に送られたことで『アルカトラズ・アンデット』を特殊召喚！」

また、特殊召喚？ 今度はレベル5のアンデット族？ それに、また守備表示かよ。

「僕は、レベル1ミニチュアルハイパーエージェントとレベル1ミニチュアルジェットでオーバーレイ！」

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシース召喚！ 人に作られし幼獣よ、その小さな体で敵を翻弄せよ！ ランク1！ ミニチュアル幼獣 ベーゼJ r. ！」

「特殊召喚したことにより、俺は1枚ドロ。ありがたいな、落ちこぼれ」

廉次郎の場にはランク1のモンスターが1体のみ。それにそのモンスターの攻撃力は1000。それでどうやって戦うんだ？

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！ お前の番だぞ」

廉次郎は手札を1枚残してターンエンドか。だが、相手の手札は次のドローフエイズ含めて3枚。初手で考えたら少ないが……どうでる。

「俺のターン、ドロロー。俺は、アルカトラス・アンデットのモンスター効果発動！ 自分の魔法・罫ゾーンにカードが存在しないときに1度、墓地からアンデット族1体を特殊召喚できる。俺は、灰流うららを選択！ 俺は、レベル5アルカトラス・アンデットにレベル3灰流うららをチューニング！ 絶望という名の檻から今、魔が解き放たれる！ 脱獄せよ！ レベル8 アルカトラス・デストピア・デーモン！」

「攻撃力3000のモンスターか。中々やるな。だが、妙だな。どうして魔導師は守備表示なんだ？」

「別に、こいつで殴る必要ないし。俺は手札を1枚捨ててアルカトラス・デストピア・デーモンの効果発動！ 相手の手札1枚をデッキの1番下にする！ ただ、お前の手札はその1枚だけだがな！ そして、俺は手札から、永続魔法アルカデアの城門を発動！ このカードの発動処理として『アルカデア』カード1枚を手札に加える。俺は、アルカデアの甲虫番兵を手札に加える。そしてこいつを召喚！ こいつが召喚に成功したとき、自分の墓地の昆虫族1体を特殊召喚できる！ 俺は、増殖するGを特殊召喚！」

「なに？ これで、レベル2のモンスターが並んだ!？」

思わず、叫んでしまった。だが、ここまで来たらもうわかる。あいつは、エクシーズ召喚をする気だ！

「俺は、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エ

クシーズ召喚！ ランク2 聖光の宣告者！ 俺はこいつのX素材  
を使って効果発動。 灰流うららを手札に戻す！」

またこいつ、手札誘発を……。どれだけ相手にゲームをさせたく  
ないんだ！

「面倒なモンスター手札に戻しやがって……。さあ、どこからでも  
かかってこい！」

「一瞬で終わらせてやる！ バトルだ！ 俺は、アルカトラス・デスト  
ピア・デーモンでミニチュアル幼獣 ベーゼJrに攻撃！ この瞬間  
！ アルカデアの魔導師の効果！ 自分フィールド上のモンスター  
1体にこのカードの守備力分の数値を攻撃力に加算する！ さらに  
こいつがいる限り、俺の「アルカデア」「アルカトラス」モンスターが  
バトルするときのダメージ計算は倍になる！」

まずい！ これが通ってしまったら廉次郎のライフは一気に0に  
なって負ける！

「そう簡単に負けてたまるか！ 僕は、ミニチュアル幼獣 ベーゼア  
ンJrの効果を発動する！ オーバーレイユニットをすべてを使い、  
ダメージを0に！ ベーゼアン・バリア！」

すんでのところでダメージは回避したが、廉次郎のフィールドはガ  
ラ空き……。

「だが、モンスターは破壊されたな。これで俺はターン……。」

「まだまだ！ 僕は、ミニチュアル幼獣 ベーゼアンJrが破壊された  
瞬間、速攻魔法『HRUM —ミニチュアル・ビッグ・フォーサー』を  
発動！ 戦闘または、効果によって破壊されたランク1の「ミニチュ

「アル」エクシーズモンスター1体を特殊召喚し、それを素材としてランク10以上の「ミニチュアル」エクシーズモンスターをエクシーズ召喚する！ 僕はランク1のミニチュアル幼獣 ベーゼアンJrでオーバレイネットワークを再構築！ ハイパーランクアップ、エクシーズチェンジ！ 出でよ、ランク10！ ミニチュアル雷撃獣 ザンダー・ジェノス！」

攻撃力3000のモンスターってことは、アルカトラズデーモンと並んだ？

「なに？ ランクアップマジックだと？ だが、このターンに召喚しても意味がないのでは？」

「甘いな。こいつがエクシーズ召喚に成功したとき、相手ライフに2000ポイントのダメージを与える！ サンダー・ブレス！」

友崎：LP2000

いきなりライフを半分に！ 廉次郎まだあんなモンスター隠してたのか。あのデッキすごいポテンシャルを持ったデッキだな。

「いいぞー！ 廉次郎！ がんばれー」

「お前に応援されたくねえ」

相変わらず手厳しいこっぴたい。とにかく、いまはあいつの目を覚まさせないと…………。

「俺はこれでターンエンド。エンドフェイズ時、『アルカデアの城門』の効果発動。デッキから一枚アルカデアと名の付くモンスターを墓地に送る。俺は、アルカデアの奇術師を墓地へ送る。ターンエンド」  
カツツンの手札は2枚。また手札誘発からの特殊召喚コンボか？

「僕の手札はゼロ。フィールドにはエクシーズモンスターのみ。頼みの綱も手札誘発で潰される可能性が高い。だが、僕はここで引くカー

ドで決める！ 僕のターン、ドロー！ 来たぞ！ 僕の切り札！」

廉次郎：LP4000

さすがは廉次郎、引きが強い！

「なに!? 切り札だと？ 自分の力で素引きしたというのか？」

「そうだ。お前の誘発効果も通り抜ける僕自身のデッキと僕の信じる力が！ 僕はまず、ザンダー・ジェノスのオーバーレイユニットを使い効果発動！ デッキから『ミニリチュアル』儀式モンスターを手札に加える！」

「往生際の悪い！ 灰流うららの効果でその効果を無効にする！ どううだ！ これで、お前のエースカード、ミニリチュアルグレートシャインは召喚できない！ これでこのターン、俺が負けることはない！」

「どうだかな？ もしこれが、うららを暴発させるためのブラフだとしたら？」

「儀式以外でどうやってお前のエースを呼ぶんだよ！」

「エースカードは1枚だけじゃない。僕の創ったカード、すべてがエースだ！ 魔法カード、『ミニチュアル・ライズ・フュージョン』発動！ このカードは自分フィールド上に「ミニチュアル」モンスターがいる場合、融合素材はフィールドだけでなく、デッキまたはエクストラデッキの「ミニチュアル」モンスターを素材にできる。僕は、デッキの『ミニリチュアル・グレートシャイン』と『ミニリチュアル・グレートシュバルツ』で融合！ 闇より出でし光の化身！ 大地を震わせ出でよ！ ミニチュアル・グレートフォース！」

「攻撃力、4000？ 宣告者に攻撃して勝つ気ではいるんだろうが、『アルカデアの城門』がある限り、お前はアルカデアモンスターとしかバトルできない」

「4000だと？ よく見てみる。このカードがフィールドにある限り、攻撃力はフィールド・墓地の『ミニチュアル』モンスターの数×500アップする！ 俺の墓地には5枚。フィールドには1枚のモンスターがいる。よって攻撃力は7000！ これで、アルカトラズの魔導師の効果を使ったとしても僕のフォートレスの方が攻撃力は上だ！ バトル、グレートフォースでアルカトラズ・デストピア・デーモンに攻撃！」

「無駄だ！ 墓地に眠る『アルカデアの守護者』の効果！ このカードを除外してバトルフェイズを終了する！」

一進一退のデュエル。いつのまにか握っていた拳にじんわりと汗がにじみ出てくる。



if || 21 : アーク・トライブ・マジシャン

「くそっ……。ターンエンドだ。しぶといやつめ」

まだ数ターンしか経っていないのに激しい攻防が続いている。どちらも譲らず、カツツンにターンが回った。

「俺は正直、キミには用はないんだよ廉次郎。俺は遊介に用があるの。遊介にはこのデュエルの中にカードを作っておいてほしいわけ。だから時間稼ぎになってほしいんだよ。だからもつと頑張っしてほしいなあ」

俺のカード？　もしかして、紫眼の聖装竜のこと知ってるのか？

「しゃべってねえでドローしろ」

「これ以上の茶番はいらない！　俺のターン、ドロー！　ふん、魔法カード『テラフォーミング』発動！　俺は、『アルカトラズの理想郷』を手札に加える！　俺はそのままアルカトラズの理想郷を発動！　理想郷は人それぞれだ。俺は効果処理として、通常モンスター『アルカトラズの看守』を手札に加える。この時、アルカトラズの理想郷のもう一つの効果発動！　自分フィールド上にアルカトラズモンスターがいるとき、この発動を特殊召喚にすることもできる。よって、俺はアルカトラズの看守を準備表示で特殊召喚！　そして、俺は手札から『アーク・トライブ・マジシャン』をアドバンス召喚！　俺の最強の僕にして、理想郷へと運ぶ方舟の使者！　レベル7、アーク・トライブ・マジシャン！」

なに？　レベル7のモンスターを1体のリリースのみでアドバンス召喚だって？

「は？　レベル7モンスターなら2体のモンスターのリリースが必要

だろうが。そっちの方が遊戯王なめてんじゃねえの？」

廉次郎も俺と同じように思っていたらしい。そういうと、カツツンは廉次郎を指さした。

「甘いな！ このカードはフィールドの通常モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚することもできる。アーク・トライブ・マジシャンの効果発動！ お前のモンスターすべてを除外する！ 薙ぎ払え、デープスウェイ！」

廉次郎のモンスターがすべてゲームから除外されていく。彼はなす術もなくフィールドはガラ空きになってしまう。

「まだ、僕にはわからない。どうしてそこまでしてオリジナルカードにこだわる。開発課なら新たなカードを作ることはゲーム性の発展を願って作っている。ゲームをして勝つカードを作るためじゃない。多くの決闘者に新たな世界をみせるためにカードを作っているはずでは」

「心底バカだな、あんたは。ゲームは勝つためにするんだよ。公式だって勝つためのオリカみたいなドラグリーンオブレッドアイズとかいうカードを刷ってんだし……。俺は力が欲しい。だからこのカードを選んだ。カードも強いデュエリストである俺を選んだ！ お前たちではない！ 理想郷を創るのは俺だ！ バトル！ アーク・トライブ・マジシャンで円谷廉次郎、貴様に直接攻撃！ダイレクトアタック アーク・グレイブ・フォース！」

魔法の杖のようなものを手に持った魔法使いのようなモンスターが杖を振りかざすと何千もの光の槍が現れ、それが円谷に降り注いでいく。

「まだまだ！ リバーズカード！ カウンターゲート！」

「アーク・トライブ・マジシャンはそもそも相手のカードの効果を受けない！ 2500のダメージをくらえ！」

廉次郎：LP1500

「まだまだこれからだ！ アルカトラス・デストピア・デーモンの攻撃が残っているぞ！ これで終わりだあ！」

「手札より、ミニチュアルハイパーエージェントの効果発動！ バトルダメージを受けたときにこのカードを手札から捨ててバトルフェイズを無効にする！ イマジナ・リフレクト！ ハイパーエージェントの効果によりフィールドにエージェントトークンを2体出す」

「君もしぶといよ？ ターンエンド」

「僕のターン！」

フィールドにはトークンが2体。そして、魔法罫はなし。俺から見れば圧倒的に廉次郎は不利な状況だ。どうやってこの状況をひっくり返すんだ？

「僕は、手札からミニチュアル・ブレイブウォリアーを召喚！ このカードは召喚に成功したとき、このカードのレベルは10になる！ そして1ターンに1度、自分フィールドのモンスターを2体まで選択して発動する！ そのレベルをこのカードのレベルと同じにする！僕は2体のトークンをレベル10にする！」

「3体のモンスターが並んだということは、やるのか？ エクシーズ召喚を」

「僕はミニチュアル・ブレイブウォリアーとエージェントトータン2体でオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 出でよ、光を借り受け、悪を討て！ ランク10 ミニチュアル・グレートVX！ エクシーズ素材となったミニチュアル・ブレイブウォリアーの効果発動！ このカードがエクシーズ素材としたエクシーズモンスターはカードの効果の対象にならず、バトルでは破壊されない！」

「なに!? ま、まあいいだろう」

「グレートVXの効果発動！ 1ターンに1度、オーバーレイユニットを2つ使用し、自分の墓地の『ミニチュアル』カードを3枚までデッキに戻して発動する！ 相手フィールド上のカードをその戻した枚数分デッキに戻す！ 僕が戻したのは3枚。よってお前のフィールドのモンスター3体をデッキに戻す！」

「…………… これだけ俺が展開したのにまだ巻き返すのか。化け物だろ」

「決闘者としての実力差が露呈したな。どれだけ策を弄しようとも結局はその策に溺れるのみ。戦いは日々進化し、変化する。その中でデッキを作り出すのが僕たちだ！ グレートVXの攻撃力はちょうど2000！ バトルだ！ ミニチュアル・グレートVXで直接攻撃！ ギガンティウムスラッシャー！」

「うわあああああ」

よし、これで勝負ありだ！

友崎：LP0000000000？

「…………… ? なに、デュエルが終わってない？ 何かのバグか？ それとも……………」

「墓地に眠る、アルカデアの奇術師の効果発動……………。このカードが

墓地に存在し、自分のライフが0になった瞬間発動する。ライフを100回復してこのカードを特殊召喚する。これで俺はまだ負けていない！」

友崎：LP00100

「往生際が悪いぞ！ カッツン！」

「デュエルは何が起きるかわからない！ それがお前の口ぐせだったよなあ？ 遊介え！ お前の好きな場面だろ？ 応援しろよ！」

「くっ、ちよつと面白いって思っちゃった俺がいるから下手に言えねえ……」

心の折れそうな俺の心境に対して廉次郎は全く顔色を変えなかった。

「やりたかったことは、それだけか？ 僕は、カードを1枚伏せてターンエンド！」

「こいつ、まだ勝つ気でいるのか？ いいだろう。このターンで終わらせてやる！ 俺のターンドロー！ フン、どうやら勝利の女神は俺に微笑んだようだ……」

カッツンは俺たちに手札を見せてきた。それは先ほど廉次郎のカードの効果でデッキに戻したアーク・トライブ・マジシャンだった。

「だが、お前のフィールドのモンスターはアルカデアの奇術師。どうみても効果モンスターだろ！」

「アルカデアの奇術師でのアドバンス召喚をするとき、このカードを2体分のリリースとして扱うことができる！ アドバンス召喚！ 最強の魔術師よ、いま再び目覚めん！ アーク・トライブ・マジシヤ

ン！」

「こいつ、またモンスター効果を？」

「薙ぎ払え……。ディープスウェイ！」

　　またも廉次郎のフィールドはガラ空きとなつてしまった。伏せカードがあつたとしても、アークトライブマジシャンはバトルフェイズでは効果を受けない。

「くそっ……………」

「バトル！ アーク・トライブ・マジシャンの攻撃！ これで終わりだ！ アーク・グレイブ・フォース！」

廉次郎：LPO

　　デュエルが終了した音が流れ、ソリッドヴィジョンが移していたモンスターたちは消えていった。

「ははははは！ どうだい、どうだい！ 廉次郎くうん！ 宇陀流完全制圧テーマデッキ！ さらにライフが0になつてもバトルが終了しない効果モンスターの実装！ キミのバカなデッキより最高なんだよオ！ 私は、キミを超えた、はるかア！ 上のオ！ デッキビルダーだア！」

「……………なら、俺とのデュエルで証明してみせろよ」

　　デュエリストにも色々な考えを持つ人間がいる。友崎の勝ちたいという心も理解できる。だが、こいつの宇陀宙という人間の心は理解できない。相手のデュエリストを尊敬せず、デッキにも敬意を表しな

い。はつきり言っただ嫌いだ。

「ハア!? 私が、キミとデュエルウ? 意味がわからん」

「どうした、怖気づいたのか?」

「チツ……。まあ、乙闘会に選ばれた戦士ですから? 負けるわけがないですけどねえ!」

「あ? なんだよその塾みたいな名前の組織」

「君はどうしても死にたいみたいですね……。阿久津遊介え!」

宇陀は自分の腕にデュエルディスクをセットしてカッツンを押しつけて現れた。俺のデツキもすでに出来上がっている。今が、『聖装』の力を見せる時だ!

ifll22：儀式ペンデュラム！ 『天紋』の猛襲！

「デュエルディスク、セット！」

宇陀は自分のデュエルディスクを腕に巻き付けるとともに、両目を覆い隠す黒いDゲイザーをかけた。

俺も片目だけだが、青色の半透明なDゲイザーをはめ込めてソリッドヴィジョンARシステムを起動した。

「Dゲイザー、セット！ デュエルターゲット、ロックオン！」

「デュエル！」

掛け声とともに相手のライフポイントが見え始める。両者4000でスタートするスタンダードプレイだ。

久しぶりのスタンディングで、しかも新たなカードを手にした今、俺はどう戦っていけばいいんだ。

自分で作ったのに妙に緊張する。

「ここは、開発課のエリートである私が先攻で、作り上げたデッキでプレイングを見せてやろう。創作とは常にトライ&エラー。これが、その最高叡智！ 私は、スケール6の『天紋のペガサス』とスケール2の『天紋のスワン』でペンデュラムスケールをセッティング！ これで、3〜5のモンスターを同時に召喚可能！ だが、まずは下準備だ。『天紋のペガサス』のペンデュラム効果発動！ このカード以外の『天紋』カードが魔法・罫ゾーンに表側で存在するとき、デッキから『天紋』儀式モンスターを手札に加える。私は、レベル4、儀式ペンデュラムモンスター『天紋のサザンクロス』を手札に加える！」

儀式召喚できる、ペンデュラム召喚だ?! それってオッドアイズ・ペンデュラムグラフ・ドラゴンと同じタイプってことかよ！

「すげー！ なんでもありかよ！」



「褒める箇所はここではない！　ここからが『天紋』のポイント！  
『天紋』儀式ペンデュラムモンスターは手札・EXデッキの表側表示で存在するとき1体だけ儀式魔法なしで儀式召喚できる！　さあ、舞台は整った！　星が集えば標となりて、暗闇の道を照らさん！　ペンデュラム召喚！　現れよ、私のモンスターたちよ！　手札から、レベル4『天紋のアンドロメダ』そして、儀式ペンデュラムモンスター『天紋のサザンクロス』!!」

「共通点は、星座？　面白そうなカードだなあ」

「関心してる場合かよ……」

廉次郎はあきれているが、俺は単純にこのデュエルが楽しくなってきた。新しいカードを見るとワクワクするようなそんな感覚。新しいデッキを手に入れられて、それを早く試したいというワクワク……。これがデュエル！

「私はカードを1枚伏せてターンエンド。さあ、キミの番だよ。阿久津遊介くん」

「俺のターン！　ドロー！　俺は、聖装の魔導士を召喚！　召喚に成功したターン、デッキから「聖装」と名の付くチューナーモンスターを特殊召喚する！　現れろ！　レベル3チューナーモンスター「聖装の翼竜」！　俺は、聖装の魔術師に聖装の翼竜をチューニング！　シンクロ召喚！　聖者の衣纏いし竜よ、その紫の瞳で悪を照らせ！　出でよ、紫眼の聖装竜！　チューナーモンスター「聖装の翼竜」の効果発動！　このカードが『聖装』シンクロモンスターの素材になったとき、デッキから「聖装」装備魔法を手札に加える。俺は「白聖装」を手札に加える。さらに、俺は紫眼の聖装竜の効果！　デッキから装備魔法をこのカードに装備する！　俺は「デーモンの斧」を発動！　さらに、手札に加えた装備魔法「白聖装」を発動！」

「攻撃力を高めても、『天紋のアンドロメダ』がフィールドにあるとき、『天紋』モンスターカードは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージを受けない！ 鉄壁の布陣だ！」

「それは、どうだろうな。俺は、パープルアイズの効果発動！ 1ターンに1度、自分の装備魔法を任意の枚数破壊して発動できる！ 破壊した枚数だけ相手のカードを手札に戻す！ 俺の場には2枚の装備魔法がある！ よって、天紋のアンドロメダと、天紋のサザンクロスを手札に戻す！」

「ふざけるな！ 私の美しいアルゴリズムを崩しよって……。だが、それさえも想定内！ 罫カード発動！ 『天紋刷新』！ 手札の『天紋』モンスターカードを1枚破壊して発動する。デッキからそのカード以外のモンスターを特殊召喚する！ 私は天紋のサザンクロスを破壊し、天紋のケンタウロスを特殊召喚！ 天紋のサザンクロスのモンスター効果発動！ このカードが破壊されたとき、手札からレベル4以下の『天紋』モンスターを特殊召喚する！ 私が持っているのは当然、天紋のアンドロメダ！」

一度手札に戻したのに、盤面は変わらずか……。攻撃力は2000と1800。きついな。だが、俺にはまだやる事が残っている！ 『白聖装』の効果発動！ このカードがカードの効果で破壊されたとき、相手のカード1枚を破壊する！ 俺はペンデュラムゾーンの『天紋のペガサス』を選択！」

「残念だったな。『天紋のスワン』のペンデュラム効果発動！ 1ターンに1度、自分フィールド上の『天紋』カードが戦闘・効果で破壊されるとき、EXデッキの表側表示の『天紋』カードをデッキに戻して発動する！ その効果を無効にする！」

「なに？ まじで無敵の布陣ということか！ バトルしても、天紋のアンドロメダの効果で戦闘では破壊されないし、ダメージを受けない。いや、だがあの効果は『天紋のアンドロメダ』自身は効果の適応外！ バトル！ 紫眼の聖装竜で天紋のアンドロメダに攻撃！ セイントバースト！」

宇宙：LP3300

「ク…………。そのままエンドの宣言しようと思わらないものを…………」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

さて、またアンドロメダが召喚されてしまうのか？ ペンデュラムって本当に厄介だな。

「私のターン、ドロー！ 一気に終わらせてやる！ 私は、天紋のペガサスの効果をもう一度使う！ 私は天紋のキャンサーを手札に加える！ 手札より、マンジユゴッドを召喚！ マンジユゴッドの効果により儀式魔法『天紋環撮』を手札に加える。そして発動！ フィールドの天紋のケンタウロスとマンジユゴッドを生贄にささげ、儀式召喚！ 黄道に光し十二宮がひとつ！ 天紋のキャンサー！」

レベル8の儀式ペンデュラムモンスターか…………。攻撃力は2800と中々。カニのような見た目をしているけど、やっぱりかに座をモチーフとしたモンスターなのか？

「なるほど、儀式テーマでなおかつペンデュラムでのモンスターの大量展開。中々侮れないな」

「ふふふ、そうであろう！ やはり我が頭脳に欠点無し！ さらに私は、セッティング済みの天紋のスワンと天紋のペガサスで再度ペン

デュラム召喚！ EXデッキから現れよ！ 天紋のサザンクロス！」

「EXデッキからのペンデュラム召喚は1ターンに1度のみ。それが俺の命綱になっているとはな」

俺の独り言は完全に無視して宇陀は俺のモンスターにバトルを仕掛ける。

「バトルだ！ 天紋のキャンサーで紫眼の聖装竜に攻撃！ ホロス  
コープシザー！」

「罨発動！ アームズコール！ デッキから装備魔法を1枚手札に加え、そのカードをセットする！ 俺は『黒聖装』を発動！ これにより、パープルアイズの攻撃力は500ポイントアップ！ 攻撃力は3000。なら、こちらの方が上だ！」

「まだだ。天紋のキャンサーの効果発動！ このカードが戦闘するダメージステップ時に発動する。こいつの攻撃力は自分フィールドの『天紋』カード×100アップする！ 今、このフィールドにはこいつを含めて3枚の天紋カードがある。よって、300ポイント天紋のキャンサーの攻撃力に加算される。つまり、攻撃力は」

「3100!?! パープルアイズを上回った!?!」

遊介：LP3900

「ふん。これでお前のエースはいなくなっ……… ていないだど?」

「黒聖装の効果は、このカードが装備されているモンスターが破壊される場合にこのカードをリリースすることで破壊を一度無効にできる。さらに、装備されていたモンスターと同じレベル、またはランクのモンスターをデッキまたは墓地から特殊召喚できる！ 現れよ、人

に作られし偽りの竜よ！ その瞳で悪を一掃せよ！ 紫眼の  
カモフラージュドラゴン  
偽装竜！！」

機械仕掛けの翼と生物的な筋肉がむき出しとなった竜が俺の  
ワールドに現れた。それは紫眼とうり二つのようでまるで違う。  
そして俺は、これから新たなステージへと向かう！

if 23：顕現せよ！ 深紫眼の聖装龍皇（ヴァイオレットアイズ・スコール・プライム・ドラゴン）！

相手ターンながら、俺はレベル7のモンスターを並べることができた。

これで俺は次のステージに上がれることができる！

「次のターン、オレがもっと面白いものをみせてやる！」

「中々やるな！ なら、その神髓見せてみる！ 阿久津遊介！ だが、どうせ勝つのはこの私だろうがな！ カードを1枚ふせてターンエンドー！」

「俺のターン、ドロー!!! お前の勝つための姿勢も、デッキのテーマもどっちも否定できない。逆に俺にない精神でうらやましいとも思うよ。その嫌味な性格以外はな！ 俺は、手札からレベル3聖装の竜騎士を特殊召喚！ このカードは『聖装』シンクロモンスターがいるときに特殊召喚ができる。さらに、手札から、聖装のハイエルフを召喚！ 俺は、聖装の竜騎士に聖装のハイエルフをチューニング！ シンクロ召喚！ 降臨せよ！ 聖竜の意思受け継ぎし騎士！ 竜装騎士ドラグウィバー！」

「新たなレベル6シンクロモンスターか。だが、私の天紋のキャンサーの攻撃力には到底及ばない！」

「だが、それがそうでもないんだなあ。俺はさらに！ フィールドのレベル7紫眼の聖装竜と、紫眼の偽装竜でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！」

「なに？ お前、シンクロ使いじゃないのか!？」

「どうやら宇陀にも俺の使うデッキ構築は大体理解していたのだろ

うが、これからは今までと違う戦術で挑まなくちゃこの世界で生き残れない気がする。なら、俺も進化しなくちゃ。これが俺の最高戦術！

「デュエルは常に進化する！ だから、俺もデュエリストとして進化するんだ！ エクシーズ召喚！ しひもんりよう 紫緋紋綾まといいし、ヴァイオレットアイズ・スコール 黒き竜皇よ、深淵の闇より光見出せ！ 降誕せよ、ランク7 プライム・ドラゴン 深紫眼の聖装竜皇」

「エクシーズモンスターか。攻撃力3000であっても私の天紋のキャンサーは相手に攻撃されたときでも効果が発動する」

「プライムドラゴンが存在するとき、フィールドの「聖装」モンスターの攻撃力は、フィールド・墓地の『聖装』モンスターの数×200アップできる。今、墓地には4体のモンスター、フィールドには2体いる。つまり今のこのモンスターの攻撃力は4200。さらに、エクシーズ素材となったカモフラージュドラゴンの効果！ そのエクシーズモンスターの攻撃力は1500アップする！」

「攻撃力、5700だと!? これはまずいですね」

「バトルだ！ プライム・ドラゴンで天紋のキャンサーに攻撃！ 紫炎のヴァイオレット・ストーム！」

紫色に揺らめく火球が轟音と共に宇陀のモンスターに当たろうとしたその瞬間、その攻撃は消え去ってしまう。まさか、罨カード!?

「読んでいた！ トラップカード 聖なるバリアーミラーフォースー!! 消え去れ、モンスターども！」

「プライムドラゴンの効果！ オーバーレイユニットを1つ使って、

自分フィールドのドラゴン族・シンクロモンスターの戦闘・効果の破壊を無効にする！ 魂の守護！」

「だが、これで攻撃できるモンスターはいなくなった。お前のフィールドのドラグウィバーの攻撃力は2100。到底、天紋のキャンサーには到達できない」

「プライムドラゴンが戦闘・効果で破壊されたとき、墓地からシンクロモンスター1体を特殊召喚できる！ ただし、そのモンスターの効果は無効化される。復活しろ！ パープルアイズ！ そのまま天紋のサザンクロスに攻撃！ セイント・バースト!!」

黄金の輝きがらせん状に広がっていき、天紋のサザンクロスめがけて放たれていく。少しでもライフを削らなくちゃ。俺のライフが尽きないうちに。

宇陀：3300↓2600

「天紋のサザンクロスの効果……。戦闘・効果で破壊されたとき、デッキからこのカード以外の『天紋』儀式モンスターを手札に加える。私に加えるのはア、天紋のリブラ！」

「ドラグウィバーの効果でエンドフェイズに「聖装」魔法・罫をデッキからセットする。カードを1枚伏せてターンエンド……。さあ、また見せてくれよ。お前のペンデュラム召喚」

俺が伏せた永続罫「スコール・デコ聖装飾」は自分フィールドのモンスター1体を対象に、破壊耐性をもたせることができる。これで次の相手ターンくらいはしのげる。

「私のターン、ドロー！ 手札より、魔法カード「天紋流生」発動！ ペンデュラムカードを一枚破壊して発動する。相手の魔法・罫を除外



する。私が選択するのは天紋のペガサスとその伏せカードだ。面倒くさそうだからな」

聖装飾は破壊されたときに墓地の装備魔法をリクルートしてくる効果があつたのだが、それもパーになつてしまった。最悪だ。

「くそ、除外されたらなんの意味もねえじゃん！　ほんと、意地の悪いデツキだな！」

「そして、俺はスケール9の天紋のスコープオンをペンデュラムスケールにセッティング！　これで条件はそろつた！　星が集えば標となりて、暗闇の道を照らさん！　ペンデュラム召喚！　手札から黄道十二宮が一つ、天紋のリブラ！　そして、EXデツキから甦れ！　天紋のキャンサー！」

「二気に上級儀式モンスターが並んだ!?　これが、儀式ペンデュラムの神髓か！」

「まだだ！　天紋のリブラのモンスター効果発動！　1ターンに1度、コイントスを1回行い表なら相手、裏なら私のフィールドのカードをすべて墓地に送らなければならない。さあ、審判の時だ」

破壊ではなく、「墓地に送る」だと？　破壊されたときの効果は適用されないということじゃないか!!

でも、間違えれば自分が被害を被ってしまうんだぞ？　どうしてそんなことを…………。

「自滅でもしたいのか？」

そういう間にもコインは空中でクルクルと回り続けている。  
宇陀はコインを見つめながら

「そうでもないさ。天紋のスコアピオンのペンデュラム効果は「天紋」モンスターはこのカード以外の効果の対象にならない効果を持つ。つまり、裏が出てても被害はゼロ」

そして彼の手元にコインは戻る。その瞬間、手の甲に置き、結果をもう片方の手で伏せる。

開いた瞬間、彼はニヤツと嫌な笑みを浮かべた。

「だが、どうやら勝利の女神は私に微笑んだようだ。コイントスの結果は表だ!!」

「なんだと!?!」

その瞬間、俺のフィールドにあるすべてのモンスターは墓地へと消えていった。これはまずい!

攻撃力2800の二回攻撃が来れば俺は負けてしまう! 万策尽きたか?

「まあ、このとき天紋のリブラは攻撃できないのだがな。私が優しくてよかったですねえ! 天紋のキャンサー! ダイレクトアタック!! ホロスコープシザー!!」

遊介:3900↓700

くそ、天紋のキャンサーの効果はこっちのモンスターあるないに關係なく適応されるのかよ!

でも、これでどうやって戦えばいいんだ!! だが、あのカードさえ手に入れられれば……。

そうだ! この手しか逆転の方法はない!

「風前の灯火、だな。もうサレンダーした方が身のためじゃないか?

あ、でも私はサレンダーなんて認めないけどね。ははは!」

「誰がサレンダーするかよ！　こんなに楽しいデュエル、負けたくねえし降りたくもない！　行くぞ！　俺のターン!!」

このカードは!?　きた！　これで勝利の方程式はそろった！

「墓地の聖装のハイエルフの効果発動！　このカードを除外してデッキからレベル1チューナーモンスターを手札に加える。俺が手札に加えるのは、聖装のシン・クリボー！　このカードがカードの効果でドロートしたとき相手にこのカードを見せて特殊召喚できる！　俺の相棒、聖者の衣纏いて姿現せ！　シン・クリボー！　聖装のシン・クリボーの効果！　デッキ、フィールド、墓地から「シン・クリボー」を除外して発動する。レベルの合計が8になるようにこのカードとデッキの「聖装」モンスター1体以上を墓地に送り、「聖装」と名の付くドラゴン族・光属性シンクロモンスターをEXデッキから特殊召喚する！　俺はフィールドの聖装のシン・クリボーとデッキのもう1体の紫眼の偽装竜を墓地に送り！　シンクロ召喚!!」

「デッキからのシンクロ召喚だ!?　バカな！　ありえない！」

「ありえないことを実現させるのがデュエルモンスターズさ！　神秘の眼輝かせし龍よ！　悪を捌く刃とともに降誕せよ！　神秘眼の聖装刃龍！　さらに、俺は魔法カード、死者蘇生を発動！　死の淵から這い上がれ！　深紫眼の聖装竜皇！」

「攻撃力4400のモンスター？　だが、さっきの方が攻撃力は高かったなあ。それに、シークレットアイズとやらの攻撃力も私のモンスターの攻撃力には到底及ばんなあ」

「魔法カード『スコール・ローブ聖装布』発動！　自分フィールドの「聖装」シンクロモンスター1体ともう1体のモンスターを対象にして発動する。そのシンクロモンスターを装備魔法扱いとして装備する。俺は当然、神

秘眼を選択！ このとき、プライムドラゴンの攻撃力は装備されたモンスターの攻撃力分アップする。よってプライムドラゴンの攻撃力は7400!」

「な、なにい!? 私が、負ける!?!」

「どうやら状況は理解してくれたようだな。バトル！ プライム・ドラゴンで天紋のリブラに攻撃!! 紫炎のヴァイオレットストーム!!」

宇陀・LPO

「うわあああああああ!!!」

これで、俺の勝ちか…………。

あれ、なんか視界がぼやけて…

## if || 24 : 戦いの後で

「知らない天井？」

気づくとそこはベッドの上だった。横には、南禅寺ることが心配そうに見つめていた。

俺は確か、宇陀とデュエルして、確か勝ったんだよな？

「気づいた？ 遊介くん、大丈夫？ 倒れたところ私たちが運んだんだよ？ 覚えてる？」

そういうと、彼女ともう一人が後ろに立っていた。それは、まぎれもなく赤馬零児だった。

「赤馬零児が？ どうして」

「君のデュエルを間近で見っていたのだが、そこにいる南禅寺るこも円谷も病人への処置がなっていなかったため私が運び出した」

「あ、ありがとう。まさかあなたが助けてくれるなんて」

でも一番近くにいたはずの廉次郎がいない。どこにいったんだろう。

赤馬は赤いマフラーを撫でながら椅子に座った。

「病明けで悪いが、君には話さなければならぬことがある」

「話さないといけないこと？」

そう聞くと、赤馬は南禅寺さんの方を向く。

「すまないが、二人にしてくれないか？ 君にこの話は不要だ」

「なんでそんなこと言うの！ オベリスクブルーのエリートだからと  
いって調子に乗らないでよね！」

「…… 円谷、そこにいるのだろうか？ はやく彼女を連れだしてく  
れ」

赤馬がドアの方を向くと、廉次郎がゆらりと姿を現したかと思うと  
ズカズカと保健室に入る。

「指図するな……。いくぞ、るこ」

「でも」と残ろうとする彼女をよそに、ため息交じりに彼女を連れて  
行った。やけに強引だな。

それを見届けた後、赤馬は話始めた。

「例の世界が融合しかかっているという件だが」

「ああ、なんか進捗あつた？」

「海馬コーポレーションと交渉し、デュエリストカーニバルを開催す  
ることにした。そこで敵組織と戦うため屈強なデュエリストを探す」

なるほど、赤馬のやりそうなことだ。確かにそれが手っ取り早いだ  
ろう。

「それが、ランサーズ？ でも、敵も乱入してくるかもよ？」

きつと、これも織り込み済みだろうが聞いておいた方がよさそうだ  
な。

そういう大会こそ、敵がやってくる可能性が高い。

「敵の正体がわからない限り、参入も考えられるがその時は利用する  
までだ。それもランサーズ計画の目的でもある。おそらく、別次元の  
私もそう考えていたのだろう」

「やっぱり、ランサーズの話は自身の記憶じゃなくて誰かから教えてもらったんだね。でも誰から?」

「オレだよ」

突然、窓の外から黄色のライダースーツを着た男が体を乗り出してきた。

そして彼はサングラスを外し、保健室に乗り込んできた。

「あなたは……」

そういうと、おもむろにライダースーツのジッパーを下すと、そこにはデツキか8つも収められていた。この光景どこかで見たことあるような……。デツキが8つ?

「俺の本当の名は、三沢大地。異世界から帰還した男だ」

三沢大地! こいつは、たしかユベル戦の後から異世界に残ると言っで行方が分からなかった人だ。まさか、Dホイラーの真似事をしてるなんて思わなかった。

「十代も危機を察していたが、俺も異世界の守護者として見逃すわけにはいかない。世界は広い。美しい世界を守るため、ようやく完成した8番目のデツキと共にこの異常事態を回避する。君も元の世界に戻るため強力してくれるかい?」

当然、回答は「YES」と言いたい。だが、俺の今の実力で世界なんて救えるのだろうか。これまで負けることはほとんどなかった。でもそれはマグレかもしれない。

「はい、と言いたいところですがまだ自信はありません」

そういうと、赤馬はメガネを直して

「君のタクティクスは評価に値する。だが、君のフィジカルが問題だ。闇のゲームでもないのにデュエルの負荷やDゲイザー酔いしていたら話にならない」

「え、俺酔って倒れたの？」

俺、ださっ……………」

「医者の見解に間違いはない。君は、Dゲイザーシステムの短期間集中の使用によるソリッドヴィジョン酔いだ。その虚弱体質を直さない限り、デュエルは難しいだろうな」

「はあ。やっぱりデュエルマッスルってのは、鍛えねえといかんのか」

「今日はゆっくり休むがいい。私は計画を進めておく。大会が開かれる前に、鍛えておくんだな」

赤馬が保健室にいらなくなると、三沢は腕を組みながらベッドの横にある椅子に座り始めた。

「どうやら君、相当見込まれてるみたいだね」

「俺はどうして、こんなところにきたんでしょうか。何か変えられるのか？」

「確かに君が体験していることは興味深い。俺も君と同じ世界を旅したことがある。そこでは、俺たちがテレビの前でデュエルをしていた。不思議な感覚だったよ。そこじゃ俺も何もできやしない。画面の中の出来事を変えることなどできない」

「……………」



「でも、君はここにいる。君がそのモンスターに選ばれたことと、ここにいることそれらが運命ならきつと変えられる力があるはずさ。じゃあね、君の活躍を期待してる」

そういつて、三沢も保健室を出ていった。それと入れ違いに南禅寺の館が入ってきた。

「なんだか不思議な人たち……。大丈夫？ 遊介くん」

「うん……。ねえ、Dゲイザーで酔ったことある？」

「え？ うーん、あまりないかな。最新のやつだと酔いにくいつて聞いたことがあるけど……。そういう時は海馬コーポレーション開発のブレインズでの訓練がおすすめだつて」

「ブレインズ？ それつて、リンクブレインズのこと？」

「うーん、いや？ 海馬ランドで体感できるVR空間なんだけど、行つてみる？」

ブレインズ、どんな場所なんだろう……。そこで受ける訓練つてどんななんだ？

その話を聞いて少し元気になった俺はベッドから起きて次の授業のために歩きはじめる。だけど、まだフラフラする。

「まだ駄目だよ、起きちや」

「いや、俺もデュエリストである前にこの学校の生徒なんだ。勉強もしないと単位が……」

「そりゃあ、そうだけどさあ」

二人で言い合いをしていると、また一人女の子に抱えられてケガだらけの男が保健室にやってきた。

「もう、しつかりしなさいよね!」

「大丈夫?」

南禅寺さんは女の子とともに男の子をベッドに運んだ。  
男の子の方の髪型、どこかで見たような気がする……。

「ええ、体育でボールに当たっちゃって……。もう、男なんだからしつかりしなさい! ユウマ!」

ゆ、ゆうま? もしかして、九十九遊馬なのか?  
そういえば、抱えてる女の子もどことなく小鳥に似ているよう  
な……。

「君、大丈夫? 意識は?」

るこが心配するように近づくとその腕を振るって

「めだ……。もう、放っておいてくれよ小鳥」

「ちよつと、心配してる人に失礼じゃない! ごめんなさい……」

「いや、別にいいんだけど。どうしてそんな落ち込んでるの?」

「彼、元々はなんにでもチャレンジする活発な子だったんです。でも、自分の大切なものを無くしてからこの調子で……」

「小鳥、もう皇の鍵の話はいいって。僕はもう諦めたんだ」

少し起き上がってみてみると、確かに彼の首元には金色に輝く皇の鍵はない。無くしたのか？それとも、誰かに奪われたのか？

「その落ち込みようは、ただ失くしたってわけじゃなさそうだね。よかったら手伝おうか？」

「あんたには無理だ！ 相手は神代凌牙だぞ!? 街のごろつきデュエリストに勝てるわけがない」

「そんなのやってみなくちゃわからない。そうやって壁をぶち破ってきた君が好きだったんだけどな。わかった、俺が取り返してくる」

俺はベッドから飛び起きて、まだふわつく足を地面に叩き落とすた。

「無茶だよ！ 遊介くん！ 今の君は安静にしなきゃ」

「寝ててもデュエルがうまくなるわけでもねえだろ。俺はこの足がこの地にある限り立ち上がってみるよ。ありがとう、遊馬。力をくれて」

南禅寺はこの心配をよそに俺は、保健室を後にして一人廊下を歩き始める。

if 25 : いざ、海馬ランドへ

ある日俺は突然、遊戯王デュエルモンスターズの世界観がごちゃまぜになったような世界に迷い込んだ。

なんとなく満喫しながらも、元の世界に戻る手伝いをしているのだが、いろんなことに巻き込まれて全く進みやしない。おまけになれないソリッドヴェイジョンで酔って倒れる始末。

「はあ、情けねえよ。俺」

「でも、きっと海馬コーポレーションが建てた海馬ランドに行けば大丈夫だって」

小さくガッツポーズをして俺を応援してくれる南禅寺さん。かわいけれど、学校にいる限りはそれなりにいい点数を取っておきたい。たとえこの世界が夢の世界だったとしても……。

「学校抜け出して、海馬ランドに行くのはなあ」

「授業の一環で行けばいいじゃない！ ほら、これ」

「なんだこれ。デュエルチャレンジカップ？」

その悩みについて考えていると、謎の教師、ダウンケルハイトが海馬ランドでの実地デュエル試験を行うといううわさを聞く。しかもその優勝賞品は鍵のようなシルエットが見えている。

「誰だ？ この引率講師のダウンケルハイトってのは」

「うーん、私もあまりは……」

二人して首をかしげていると廉次郎が腕を組んで現れた。

「この先生、授業めちやくちや暗くて有名だぞ？ 知らないのか？」

「そうなの？ でも、それにしても明るそうな授業だけど」

「授業まともに聞いてくれないからこうやってエサ撒いてんだろ。きつと。で、お前らは参加するの？」

聞かれてもなあ。まあ、自分を慣らすためにも行くしかないのかなあ。

「面白そうじゃない？ やろうよ、遊介くん！」

「え？ うーん。あれ、この優勝賞品の形どこかで」

よく見なくてもわかる。これは、皇の鍵だ！ でも、なんでこんなところに？ すると、保健室から戻ってきたのか小鳥と遊馬がこのポスターを見に来ていた。

「ちよつと、遊馬見てよ！ これ、あなたが失くした皇の鍵じゃない？」

「え？ ホントだ！ いや、でもこんなデュエル、勝てっこないよ」

「そんなのわかんないじゃない！ だったら私出るもん！」

「ええ？ 小鳥があ？ お前、デュエルできんのかよ」

「失礼ね！ アタシだってデュエルできるんだから！」

二人の夫婦漫才は一生聞いていたいが、少し回りに気を遣わなすぎるところが冷や汗をかく。

「お二人さん、ちよつといい？」

「あ、さっきの保健室の人！」

「そーいや、名前言ってなかったね。俺は阿久津遊介。なあ、遊馬。皇の鍵って神代凌牙が持ってたんじゃないのか？」

「奪ったのはそうだけど、そこから行方知れずだよ。きつと、興味を無くして捨てたのかも」

「ありえない話でもないな。行くか、海馬ランド！」

遊馬の肩に手を回して鼓舞するも、まだ彼はいじけている。

ここまで彼が落ち込んでるのは見たことがない。本当に大切なものなんだな。

「僕が足手まといになるかも……」

「役に立たないカードなんてないように、役に立たない人なんていないと思うよ。君のその優しさが強さになって役に立つときがあるよ」

「役に立たない人なんていない……。そう、だね。僕、いやオレやるよ！ 一緒に来てくれるかい？ 遊介」

「もちろん」

かくして、俺と遊馬、小鳥、南禅寺さん、廉次郎はダウンケルハイト主催のデュエルチャレンジカップへ挑むことにした。送迎バスに揺られること小1時間……。

「みなさん、つきましたよ」

弱弱しい語り口調でダウンケルハイトは私たちを案内してくれた。彼は先生というよりコザッキーのようなマッドサイエンティストみを感じる。服装も白衣だし……。

彼はみんなを海馬ランド入り口前まで案内すると、さらに続けて

「これから、みなさんにはこの会場すべてを使いゲームしてもらいます。勝敗はデュエルでもそれ以外でも……。まあみなさんデュエルしか興味ないでしょうが」

言い方は気に食わないが、ここでゲームしてれば単位がもらえるのは本当に楽しい授業だ。座学より全然いい。俺は入り口に向かって走り出す。

「とりあえずジェットコースター乗ろうぜ！」

「おい、遊びできてんじゃねえぞ！」

「廉次郎、固いこというなって」

「あ、遊介さん！」

可愛らしい声に反応すると、そこには小鳥と遊馬だった。彼らはもうすでに楽しんでいたようでポップコーンやらぬいぐるみやらを持っていた。

「どうしたの、それ」

「ゲームってなんでもいいわけでしょ？ だから、射的とかそういうので景品ゲットしちゃいましたー！」

「おい、小鳥ー。半分持ってくれよ。重いんだけど」

「男の子でしょ、それくらい持ちなさいよ。それに、遊馬はここまでなにもしなかったじゃない」

「そうだけど」

「ははは、中々かわいそうなことなってるな」

呆れていると、ジェットコースターの方から二人くらいが歩いてきた。

「誰かと思えば、弱虫やろうじゃねえか。俺からあのペンダント奪おうってのか？」

「かみしろ神代くん……」

一人は神代凌牙だ。遊馬のお守りであり、そして彼の相棒アストラルとの絆である皇の鍵を奪った張本人である。彼は、腕を組み遊馬に対峙する。そしてもう一人は十六夜アキだ。彼女の凍てつく眼光が俺たちを捉えていく。

「奇遇ね。また、あなたたちに出会うなんて……。今度こそ、私の奴隷にしてあげるわ」

アキは、赤色のデュエルディスクを腕にセットし始めた。そうすると、神代凌牙も自分のディスクをセットして彼女に噛みつくような目つきで制止する。

「手えだすな。遊馬は俺の獲物だ。お前もそうだろ、この俺が憎いんだろ？」

「でも、君はもう持ってないだろ。君とは戦いたくないよ」

「そういう甘ったれた感情が昔っからイラつとくるんだよ！ デュエルリストならデュエルで決着つけやがれ！ 遊馬！」

あれ、シャークと遊馬ってそんな昔からのライバルみたいだったっけ？ これも、融合した世界での影響？

「二人は、知り合い？」



小鳥の方を向きながら聞いてみると、彼女はうつむきながらうなずいた。

「うん。というより私たち三人、幼馴染なんです。でも、いつの間にか凌牙くんがシャークって呼ばれるようになってから疎遠になっちゃって……。それから遊馬を目の敵にするようになって…… どうして、こうなっちゃったんだろう」

すると、今度は十六夜アキがサイキックを使って小鳥を宙を浮かせていく。

「小鳥ちゃん！」

「キヤーーー!! 助けてえ! 遊馬!!」

「小鳥い!!! お前! くう……。僕にも勇気があれば……」

彼はずっと下を向いていた。下を向いていたってしようがねえじゃねえか! 俺が、あんたから学んだことを! 教えてやる!!

「かっつとピングだあ! 俺ええええええええ!!」

俺は走り出して何も無いところからジャンプした。宙に浮く小鳥の手をかすかにとらえかけるが、それを察知したのか、アキが力を使ってもつと上にやってしまった。俺は、何もできずに尻もちをついてしまった。

「かっつとピング……?」

「そうだ。何度だつてくじけない、諦めない。挑戦し続ける心、勇気そのもの……それが、かっつとピングだと俺は思ってる。お前のかっつとピングはどうだ? そうやっていじけてなにもしないことか?」

「違う。そうじゃない！ オレだって、小鳥を守る男になる！ おいサイコ女！」

そういうと、アキはとてつもなく鋭い眼光で遊馬をにらみつける。だが、遊馬は立ちすくまずに挑み続ける。

「こ、小鳥を放しやがれ！ そんなにデュエルがしたいなら、やってやる!! デュエルディスクセット！」

「2対1？ やれんのかあ？ お前があ！ 遊馬あ！」

「2対2、これなら文句ねえだろ！ 神代凌牙あ!! Dゲイザーセット！」

俺がデュエルディスクをセットしようとした途端、廉次郎がそれを奪って自分の腕にセットし始めた。

「おい！ それオレのディスク!!」

「あ!!? しまった！ つい、やっちゃった！ お前のディスクが僕のと似ているから悪いんだろうが！」

「もう遅いわ。Dゲイザーはあなた達デュエリストとそのデッキを認識した瞬間、デュエルで勝敗が付くまではその腕から離れないし、デッキも変えることは許されない」

そりやないぜ……。 シャークに因縁があるとはいえ、アクシデントで俺のデッキでタッグデュエルを挑むことになっちゃったが大丈夫か？ 廉次郎。

ifll26：謎のタツグデュエル 遊馬&廉次郎VS  
アキ&シャーク！

勝手に出しやばって、俺のデッキと出番を奪っていった廉次郎。彼はシンクロ召喚を知っているとは思いますが、戦えるのか？他人のデッキで……。

「先攻／後攻はどうする」

廉次郎がじゃんけんしたそうに拳をだそうとすると、シャークはデッキからカードをドローして言い放つ。

「デッキから5枚ドローして一番攻撃力の高いやつを全員言え」

それぞれがデッキからカードをドローして一番攻撃力の高いモンスターを言っていく。

「ゴゴゴゴレム…… 攻撃力1800」

「僕は、聖装の獣戦士。攻撃力1700」

「私は、凜天使 クイーン・オブ・ローズ。 攻撃力2400」

「俺は、ビッグ・ジョーズ。攻撃力1800だ。攻撃力が高いのは十六夜だな。お前からオレ、遊馬、レンジの順番でいいだろ？」

そういうと、廉次郎は少し眉をひそめてシャークを窺める。

「お前がレンジって呼ぶんじゃないやねえ。寒気がする。大体、僕の方が君より年上なんだが!？」

「廉次郎、それは大人げないやつがいうセリフだぞ」

「遊介、お前は黙って観戦してろ！」

「はい」

俺は、キレた廉次郎には口を挟まずにデュエルを見届ける。

十六夜アキ：LP4000

「私のターン！ 手札から、『おろかな埋葬』を発動。デツキから『薔薇恋人』を墓地に送る。そのまま墓地の『薔薇恋人』の効果発動！  
バラ・ラヴァー 手札の植物族モンスター1体を特殊召喚。現れる！ 凜天使 ク  
イーン・オブ・ローズ」

真つ赤なドレスを着た女性が俺たちの目の前に現れたかと思うと、さらに十六夜アキは手札からモンスターを召喚する。

「レッドローズ・ドラゴンを召喚！ そして私は、レベル3レッドローズドラゴンにレベル7凜天使クイーン・オブ・ローズをチューニング！ 沸き立つ怒りが、世界を染め上げる。鮮血の花よ、開け！ シンクロ召喚！ 咲き乱れる！ ブラッド・ローズ・ドラゴン！ レッドローズ・ドラゴンの効果発動。デツキからロクスローズ・ドラゴンを特殊召喚！」

序盤だというのに十六夜アキの展開は止まらない。彼らは現実の俺たちデュエリストや友崎みたいに手札誘発を持ち合わせていないし……。彼らは戸惑いつつもただ見守るしかない。一番戸惑っているのは廉次郎だろうけど。

「ロクスローズ・ドラゴンの効果により『薫り高き薔薇の芽吹き』  
ペーサル・ローズ・シュートを手札に加える。さらに、手札からホワイトローズ・ドラゴンを特殊召喚する！ 私はさらに、ロクスローズ・ドラゴンにホワイトローズ・ドラゴンをチューニング！ 清廉なる花園に芽吹き孤高の薔薇よ 蒼

き月の雫を得てここに開花せよ！ 月華竜 ブラック・ローズ!!  
カードを2枚伏せて、ターンエンド」

続けざまにシャークがドロワーをはじめて不敵な笑みを浮かべる。

シャーク：LP4000

「ほう、シンクロモンスター2体か。中々じゃねえか。じゃあ俺のターンだな！ 俺は、ビッグジョーズを召喚！ 魚族、海竜族、水族が召喚・特殊召喚に成功したときにシャーク・サッカーを特殊召喚する！ オレはレベル3ビッグ・ジョーズにレベル3シャーク・サッカーでオーバーレイ！ エクシーズ召喚！ 出でよ、No.17 リバイス・ドラゴン！ 俺はカードを3枚セットしてターンエンド！」

アキに比べてシャークは少し大人しめの展開となっていた。次は、遊馬だが彼はどう戦いを繰り広げていくんだろう。

遊馬：LP4000

「おれのターン、ドロワー。モンスターをセット。カードを3枚セットしてターンエンド」

「おい！ 事故にもほどがあるだろ！ 君はなんのためにデュエルしてるんだ！」

廉次郎が驚きのあまり、怒りを通り越したかのような口ぶりで話すも彼は一杯一杯になって聞こえていないようだ。そして、問題の廉次郎だ。オレのデッキを雑に扱わないでくれよ？

廉次郎：LP4000

「僕のターン、ドロワー!! 手札からレベル4聖装の獣戦士を召喚！」

こいつは、召喚成功時に手札からレベル4以下の獣族モンスターを特殊召喚できるみたいだな。 なら、僕はレベル4チューナーモンスター・の聖装の霊獣を特殊召喚！ 効果発動！ 霊獣は効果による特殊召喚に成功したときに「聖装」と名の付く魔法・罫カードを手札に加える。なるほど……。これにするか。僕は、「真聖装の儀式」を手

札に加える！　そしてそのまま発動する！　僕は、フィールドの聖装の獣戦士と霊獣をリリースして儀式召喚！　ハイ・スコール・パラディン真聖装の魔導戦士！」

俺がなんとなく作った儀式モンスターだ。カオスソルジャーみたいなノリで作ったけどサイドにいたままだったような……。それさえも使いこなすとはさすが、開発課ってところなのかな。あのモンスターは召喚成功時に「聖装」魔法・罫をセットすることができるが、果たしてどのカードをセットするのか。

「待ちなさい。私は、月華竜ブラックローズの効果を使うわ。　真聖装の魔導戦士を手札に戻してもらおうわ！　ローズ・バレット退華の叙事歌」

「くっ！　だが、そんなことだろうと思っていた。手札より魔法カード『おごそかな聖葬』を発動！　手札を一枚捨てて発動できる。墓地に眠るチューナーを含む1体以上のモンスターをデッキに戻す。その戻したモンスターのレベルの合計の数値と同じシンクロモンスターをシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する！　僕が戻すのはレベル4聖装の獣戦士と聖装の霊獣！　聖者の行進に参列せよ！　一紫眼の聖装亜竜《パープルアイズ・スコール・オルタナティブ・ドラゴン》！」

「おい！　勝手に召喚口上考えるなよ！　しかもめっちゃ短い！」

「これくらいでいいんだよ！　このカードは『紫眼の聖装竜』として扱う。　効果発動！　デッキから3枚装備魔法を相手に見せた後、そのうち1枚を選んでもらう。シャーク、お前が選べ」

シャークは選択された3枚のカードから1枚を選択した。そのカードがオルタナティブドラゴンの装備カードとして装備された。

「さらに、紫眼の聖装亜竜の効果！　自分フィールドの装備魔法1枚を破壊して発動する。相手フィールドの表側表示のモンスターをす

べてデッキに戻す！ 僕はオルタナティブに装備された『白聖装』を破壊して発動！」

なるほど、月華竜の効果はハイスコール・パラディンの召喚時に使用したから使えないし、ブラッドローズ自体も破壊効果に対する効果だから通る！ 中々やるじゃないか！ 俺の召喚口上をけなしたことで以外は。

「オレ達のフィールドがガラ空きに!? 厄介なカード作りやがって！」

「作ったのは僕じゃなくて彼だから。文句言うなら彼に言ってくれ」

確かに作ったのは俺だけど、そんなの言う必要なくない？ そう思っていると、シャークがとんでもない形相で俺を見つめてきた。ええ……………。最悪なんだが。

「続けるぞーバトルフェイズだ！ 僕は、紫眼の聖装亜竜で十六夜アキに直接攻撃！ オルタナティブ・スコールバースト 亜流の聖装散裂弾！」

攻撃力2800のモンスターの力は圧倒的で、十六夜アキをフツとばすほどだった。ダイレクトアタックだから相当のダメージを食らっているはずだ。

十六夜アキ：LP1200

「ダークシングナーである私が……………。神代凌牙！ タッグデュエルなんだからもつと私を守ったらどうなの？」

「フン、自分の身は自分で守りやがれ。俺は5D，sになんて入った覚えはない。ただ、強いやつらと囲まれていればオレも強くなれる。」

そう思っただけだ。実際、オレは大いなる力を手に入れたがな」

「どうやら、この二人は仲間というほどの信頼関係はなさそうだ。そうとはいえ、今のこの二人は強敵だ。しかも遊馬は消極的なデュエルで参加もできていない。」

「これからどうやって戦っていくんだ？」



## if 27：因縁の二人

「僕はこれでターンエンドだ。次は十六夜、君だ」

十六夜アキ LP：1200

廉次郎でやっと一周が終わったみたいだ。タッグバトルって実装されていないけど、こういうターンの長さがネックだな。二週目の秋のターンから、流れが変わっていく。

「私のターンドロロー！ 私は、手札より強欲なル壺を発動！」

強欲な壺のような絵のカードが発動された。効果はやぱりドロローカードってこと？

すると、廉次郎もそのカードにツツコミが入った。

「強欲なル壺？ なんだそりゃ」

「このカードは、自分の魔法・罠カード上のカードの数だけドロローすることができてる！」

相手フィールドに存在していたカードは2枚。ということは2枚ドロローということか……。

強欲な壺に似たカードと思っていたが、なんかルール上『強欲な壺』として扱うとか書いてるぞ？

なんだ、これは。 さらに十六夜アキは先ほどドロローしたカードによって展開をしていく。

「手札より、フィールド魔法地縛神殿発動！ このカードの発動の効果処理によりデッキから地縛神Carayhuaを手札に加える。自分フィールド上にこのカードしかない場合、自分フィールド上に地縛怨霊トークン2体を特殊召喚！ そして、そのカード2枚を使用しアドバンス召喚！ 地縛霊の魂をすすり、出でよ！ 地縛神Carayhua！」

「地縛神コカライアだと!?!」

アキの腕から紫色の痣が発行した途端、フィールドからはカメレオンのような見た目の巨大なモンスターが現れた。これが、地縛

神………。どうして、こんなカードが十六夜に渡ってるんだ？

「コカライアで、九十九遊馬！ 貴方に直接攻撃するわ！」

俺のことなど気にせずには彼らは攻防を続けていく。十六夜の強力な力に対して遊馬は必死にもがいていく。

「ガガガガードナーの効果発動！ 直接攻撃時に自分フィールドに特殊召喚できる！」

「無駄よ。地縛神はあなたしか見ていない。モンスターには攻撃せず、そのまま攻撃！」

「うああああああああああああああああああああああ！」

遊馬LP：1200

手札のガガガガードナーがフィールドに佇むが、守りを固めたとしても地縛神には無駄だった。

でも、遊馬はそれを知らない。当然だ。彼の世界には地縛神は存在しないんだから……。

遊馬は豪快に吹き飛ばされ、地面に這いつくばっていた。

「九十九！ やはり、素人ではどうにもならなかったか。僕一人でもなんとかやるしかない！」

廉次郎が遊馬を切り捨てようとするが、彼はまだ諦めてはいなかった。彼は立ち上がるようにする。

彼は、まだデュエルを続けようと必死なんだ。

「いや、まだだ！ 遊馬の目を見てみる、廉次郎。彼の目はまだ死んではいない！」

遊馬「お、おれだって！ いつまでも負けてられっか！ 罨カード『命削りの希望道』<sup>ホープロード</sup>を発動！ 戦闘ダメージが発生した時に1000ポイントライフを払って発動する。『ガガガ』『ゴゴゴ』『ズババ』『ド

ドド』と名の付いたカードを2枚まで手札に加える。このとき、自分のライフが1000以下の場合、選択したカードを特殊召喚することもできる！ おれはガガガマジシャンとドドドウィッチを特殊召喚！」

遊馬：LP200

「てめえ、ライフが風前の灯火だつてことがわかつてんのか？」

「わかってる。でも、これくらいのことをしないと二人に勝てるとは思えない。だから、これがおれの最後の希望！ そう希望……ホープ……」

だが、廉次郎と同じようにシャークのライフは4000で変わらず……。

これで勝ち目なんてあるんだろうか。

「だが、次はオレのターンで希望を絶望に変えてやるぜ。俺がおまえに終止符を打つてやる！ ドロー！ オレも『強欲ナル壺』を発動！

オレは3枚ドロー！だ！」

「3枚もドローだと？ くそっこんなときにドローを封じるようなカードがあれば……」

廉次郎は頭を悩ませる。当然俺のデッキにはそんな相手のドローを封じるカードなんて入れてない。

ましてや作つてすらいない。眉間を抑える廉次郎にシャークは余裕の笑みを浮かべる。

「ねえなら続けるぜ。オレはコイツを使わせてもらうぜ！ フィールド魔法『カオス・スフィア・フィールド』を発動！ 効果発動！ 自分フィールドにモンスターが存在しないとき、デッキから『カオス』と

名の付く水属性モンスターを特殊召喚する！ 現れる！ 2体の力オス・シャーク！」

「二体のレベル4モンスターが並んだ!? 来るのか？」

お約束のエクシーズ召喚のシークエンスであるブラックホールのようなものが吹き荒れる。

その後、シャークのエクストラデッキからモンスターが出現していく。

「オーバレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 地縛神に仕えし未来の高官 地縛神官ジャーク・カオス！ 地縛神官の効果発動！ オーバレイユニットを二つ使い、手札、デッキから『地縛神』と名の付くモンスターを手札に加える。この時、自分フィールドにフィールド魔法が存在するとき特殊召喚することもできる！ オレは地縛神Cha<sup>チャ</sup>cu<sup>ク</sup>Cha<sup>チャ</sup>il<sup>ル</sup>hua<sup>ア</sup>を特殊召喚！」

「いきなり二体のモンスター!? しかも直接攻撃できる地縛神もいるなんてやばいってー！」

俺が驚くのも束の間、シャークは遊馬をターゲットに定め、攻撃を仕掛ける。

「遊馬！ 一瞬で終わらせてやる！ チャクチャルアで直接攻撃！」

大きなシャチが何もかもを飛び越えて、遊馬にとびかかろうとした瞬間、遊馬はフィールドの罨カードを解放する。

「まだ……。終わらせない！ 罨カード『ワンダーエクシーズ』発動！ フィールドのガガマジシャン、ドドドウィッチ二体でオーバレイ！ オーバレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！ 驚異の鉄壁、顕現せよ ランク4 ゴゴゴゴゴーレム！」

「モンスターを出しても無駄だと言ったはずだ！」

「無駄なんかじゃない！ オーバーレイユニットを持つ守備表示のゴゴゴゴレムがいる場合、必ずこのモンスターに攻撃しなければならぬ！ さらに、このカードは戦闘では破壊されない。おれを守ってくれ！ ゴゴゴゴレム！」

「足掻きやがって、イラつとくるぜ！ なら、効果ダメージを食らえ！ チャクチャクアの効果発動！ 1ターンに1度、このカードの守備力の半分のダメージを相手ライフに与える！」

「さらに、ゴゴゴゴレムの効果！ オーバーレイユニットを一つ使い、効果ダメージをゼロに！」

全然戦えているじゃないか！ 彼のこれまでの自信のなさは何だったのかと問いたくなるが、彼の手はまだ震えているのを見ると、やっぱりまだ怖いんだ。デュエルするのが……。

「くっ、ターンエンドだぜ！」

「神代くん。いや、シャーク！ どうしておれをそこまで嫌うんだ！ 弱い人間に噛みついて何が楽しいんだよ！ 昔の君はもつと優しくて、かつこよくて……そして」

「っせえんだよ！ オレは雑魚狩りしてるからシャークって名前なんじゃねえよ！ オレは昔から強いやつと出会い、噛みつき、勝利を収めてきた。なんにでも勝利にどん欲で鼻が利く。だから獰猛なサメ、シャークなんだよ。オレは一度も弱いやつを叩きのめしたことはねえ。それに遊馬、お前を弱いと一度も思ったことはねえ……。」

遊馬は強い。だから、みんなに好かれていた。俺もその心の強さに

惹かれた。シャークの言い分は納得できる部分もある。遊馬はハツとしてデイスクからカードをドロウした。その瞬間、カードと右手が光り輝いた。これってもしかして、シャイニングドロロー？

「これは!? そうか、オレが忘れていたもの！ これが今できる『カッツとビング』だあああ！ 反転召喚、ゴゴゴゴレム！ そして、ゴゴゴレムとガガガガードナーでオーバードレイ！ 2体のモンスターでオーバードレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 進化せよ、ガガガマジシャン！」

あのカードは！ 確かに、今はナンバーズ以外のモンスターがそろっているから条件も合う。もしや、彼のエクストラデッキには入っているのか？ 未来の皇が！ すると、その二体のエクシーズモンスターがブラックホールのような世界に消えていった。

iffll28：反撃！ 反撃！ 反撃！

「さらにおれは、ランク4ゴゴゴゴゴーレム、ガガガマジシャンでオーバーレイ！ 二体のモンスターエクシードで、オーバーレイネットワークを構築！ 今こそ現れる、FN0・0！ 天馬、今ここに解き放たれ、縦横無尽に未来へ走る。これが俺の、天地開闢！ 俺の未来！ かつとビングだ、俺！ 未来皇ホープ！」

彼の新たな切り札となったホープは彼を守らんと攻撃力0でありながらも威厳を保っている。

遊馬の反撃が始まるのか！

「さらにおれは、未来皇ホープ1体でオーバーレイ！ フューチャーエクシードチェンジ！ これが新たな希望の力！ FN0・0 未来皇ホープ!! 手札からF Z W フューチャーゼアルウエボンカットとビンググリフオンセイバー 我我我流驚獅子聖剣を装備カードとしてホープに装備する！ これにより、ホープの攻撃力は3000アップする！」

「なに？ 攻撃力6000だと!？」

シャークもそうだが、正直俺も驚いてる。戦う意思のある男だとわかってはいたけど、未来龍皇まで召喚してしまうとは！ 遊馬はさらに続けてバトルを仕掛けていく。

「おれは！ 未来龍皇ホープでシャークの地縛神官ジャーク・カオスに攻撃！ ホープ剣 フューチャーロードスラッシュ！」

相手のジャーク・カオスは攻撃力2000。ということは4000のダメージが相手に与えられ、一気に逆転できる！

「させるか！ 畏カード『ダメージ・ダイエット』！このターン受けるダメージは半分になる！ つまり俺が受けるダメージは2000だ

！」

シャーク：LP2000

「まだまだ！ 我我流鷲獅子聖剣の効果発動！ 装備モンスターが相手モンスターを破壊したとき、攻撃力を1000下げてもう一度モンスターに攻撃できる！ シャークの地縛神チャクチャルアに攻撃！  
ホープ剣 フューチャーロードスラッシュ！」

「まだよ！ 罨カード『地縛神の威嚇』！ 自分フィールド上の地縛神モンスターより攻撃力の高いモンスターが攻撃宣言したときに発動できる！ 私のフィールドの地縛神と共にそのカードを手札に戻してもらうわ！ もつとも、EXデッキから召喚されたモンスターはEXデッキに戻ってもらうけどね」

「くっ……。カードを1枚伏せてターンエンド」

だが、これで十六夜アキのフィールドはガラ空きになってしまった。だが、おそらくあの伏せカードは速攻魔法、ベール・ローズ・シユート……。彼女の深き闇をみるような笑みにはゾツとさせられる。だが、次の廉次郎のターンでなにか打開策になるカードを引くことができれば……。

「僕のターンだ！ 僕は、聖装の魔導士を召喚！ 魔導士が召喚されたことで新たなゲートが開かれた、出でよ！ レベル3チューナーモンスター 聖装の双剣士！ 特殊召喚された双剣士の効果！ デッキから2枚まで装備魔法を手札に加える。僕は紫聖装と白聖装を手札に加える」

「これはくるのか!? シンクロ召喚！」

俺の感情のボルテージが最高潮になっていると、それに呼応して廉次郎はEXデッキからシンクロモンスターを召喚した。



「これがお前のデツキだ、遊介！ 聖者の衣纏いし竜よ、その紫の瞳で悪を照らせ！ シンクロ召喚！ いでよ、紫眼の聖装竜!! 紫眼の効果発動！ デツキから青聖装を装備する！ そして、さつき手札に加えた白聖装、紫聖装を装備！ そして効果発動!! 装備カードを3枚破壊！ 十六夜アキの伏せカードと、神代凌牙のフィールド魔法『カオス・スフィアフィールド』と真ん中の伏せカードを手札に戻してもらおう!!」

「フィールドカードがなくなれば、地縛神も自身の効果で消える！ これでシャークのフィールドもがら空きだ！」

廉次郎の前に並ぶ2体の聖竜は、金を差し色にした薄手の衣をひらつかせて相手を見つめる。

後は直接攻撃していくだけだ!!

「すぐにやられてなるものですか！ 速攻魔法『薰り高き薔薇の芽吹き』墓地からホワイトローズドラゴンを特殊召喚」

「そうくると思っていた。破壊された青聖装の効果！ 自分フィールド上のモンスター1体を選んで発動する。僕は、オルタナティブドラゴンを選択！ この時、対象のモンスターは2回攻撃ができる！ 白聖装の効果により、シャークのカードを1枚破壊する！ そして紫聖装の効果発動！ 自分モンスター1体を対象にして発動！ 僕は紫眼を選択する。このとき、対象のモンスターはカードの対象にならない。さらに、選んだカードが紫眼の聖装竜だった場合、攻撃力を1000アップする!!」

効果により、紫眼の聖装竜は3500にパワーアップ!! 神々しさも増していく。

そして、廉次郎はバトルフェイズに移していく。

「バトルだ!!」まずは、紫眼の聖装亜竜でホワイトローズドラゴンに  
攻撃! オルタナティブ・スコールバースト 亜流の聖装散裂弾!」

「くっ! ダークシグナーの力ってこんなものなの?」

「もう一度、オルタナティブドラゴンで攻撃! オルタナティブ・ス  
コールバースト!」

「きゃあああああああ!!」

十六夜アキ：L P O

「あとは、神代凌牙! お前だけだ! 行け、紫眼!! セイントバース  
ト!!!」

「ぐ、あああああああ!!」

神代凌牙（シャーク）：L P O

「やったな! 廉次郎!」

俺がハイタッチをしようとした手をあげるも廉次郎はそれを無視し  
て九十九遊馬に握手を求めようとした。

「ただの弱虫だと思っていた僕を許してくれ。君は立派なデュエリス  
トだよ」

「いやいや、君こそ遊介のデッキでありながら戦いきったなんて強い  
よー!」

こうしてまた一つの友情が俺の前で紡がれた。やっぱりデュエル

モンスターズって面白いな……。

i f l l 2 9 : : i n t o t h e r i n k V R | a  
i n s

デュエルが終わり、小鳥ちゃんが無事解放された。

俺の方も廉次郎からデツキを返してもらえて少しほっとした。

「ほらよ、遊介。僕でなければこんなロマンデツキまともに扱えないぞ」

「いやいや、そこまでロマンじゃないでしょ」

俺は腰に巻いていたデツキホルダーに自分のデツキを戻した。

ふと、シャークとアキの二人に目をやるとシャークはすでに帰ろうとしていた。

「ま、待って！ シャーク！」

「皇の鍵ならオレは持ってねえよ。あれは、ダウンケルハイトって教師に盗まれた」

ダウンケルハイト…………。たしか、このチャレンジカップの主催だったっけ。

さらに十六夜アキがシャークの言葉に続けて話した。

「私たちがここに呼びつけたのも、そのダウンケルハイトって人だった。私たち5D'sの力が知りたいと言って…………。そしたらあなたたちがここに」

ダークシグナーと言っても俺の知っているような人たちとはまた違ったものを感じる。

死人というわけでもなさそうだし、地縛神も生贄を必要とせずにCGルールで召喚されていた。

「そもそも君たちは黒き竜に選ばれたって言ってたけど、なんのために選ばれたの？」

「知らん。オレはこの痣に呼ばれたような気がした。『力を示せ』と。力に飢えていたオレはそれで多くの過ちを犯した」

「私も同じよ」

「なんだろう。『力を示せ』って」

俺は廉次郎に振るも、彼は当たり前だが首をかしげるばかりだ。

俺もそんなことわからんし、考えても仕方ないか……。ふと、周りを見ると、あることに気付く。

「そういえば、南禅寺さんは？」

「ほんとだ！　いない」

小鳥ちゃんがキョロキョロと回りを探すも南禅寺さんの姿は見当たらない。

入り口までは一緒にいたような気がするんだけどな……………。

「あいつ、どこかで迷子になってるんじゃない」

「バスに乗ってた女の人ですよね？　おれたち、探してきます！　小鳥、観覧車の方行ってみよう！　じゃあ、見つかったらデュエルディスクに連絡します！」

「え、デュエルディスクって連絡機能あるの？」

そういうと、廉次郎は俺にデュエルディスクのパネルを見せた。確かに通信履歴が載っている。

「ああ。だが、さつきから応答がない。なにかあったのかもしれない。遊馬の言う通り、手分けした方がよさそうだな」

すると、ダークシグナーである十六夜アキが提案してきた。

「私も協力させて。私のサイコパワーならきつと、役に立てるはず」

意外なことに、彼女はダークシグナーでありながらも正気のようにだ。一体だれが彼らを集めたんだ……。とにかく、今は人手がいる。廉次郎も了承してアキにも手伝ってもらうことにした。

「シャーク、お前も……。つてもういない」

遊馬が少し落ち込むも、踏ん張りをきかせて小鳥の手を握り走り出した。

「僕たちは、リンクブレインズ体験コーナーの方へ行ってみよう。お前のごと気にしてたし、先に向かっているのかもしれない」

「おっけー。十六夜さん、一緒に行きましょう！」

「ええ、よろしくおねがいするわ」

こうして、俺と廉次郎、そして十六夜アキが南禅寺搜索隊として加わり、リンクブレインズ体験コーナーへと足を進めた。途中、トロイホースのメリーゴーランドだったり、ゴーストリックお化け屋敷だっ

たり面白そうなアトラクションがあったが全部廉次郎に禁止された。「んでだよ、そこにいるかもしれんだろ？」

「るこは怖いものが苦手だ。特にお化け屋敷はな」

そうこうしているうちにリンクブレインズ体験コーナーに着いた。

「廉次郎、お前南禅寺さんの写真持ってないの？」

「あ？ 持ってるが、何するんだ」

「いや、十六夜さんに見せないと始まらないでしょうが」

「こいつを信じていいのか？」

「いいから、貸す！」

そういうと、廉次郎はしぶしぶデッキホルダーから一枚の写真を取り出してきた。

「チエキか？ ずいぶんアナログだな」

「別にいいだろ。好きなんだ、こういう写真が」

「ふーん、どうだか……。ま、いいや。十六夜さん、この人探してるんだけど」

俺は、十六夜に写真を渡すとその写真を手で触りながら目をつぶった。何かを感知しているのか？

「たぶん、この中にあると思うわ」

「僕の勘は当たっていたようだな。行くぞ」

中には、VRのゴーグルとともに自信をスキャンするための装置のようなものが置かれていた。

装置は青いサークルのようなもので、なんとなく見覚えがあった。

「これ、デュエルリンクスのデュエルゲートだな。これで、また別の世界にいけるんだな」

「おい！ どうしてお前みたいな一般デュエリストが、デュエルリンクスシステムのことを知ってるんだ？」

俺の話を聞いていた青年が声をかけてきた。青年はどことなく海馬に似てる気がするが、根の明るさがそれを打ち消している。

いや、知ってるも何もデュエルリンクスやってるもんなあ……でも、ここにはそういうアプリゲームとかなさそうだし、どうやって言ったもんか。まあ、ありのまま言ってみるか。

「いやあ、信じてもらえるかわかんないけど俺別の世界から来てるんですよ。で、そこには遊戯王のカードが遊べるアプリがあって……それがデュエルリンクスっていうのなんだけど」

「じゃあ、お前異世界からきたのか！ 赤馬零児から聞いてはいたが、本当だったんだな！ オレ、モクバ。海馬モクバ。ここの運営を任されてる。これでも、海馬コーポレーションの社長代理だぜ！」

あまりの急成長ぶりに気付かなかった。そうか、モクバだから海馬瀬人に似ててもおかしくはない。

にしても、社長代理っていうのはどういう意味なんだ？ 海馬の方はどうしてるんだ？



「代理？　そういえば、モクバってお兄さんいたよね？　お兄さんは？」

「にいさまは今、宇宙で新しいゲームの開発中さ。それより、どうしたんだよお前ら浮かない顔して」

「そうだった！　実は人を探してて、この人なんだけど」

俺は十六夜から写真をもらい、モクバに渡すと首をかしげていたがすぐに思い出し顔が明るくなった。

「おお！　そういえば、こんな感じの子がヴレインズにログインしていったの見たな」

「そうか！　そういえばさ、デュエルディスクのDゲイザーの酔いもヴレインズで治るって聞いたけど」

「ああ。『はじめてのデュエルコース』だな！　ログインすればいろんなコースがあるから見て見るといいぜ！」

「ありがとう！　行こう、廉次郎」

「わかった」

3人でヴレインズへログインできる機材の方へ向かうと、十六夜がハッと声を上げた。

「どうしたの？」

「さっきの子の影を感じる……………。間違いなく、この空間にいるわ」

「本当だろうか？」

廉次郎は、十六夜アキに詰め寄りにらみつけるも彼女は目をそらさずに廉次郎に訴えかける。

「私のことを信用できないかもしれない。でも、私も誰かの役に立ちたいの！」

「………… あんたの力を信頼してみるよ。現状、それしかヒントがねえもんな。行くか」

俺たちは、数少ない足取りを頼りにブレインズへとログインしていく。青いリング状の筐体に入り込み、デッキをセットする。

「デッキ、セット！ パスワードは、i n t o t h e V R A I N S  
！」

音声認識は作動し、目の前がブラックホールのようなものに包まれていく。奇妙な浮遊感とともにログイン待機画面にすぐアクセスできた。そこには初期アバターが見えていた。

『これは、もう一人のあなた。もつと、あなたを変更しますか？』

なるほど、顔や服装を変更できるのか。顔は面倒だがまあ、服装だけでも変えておくか。

服装選択の画面を眺めていると、きぐるみのような全身コーデから初期アバターの来ているサイバテックなスーツの色違いまである。ていうか、プレイメーカーの衣装が初期アバターってなんだか気が引けるなあ…………。ちよつと色変えるか。元々かっこいいし

「よし、選択完了！」

『接続中……。アバターとあなたをリンクします。デツキをすべてサイバースアーカイブに接続します……。ようこそ、リンクヴレインズへ』

「ここが、リンクヴレインズ……。」

あたりを見渡すと、デジタルで再現された空想の街が広がっていた。なんとなく童実野町に似ているようにも見えるが、ダイダロスブリッジやハートランドシテイに立っていた塔も建っていた。

「南禅寺さん探すつたつて、アバターばかりだから探しようがねえよ。しかも、廉次郎も十六夜もないし……。みんなどこ行ったんだよ」

「おまえ、遊介か？」

突然、俺よりも背がでかく筋骨隆々の男が話しかけてきた。ビビツて身を引きつつも名前を聞く。

「だ、だれ？」

「俺だよ、友崎。友崎克広」

「かつつかか？ いや、全然違うだろ」

「現実と違う人間にできるのがこのゲームのいいところだろ？ 有効活用しなくちゃなあ。ところで、なにしてんだよ」

「いや、友達探してて……。廉次郎とか南禅寺さん見てない？」

かつつんに聞いても見てなさそうだが、聞かずして情報は得られない。今は藁をもすがる思いだからな…………。

「………… 知らねえな。この辺探せば、見つかるかもな。それより、久しぶりに俺とデュエルしないか？ この間の試合じゃ消化不良だよ。今度はリンク召喚縛りってことで」

「何言ってるんだよ。俺は、リンクモンスターなんて持ってねえぜ？」

「お前こそ何言ってるんだよ。デツキ見て見ろよ」

俺はかつつんに言われた通りに自分のデツキを確認してみると、なんとEXデツキにリンクモンスターが入っていたのだ。いつの間にか？ しかも全部サイバース族だ。

「α版の時にリンクヴレインズにログインしたバグで、デツキのモンスターがサイバース族になってたんだ。その名残でリンクモンスターがログインしたデュエリスト全員に配布されるようになったんだ。すごいだろ」

「すげえけど、怖い…………。しかも全部俺のモンスターの効果とシナジーの会う新規カードだし」

「ご理解いただいたところで、デュエルだ！ 遊介」

かつつんがディスクを腕にセットした途端、俺の腕に巻かれていたディスクが反応し勝手に展開し始めた。

「え？ 強制なの？ やりたいって一言も言っていないが??？」

「デュエリストなんだから、受けて当然だろ！ 行くぞ！」

「こうなったらやけだ！ 負けても文句言うなよ！」

「デュエル!!」